

『文則』の翻刻（下―前半） 付録 崑崙の鎌倉行遊記

国語科 篠崎 秀樹

昨年度の『紀要』に上巻と跋の翻刻をしたのに続けて、下巻の翻刻と補足を行う。時間の遣り繰りがあまりできず、下巻の前半（己々辛の章のみの注記にとどまった。上巻の注記がいかに簡略だったので補足訂正もしたかったが）できなかった。調べる作業を含めてもともと遅筆なほうだが、さらに遅くなつたように思う。補足は次回まわしにしたい。

『文則』の研究書は中国で出ているようであり、論文等は欧米にもあるらしいので、もっぱら辞書と手近の注釈書に頼っている。この文章の価値はあまりないかもしれない。その注釈書もごく限られたもので、逐一比較検討しているでもないから、総体として翻刻の価値以上に出るものではないに違いない。その代わり、なるべく手間をかけて調べただけ、他の文献にないアイデアも案外見出させるかもしれない。上巻と同じく、調べながら見出だしたことをメモ書きで列挙しておく。（以下、引用文の訓点は筆者。）

○ 徂徠が指摘したように、文則の指摘するのは主に字法・語法のレベルのものである。下の後半において文章論として取り上げるものが出ているが、前半においては助辞の指摘が多い。例文は古代の文献から横断的に拾っているが、同じ出典から続けて引用することも多く、網羅性を主眼としたものではないように見える。語法面で緊密につながるように例文を配列しているので、挙例によつて説得し、必要な補足を加える形で各節をまとめている。

これを見て、現在の注釈書と比べると、読み方の違いに気付かされることがある。たとえば「焉」は終尾詞としてそこで文を区切るのが普通である。それがいくつも連続すると、文としてはうるさいようだ。ところが、例文を見ると並列表現のなかに盛んに現れる。現在の文章感覚ではつなげて読むほうがわかりやすい。宋代でも感覚的には同様であつたらしい。そ

うか、続けて読む場合もあるのか、と思つてその後を見ると、「蔵焉、修焉、息焉、游焉。」と出てくる。さらに「蹠蹠焉、蹴蹠焉。」である。これらはどれも動詞であるから、蔵焉の焉を然のように副詞的用法を表す助字の類と見て流すことはできなくなる。ちなみに手元の有朋堂文庫を見ると、「君子の學に於ける、蔵燕（誤植）、修焉、息焉、游焉たり。」と訓読している。ここはやはり「蔵し、修め、息ひ、遊ぶ。」でなくてはならない。また一歩進めて「息」はイキであり、呼吸するように自己と対象を一体化する、などの解釈がネット上で通行しているが、息をするではなく一息入れる、憩い休む意が自然だろう。文の解析からすれば、なるほどそう読めるのである。

○ 詩経が古代歌謡の詞華集であることを示すのに、助辞の前で脚韻を踏む例を挙げている。「也・矣・忌・兮・之・止・只・且」等の助辞の前で確かに押韻している例を見ると、なるほど歌謡であると納得する。これはとうに詩経の知識になつていようだろう。

○ 「辛」に挙げる左伝の文体例は、抑揚頓挫の骨法を備え、みごとなものが多い。『文章軌範』等との比較まではできないが、挙例や語彙などについても史料的价值を含めて注目できる文章が多い。韓愈の始めた古文復興の伝統をここにも認めることができそうである。

○ 『礼記』の句がよく鍊られたものであることを示すのに、『孔子家語』と比較した一節がある。「夫子爲（二）弗聞也者（一）而過（レ）之ヲ。」（『礼記・檀弓下』、「夫子爲（二）之ヲ（一）隱（二）伴（一）不（二）聞（一）以過（レ）之ヲ。」（『孔子家語・屈節解』）これなどを見ると、たとえば次の文などが先秦古代の簡潔と格調を意識したものであると改めて思わずにいられない。

或曰太兵衛は白州に引き据ゑられた。役人は突然声高く「石盗人都甲太兵衛、最早お構いなし、起て」と宣言した。太兵衛は聞かざるものの如くであつた。暫くしてから役人は改めて宣言した。「都甲太兵衛、石盗人の御疑がはれた、起て」と云つたのである。其時太兵衛は徐に身を起して、白州を下つた。縄取は遽て附いて下がつた。（森鷗外『都甲太兵衛』 大6・1）

『礼記』檀弓篇の簡古な文体を『文則』の作者陳騭は好んだ。「短句之法」に挙げるわずか二三字の文例を見ると、三島由紀夫が『文章読本』でこれも鷗外の『寒山拾得』から「水が来た。」の一文を引いて賛辞を惜しまなかつた有名な話が思い出される。

この「水が来た」という一句は、全く漢文と同じ手法で「水来ル」というような表現と同じことである。しかし、鷗外の文章のほんとうの味はこういうところにあるので、これが一般の時代物作家であると、闇が少女に命じて汲みだての水を鉢に入れてこいと命ずる。その水がくるところで、決して「水が来た」とは書かない。まして文学的素人には、こういう文章は決して書けない。

「水が来た。」は明らかに漢文由来の措辞であろう。そして標準は先秦の簡古素樸を宗とする古文なのである。

○
江北高校にもある『礼記注疏』（漢・鄭玄注、唐・孔穎達疏）の汲古閣本（明・崇禎12年原刊 63巻30冊）は流布本のほとんどが後印（増刷）・後修（改版）本だという。それら版本の一つが紀州家南葵文庫蔵本として東大に移管されており、もと根本遜志（字伯修・号武夷）の校讐本だったのを島田長礼（篁村）が明治期に入手したとある。篁村の子均一による巻末の識語に、「此書校勘精博、頗有鑒識。然不知其出何人。後季弟翰推（この字潰れて画像では判読できず。一注）中庸篇卷末有根遜志之跋。始知爲遜志之校本。僚友山井君幹六藏其遠祖山君彝所校萬曆版十三經正義。其禮記中庸篇卷首有君彝手記年月、遜志所謂享保庚子秋九月廿四日相合。二云々とあり（一）、これに続けて該書は君彝（崑崙）の校本に往々遜志の手校があり、その筆蹟が全く同一なので遜志の校本であることは疑いないと記している。山井幹六名重章・字善甫・号清溪・通称幹六は断絶していた山井家を松崎慊堂が継がせた山井介堂（名璞・字璞輔）の養嗣子である（二）。島田均一とは第一高等学校の同僚だった。璞輔の校語も見えるという崑崙手沢本『十三經注疏』は閩版嘉靖本で、現在京都大学人文科学研究所蔵である。これにも「南葵文庫」の印記があるという。箱入りで、昭和九年狩野直喜による箱書きがあり、璞堂校合の「後の

流伝は必ずしも明らかでない。」（三）とされるが、狩野自身の記すところでは、西條侯の裔孫松平子爵家から購入したものという（四）。山井幹六の所有していた万暦版の崑崙手沢本は閩版と同じく参照本の一つだろうか。

享保庚子（五年一七二〇）九月、三十歳前後の崑崙は十歳近く年下の親友伯修と足利学校を訪れ、上杉憲実が寄附した宋本五経正義のうち礼記卷31中庸篇を校讐した。この時の滞在は短く、翌年三月には江戸青山の「白蓮精舎」（浄土宗関係の寺か。）にいたことが『左伝』巻七の「識語」に見えるという（五）。崑崙は足利に宋板本があることを知り、享保七年（一七三二）八月再び伯修と足利に赴き、九年三月頃まで足掛け三年（実質一年半余り）滞在中に諸本の校勘を行った。前記校本の書き込みによれば（一）、壬寅（七年）冬に伯修が『礼記注疏』を再校している時、崑崙は一緒に足利にいたことになる。その年の冬には崑崙は江戸で『經典釈文』の校勘に従い（五）、やがて藩侯の命令によって病軀を押して『考文』の清書に従い、徂徠の「序」（享保十一年一七二六正月）（六）を冠して写本を西條侯松平頼渡に上呈したようである。

○
徂徠の序から『考文』についていくつかの問題を拾うことができる。序の後半が崑崙・武夷に関係した叙述なので以下に後半の全部を引用する。

上毛之野、有_レ二野参議（小野篁ノ遺址）一。乃チ数百年弦誦（学習）之地ナリ焉。紀人神生（崑崙はもと大神氏）、夙_ニ有_レ二好ム_一。古_ノ癖_一、偕_ニ州人根遜志ナル者_一。往_ニ探_レ之_一、獲_ニ宋本ノ五経正義_一。文具ルコト如クニシテ弇州（王世貞）之言_一、而較_ニ之_一。明_ノ諸本_一、其_ノ所_ニ缺失_一スル、皆有_レ之。紙繆悉得。又獲_ニ七経孟子古本_一、及_レ論語皇疏_一。校_ニスル_一之_一、其_ノ経_一、註頗_ニ有_レ二異同_一。而シテ古時_ノ跋署_一可_レ徴_一。亦唐以前王_ノ段_一・吉備（王仁・段楊爾・吉備真備）諸氏_ノ所_ニ齎_一シタル、存_ニ于_一此_一。而亡_ニ于_一彼_一也。生喜_ニブコト_一如ク二拱璧（大宝を得る）_一、遂_ニ留_ニルコト_一三年、罄_ニ其_ノ蔵_一ヲ一以_ニ帰_一ル。因_{リテ}二積勩（積年の困苦）_一得_ニ疾_一ヲ。紀藩_ノ羽林將公、聞_ニキテ_一而俾_ニム_一三録_ニシテ_一上_ニラ_一。二其_ノ所_一レ校_ニスル_一。生疾更_ニ甚_一ダシキニ、勉

從^{しん}レ事^{こと}、呻^{しん}吟^{ぎん}交^{こう}発^{はつ}シ、不^ずレ能^{あた}ハ辨^{べん}スル^三其^そノ為^たルカ^二何^{なん}ノ声^{こゑ}一、顛^{てん}沛^{はい}以^{もつ}テシ
 レ之^{これ}ヲ、期^き年^{ねん}（満^{まん}一^{いち}年^{ねん}）ニシテ而^な成^{なる}。疾^{やま}モ亦^{また}尋^{じん}イデ差^さ。凡^{おほ}ソ三十^{さんじゅう}有三^{さん}卷^{くわん}、題^{だい}シテ
 曰^いフ「二七^{しち}経^{けい}孟子^{まうし}考^{かう}文^{ぶん}」一。問^とフ二序^{じょ}ヲ于^を茂^も卿^{けい}一。茂^も卿^{けい}既^{すで}ニ悲^{かな}シミ仲^{あやうし}尼^に之心^{しん}ヲ一、
 而^{しか}シテ嘉^{よみ}スル^下生^{せい}之^の善^よク体^{たい}シ^二其^そノ心^{しん}ヲ一、誓^{ちか}ヒテ死^しヲ弗^ず輟^め、卒^{つひ}ニ能^{よく}ク饒^むムル^下ヲ
 （饒は総べ集める意。彝鼎に呼応させたか。）中^{こう}功^{こう}斯^し文^{ぶん}ニ上^{なり}也。又^{また}幸^{さい}トスル^下諸^{しよ}夏^か中^{ちゅう}
 国^{こく}の諸^{しよ}国^{こく}之^の所^{ところ}ニシテ逸^{いつ}スル、而^な独^{ひとり}リ歸^き然^{ぜん}トシテ（高く聳えて）乎^や吾^わガ邦^{はう}ニ一、
 靈^{れい}祇^きノ所^{ところ}レ衛^ゑル、千^{せん}載^{ざい}若^{ごと}ク新^{あら}タナルガ、以^{もつ}テ授^{さづ}ケニ之^{これ}ヲ生^{せい}ニ、而^な寵^{あつ}中^{ちゅう}錫^{しやく}スル^下ヲ（恵
 与^よする）海^{かい}内^{ない}ニ上^{なり}也。嗚^な呼^ふ国家^{こくか}文^{ぶん}明^{めい}之^の化^け、与^よリ有^あル光^{ひかり}哉^や。為^なルニ之^{これ}ガ叙^{じよ}ヲ一
 生^{せい}名^なハ鼎^{かたえ}、字^{あやな}ハ君^{くん}彝^い、先^{まづ}チ是^{これ}ニ自^よリ紀^き齋^{さい}シ^二糧^{りやう}ヲ（束脩を収めたことか）、跋^{はつ}
 渉^{せつ}シテ千^{せん}里^りヲ一、来^{きた}ニ吾^わガ塾^{じやく}中^{ちゅう}ニ。道^{みち}既^{すで}通^{つう}ジ（孟子が五経に通じていたことを謂た語
 を適用する）、以^{もつ}テ二文^{ぶん}学^{がく}（儒^{にう}者^{しや}）ヲ一穀^{こく}スト（俸禄を受ける）ニ于^を将^{しやう}公^{こう}ノ幕^{まく}ニ一云^いフ。

足利学校が小野篁の創設に成るとしたのは「鎌倉大草紙」（『群書類従』、『日本歴史文庫』等所収）の記載⁷以降、江戸時代の俗説になっていたという。恐らく参議であつた篁を「野相公」と呼ぶことから「野之国学」と混同したのもらしい。但徠が探索に行かされたことは序に記載がなく、「州人」根本遜志と崑崙が出かけたところ。評伝では二人が初めて足利を訪れたのが享保五年、根本武夷が護門に入つたのは享保二年ということになっている。しかし、享保一年正月の日付を持つ「序」において「州人根遜志者」とあるのは不可解な表現である。とりわけ、崑崙についてはその校訂の労苦を縷々語つたうえ、「道既通」と孟子に準えて賛辞を惜しまないのと対照的に、崑崙と前後して但徠に入門したはずの伯修に対する称呼としては奇怪とも言える。第一回の訪問が短期間であるとすれば、「七経孟子古本」「論語集解」（皇侃義疏）を見たのは享保七年（一七三二）の第二回訪問の際であろう。伯修が『論語集解義疏』を刊行したのは寛延三年（一七五〇）のことである。校勘の基礎作業は崑崙と同時期であるのに、『考文』清書中に「再校」を行い、さらに二十年以上経つてようやく刊行の運

びになつたわけである。但徠はすでに亡く、服部南郭の序をつけて刊行された。また、『考文』は「三十三卷」あつたというが、現在刊行されている『考文補遺』は一九九卷三三冊である。

次に、「紀藩羽林将公」を紀州藩主徳川宗直とするか、支藩の西條藩主松平頼渡とするか、先行論文に議論があるが、近衛の大中納言に相当する「羽林将公」に該当するのは宗直ということになる。ただし、「序」の後半には「将公之幕」に崑崙があつたことを伝えており、『考文』は崑崙の主公である頼渡に献じられた。

声が別人のように変わったというのは声帯の異変を伴つたということか。崑崙の死因は肺癌とも肺結核ともいわれるが、後者であるとすれば、最期を看取つた妻子が年を逐つて亡くなつたのも同じ病因であつたかもしれない。

最後に見るべきは、崑崙が古本に触れた喜びを語つたくだりである。「夙有好奇癖」と云われた崑崙はこの時、「生喜如拱璧」であつた。「拱璧」とはひと抱えもある大きな璧玉の謂で、七珍万宝に触れた浦嶋のごとき崑崙の像を、全体に大仰な行文の中にも間違いなく但徠は伝えている。

もと但徠の関与があるかといわれるが、享保一三年（一七二八）、但徠とほぼ同時に崑崙が没した後、老中松平左近将監（初代佐倉藩主松平乗邑の命で、頼渡は『七経孟子考文』一部を幕府に献上する（『懐堂日曆』文政八（一八二五）七八の条）。但徠の弟で幕府講官である北溪（名玄覧後観・字叔達・通称惣七郎）らが校訂を命ぜられ、北溪は護門の石川之清（字叔潭・号大凡）、三浦義質（字子彬・号竹溪）、木村晟（字得信・号梅軒）、宇佐美濤水（⁸）らと再校訂を行い、室鳩巢の指導・助力も得ながら年末には校合を終え、翌年浄書献上した。そして刊行費見積り五百二十両余（実際の刊行費は四三七両余の半金については大岡越前守忠相を通して若年寄本多伊予守忠統（号猗蘭）⁹）に申請して公儀の出資とし、享保一六年（一七三二）京都において初めて「西條掌書記山井鼎謹輯」の『攷文』並びに校訂者による『補遺』を刻本として刊行した。一部三三冊、代価銀四五匁（金約三分）として売本一一〇部を刷つた。元亨利貞の四帙、各八冊、一五四〇丁、うち第四冊には

山井の『尚書古文考』を付す⁽⁸⁾。

同年、將軍吉宗は上京してきた日光准后(輪王寺宮公寛法親王)を饗応するに際し、当時學術の標準的文獻である「五經三史文選」(松崎謙堂)に関連して文選と『補遺』を引出物とした。そして朱子も見なかつた古注本を海彼に知らしめようと『明君德光録』、翌年以降数年の間に⁽¹¹⁾長崎奉行に命じ、清國貿易商に購わせた。吉宗はまた清人の嗤笑を避けるため、『觀驚百譚』の著者でもあり能筆で知られた晩年の細井広沢⁽¹²⁾に箱書を書かせたという。そういう次第で、本書は翌年以降中国に渡つた。

中国に渡つた『七經孟子攷文並補遺』が乾隆帝の『四庫全書』に収められるまでの経緯は狩野直喜の文⁽⁴⁾に詳しい。以下に、骨子を孫引きし、若干の補足を付け加える。

享保一六年(一七三二)、太宰春台は『重刻古文孝經(古文孝經孔子伝)』を刊行し、翌年以降、執政沼田侯(黒田直邦か。沼田藩主になつたのは翌年。老中)⁽¹³⁾に頼つて長崎奉行を通じて中国に送つた。大鹽良『覆刻知不足齋叢書古文孝經』跋天明一(七八二)。この時すでに山井の書は唐土に伝わつていたという(山縣周南『校正外台秘要方序』、『周南文集』巻6)。享保一十九年(一七三四)には⁽¹¹⁾、日本に南宗画をもたらし清の貿易商伊孚九(孚仇・梓鳩)が太宰春台の『古文孝經』校本と『補遺』各五六部を購ひ歸つた(大鹽前掲文)。

乾隆二六年(一七六一)、後に『二十四史』の校訂に携わつた杭世駿(字大宗・号重浦)はこれもやがて『四庫全書』の總纂官であり『四庫全書總目提要』の編者となる紀昀(『閱微草堂筆記』著者)の同学翟灝を伴い、南屏詩社の友であつた杭州の藏書家汪啓淑(字慎儀・号秀峯)の文庫である飛鴻堂を訪ねた。翟灝はそこに蔵する『補遺』によつて中国で佚書となつていた『論語集解義疏』(魏何晏注・梁皇侃疏)が日本にあることを知り、後に貿易商で学者の汪鵬(字翼滄・翼蒼・号竹里山人)が同書を購入することとなる。翟灝『四書考異總考』32。また翟灝は乾隆三四年(一七六九)、『四書考異總考』を作成する際、『補遺』を参照した。

乾隆三十八年(一七七三)、乾隆帝が四庫全書館⁽¹⁴⁾を開いた時、汪啓淑は

藏書六百余种を奉つたが、その中に『補遺』があつた(『四庫全書總目提要』巻33 解題)。同じ時にやはり藏書六百余种を奉呈した杭州の藏書家鮑廷博(字以文・号濠飲)は父思詡以来の私文庫である知不足齋の拡充に努めていたが、宋史日本国伝に載せる孝經鄭注を入手すべく懇意の前記汪鵬に依頼した。汪鵬は鄭注の代わりに太宰の『古文孝經』と『補遺』を入手した(汪鵬『日本碎語』、(梁玉繩)『督記』七小序附録)。汪鵬は都合三度長崎に寄り、やがて根本伯修の『論語義疏』をも持ち歸つた。長崎では『四庫全書』編纂の事を説き、日本の学者にもその採集目録を挙げて搜索の依頼をしたことが見える(乾隆三九(一七七四)年の記事。平沢旭山『瓊浦偶筆』、木村兼尚堂『翻刻清版古文孝經序跋引』)。乾隆帝による賞賜を記念して鮑が知不足齋叢書を刊行した時、その中に『古文孝經』『論語集解義疏』が収められた⁽¹⁵⁾が、同時に『補遺』も入手した。

その後も王鳴盛『日本尚文』(『十七史商榷』巻92)は三書の価値を讃え、後に『尚書後案』を作る際の参考書に『補遺』を掲げるなどの評価を示し、呉騫(字槎客・号愚谷)は鮑から借覧した『論語義疏』『補遺』二書を参照して、『義疏参訂』を作るなどのことがあつた。伯修の『論語集解義疏』が注目され校訂の重要な参考書としたのはたのは、これが初めてではなかつただろうか。(『評経楼藏書題跋記』『愚谷文存』)

紀昀の『閱微草堂筆記』(二〇一三 出題)と同じくセンター試験(二〇一六)に出題された『抱經堂文集』の著者で「抱經堂叢書」を編んだ考証学者の盧文弨(字召弓(紹弓)・号檠齋)の文庫抱經楼もまた杭州にあつたが、乾隆四四年(一七七九)、盧は鮑廷博から『補遺』を見せられ⁽¹⁶⁾、經書の校勘について志を新にした。「余有⁽¹⁷⁾志、欲⁽¹⁸⁾校⁽¹⁹⁾經書之誤⁽²⁰⁾。蓋三⁽²¹⁾十年於茲⁽²²⁾矣。乾隆己亥、友人示⁽²³⁾余日本國⁽²⁴⁾人山井鼎所⁽²⁵⁾爲七經孟子孝文⁽²⁶⁾一書⁽²⁷⁾。歎⁽²⁸⁾三⁽²⁹⁾彼海外小邦、猶有⁽³⁰⁾能讀⁽³¹⁾書者⁽³²⁾。」(『抱經堂文集』巻7)盧は又『補遺』の題辞をも著した(同)。その中で、浦鏜(字金堂・号声之)の『十三經注疏正字』(刊年未詳)と併せて『補遺』を参照すべき文獻として認定した。

乾隆六〇年(一七九五)、山東に續けて浙江学政として赴任した阮元は

要するに 一八世紀中頃以降、乾嘉の学として盛んになつた考証学の動きの中で、崑崙の地道な校勘作業が再認識され、今日なお然るごとく海外における名声が日本における崑崙の再認識を促したのである。「西條侯によつて山井家の復興されたのは、勿論それから又數十年も過ぎた後の事である。」⁽⁴⁾と狩野は皮肉な筆致で述べている。崑崙の仕事がいか

○「乾隆の初、江蘇・浙江は、流石人文の淵藪と稱せられし所あつて、藏明君德行録の記者が言つた通り「また上もなき東方の譽」でなければならぬ

『考文』に、崑崙は宋板の重要性を説く。崇禎本『十三經注疏』（汲古閣版）を底本としながら、同じ明の正徳本・嘉靖本（閩版）・万曆本を参照し、足利学校の博士家所伝古写本、宋板『五經正義』を底本と校合した。「正誤」「謹按」とある校訂も率ね古本・宋板に基いて行っているという（5）。『考文』巻13「礼記 曲礼上第一」の「謹按」（注5論文所引）には、注目すべき一文が見える。宋板・正徳版の標題の書き方に触れ、「此等細碎之事諄諄詳言者、臣慕古之念一勝而不顧其煩、以冀下異日有復古之人、彼此斟酌復其舊、以洗俗本之妄作爾。」としているのがそれだ。『鎌倉行記』にうかがえる崑崙の「好古癖」（徂徠『考文』序）を彷彿とさせる件りである。太宰春台が崑崙について、「善六が今まで居たらば、餘程六ヶしき學者になりたらん。」（『護國雜話』）と回顧したという。宇佐美瀧水にはまた「社中にて懼る者なし。崑崙が生存せば懼るべき者なり。」（『雜著』）とも語ったそうである（8）。徂徠の經學と比べて古書籍の復元に限定され、その視野は限られていたとする指摘（5）もあるが、『考文』の作業において宋板の重要性を評価していた崑崙が、陳騭の『文

則『所引の経文の校訂に興味を持ったこと、及び経文の読解・校定において『文則』の指摘する語法・句法を参考になると考えた可能性を想像してもそれほどこじつけにはならないと思う。さらにいえば、徂徠の依頼した『二弁』『論語徴』『大学解』『中庸解』の校訂をも引き受けたのも、こうした関心と無縁ではないだろう。

○ ウィキペディア(Wikipedia)の「wiki」とは速やかに書き換えることができるという意味であるらしいが、「山井崑崙」の項に崑崙が旅行好きで「温泉紀行(箱根紀行)」の著がある、と記載されているのは書き換えが必要かもしれない。現時点でそのような著の存在は確認されていない。評伝に挙げる著書(注釈書)は『考文』以外には『鎌倉紀行』があるのみである。ただし、『考文』巻第十一に『尚書』注疏二十巻に先立ち一卷を割り当てて崑崙の著した『尚書古文考』は、独立した書物として中国で刊行されている⁽¹⁰⁾。これは「著書」として注目されてよい。

李調元の序を引く。「余家有^二日本山井鼎^一講官物觀所^レ著^二七經孟子考文寫本^一。中有^二尚書古文考一冊^一。大抵探^レ下之金石隸篆各書有^レ關^二于尚書^一者、纂^レ而集^レ之、分^レ篇、摘^レ錄、並^レ註^二今文于下^一。誠異本也。余復據^二各書^一、互相校訂、庶^三以補^二各字書之未備^一云。羅江李調元。」講官物觀は幕府儒官北溪荻生觀を指す。『古文考』巻頭に北溪は足利学校所蔵の古文尚書三本の経文の「字體太奇」であることをいい(「凡例」も同じ)、字形の不明なものを韻書等で確認することが十分にできなかったことを述べている。『考文』は中国国内で筆写された写本を所蔵する者が多かったようである。「誠に異本なり。」とあるように、『四庫全書』所収の『古文考』には(編者が巻末に識語を付し、ここに考証した足利文庫本の文字が「蓋以^二僻處^一不文之徒展轉書寫而大失^二其真^一者、不^レ勝^レ惜哉。」としながらも、古代の「科斗」文字のように、書家のいう漢隸・晋隸・隸書・唐隸が「書法」の違いだけでなく「字形」の違いでもあったことを証する貴重な文献であることを指摘する。『尚書古文考』は終始字形の詮索であり、崑崙その人について何かを知る手掛かり

はあるいは草稿本にしか無いかもしれないが、この奇文字の整理のために自らを督励し続けた意気込みを想うべきであろう。

○ 『慊堂先生遺墨』(山下重房 明22・3・30、『日本儒林叢書』正編「史伝書巻部」巻3「東洋圖書刊行会 昭2・4」所収)によると、天保一三年(一八四二)、七十二歳の松崎慊堂は永年の図書校讐の功績を賞され、將軍家慶に目見えを許され幕府儒員(文学)となり、同時に大学頭・真林檉宇(述斎男)を通して「經史古本亡^二於彼^一而存^二於我^一者十餘種^一」(安井衡「号息軒」「跋」を官板として、十万石以上の大名に分担出費させて編輯・発行するという企画に参加した。この「古今之大盛事」(以下、「遺墨」本文からの引用は一々断らない。)に際会した七十二歳の慊堂は「衰老之身」を奮い起こして「後學にも申傳度と存候書目を相認」、林大学頭に上呈した。その校讐と普及によつて『考文』を上回る「御國之光華」たらんとしたのである。そのために「數十年來心掛罷在、今も門人を足利學校に遣置、考文之疎脱之處なご再校いたさせ置候」とも言っている。残念なことにこの企画は実現しなかったが、慊堂がこれにかけた期待は極めて大きかった。

日本での漢学の標準は「大槩五經・三史・文選」と決まっていた。五經とは漢書藝文志以来、「易・書・詩・三禮・春秋三傳・論語・孝經・爾雅・小學類」まで相付して、五經と申^二というのがその内容で、この五までを「九經」、すべて数えて「十三經」と言つても同じだった。この標準は中国では唐太宗・李世民勅撰の『五經正義』までは変わらなかった。ところが、明成祖(永樂帝朱棣)勅撰『五經大全』になると、「春秋左傳を改めて、春秋胡傳を用ひ、漢唐之註疏を捨て、詩朱傳・書蔡傳・禮記陳氏集說と定り候」ことになった。この間の消息を慊堂の門人であり、「遺墨」を出版した息軒・安井衡の説明に従えば、紫陽(朱熹)の学以来、先ず注疏を読み、これを理義に求めて解釈する傾向が一般化したからである。小学などを顧みなくなつたため、古代の典・制・度などは分からなくなつた。何よりも古注が捨てて顧みられず、典籍そのものが失われてしまった。

やがて『十三經』を校刻するが、どれも粗漏を免れず、阮元の『校勘記』

もまた『考文』を大いに参照しながら、宋板の古本注疏を見得ないために往々見当違いの疑義を述べていると評価する。

享保中西條侯之儒者山井善六、足利學校之宋板本を以校正、七經孟子考文を作り、始而五經之正義も可讀之書に相成り候を、清朝へ渡候以後六十年にして、阮元此を珍賞し、彼間中国一注四庫總目提要にも格別に貴重して、阮氏十三經校勘記は全く此書之餘底(御陰注)より出来たる事、誠に皇朝之光輝を發し候事、に御座候得ども、校勘記にも時々此書に滿ぬ事を申出するは、此五經正義を未目睹より起る事に候。

謙堂の企ては結局実現しなかつたので、日本における校勘学の成果として世界に知られたのは『考文』を初めとする護門の輸出書がその主なものとなつた。

○今回、『七經孟子攷文補遺』が辿つた幸運な経路を追尋するために、資料の多くを狩野直喜『支那學文纂』(4)に仰いだ。書き連ねたついでに、驢尾に付して同論文の末尾に載せる「學者論」を孫引きさせていただく。

古昔より我國の學者には二種類がある。一は外國の學問の影響を受けて、之を取次ぎ紹介する人である。支那の文化を受けた奈良又は王朝時代には我國の學問は純然たる唐風であり、鎌倉時代には宋元、徳川時代には明清といふやうに、支那に於ける其時代の學問が順次に我を風靡し、我國の學者は、徒らに之を眞似るに過ぎない。然るに我山井鼎は、何等支那から學問上の影響を受けず、全く自發的に、此大著をなして、それが却つて、彼學界に大なる刺激と影響とを與へたのは、實に偉いと言はなければならぬ。今一つは我國の學者には、往々其學問が我國内に於いて意味があり、我國の或時代に限つて意味があれば、國を離れ時を躰えては意味のないものがある。斷つて置くが、自分は何も國內の學問が悪いとは言はぬ。其國に益あり其時に切なる學問も誠に結構であるが、自分が茲に言ふは學問の中には普遍的の性質を有するものもなくしてはならぬといふので、學問として見れば輕重をつくべきでないといふのである。昔徳川時代に藩札學問といふ言葉があつた。藩札即ち藩の紙幣は其藩の中には通用するが、境外

に出ると全く一片の紙に過ぎぬ。學問に國境なしといふ言葉と、反對の意味である。山井の書は、獨り我國士子の經籍を讀むものに便にしたのではない。苟も經籍を讀まんとするものは、其何如なる國の人でも之に由らざるを得ぬ。従つて其書の價值は國の内外によつて變るものでない。現今注疏を讀む人は、多く阮氏の校勘記により、必ずしも山井の書を一々參酌はせぬ。併し校勘記の大部が、山井の書に負ふ所ありとすれば、注疏を讀む學徒は、何處の人でも今日に至るまで、間接に山井の御陰を受けて居ると言はんければならぬ。山井は實に我國學者の通有性をもたぬ少數者中の一人であつた。

○山井崑崙の作品として伝えられるものは、『攷文』『尚書古文考』を含む。『鎌倉行記』と詩一篇、それに木村晟の淨書した『文則』校注があるばかりといつてもよい。その横顔を伝えるものもまた少いが、鎌倉・江島周遊の旅に同行した安藤東野『遊湘紀事』、および太宰春台『湘中紀行』を併せ讀むことで若干の補足ができる。本文の注釈が進まなかつた埋め合わせのようだが、この儒者たちの短い遊歩の記事を比較しながら、崑崙の側面觀を付け足しておきたい(20)。ただし、二家それぞれのバイアスがかつた記述や記憶の錯誤も多いようであるから、全体としてその人となりと推知する資料としていただきたい。なお、分量が若干あるが、幸いにも紙数に余裕がありそうなので(後で余裕の余りないことが分かり、慌てて調整したため、翻刻文その他の見づらさが増してしまつたが)、付録の形で今回付け足すことにした。これにより、従来断片的に引用されてきた言葉の数々を一覧できる便宜は図れたはずである。無駄と思われる行程の記述も多いかもしれないが、三者の残した記録を継ぎ接ぎしながら、ちようど三百年前の江戸中期、一八世紀初めにおける東海道行遊の有様を眺めてみる興味も捨て難いものがある。歴訪の順序等、細部の誤りがあるかもしれないが、一覽性を重視した。

注記

- (1) 「東京大学総合図書館の漢籍とその旧蔵者たち」―「札記注疏」(<http://www.oldlib.u-tokyo.ac.jp/tenjikai/tenjikai35/k09.htm>)に掲出の画像から判読した。
- (2) 次掲の狩野の文(注4)によると、山井崑崙の伝記として基本資料である本城問亭による行略(漢字)明44・2「問亭遺文」巻5所収)は、もと山井幹六からの聞き書きであるという。
- (3) 古勝隆一「人文研の『たからもの』―関版十三経注疏」(<http://oldwww.zibunkyo-u.ac.jp/shoho/sh47/takara.htm>)
- (4) 狩野直喜「山井鼎と七経孟子考文補遺」『内藤博士還暦祝賀支那学論叢』(弘文堂書房 大正15)のち狩野直喜『支那学文叢』(弘文堂書房 昭23・31)所収)
- (5) 末木恭彦「徂徠と崑崙」(春風社 平28・2・24)。
- (6) 『荻生徂徠』日本思想大系36 岩波書店 昭48・4・10(前掲の阮元による『考文』序に崑崙が校勘の業のためほとんど死にかけたところある記述は、徂徠の序の記述を承けたものと思われる。『徂徠集』(影印江戸時代刊本 ベリかん社 昭60)にも収録。
- (7) 「此足利の學校は、上代承和六年(八三九)に、小野篁、上野の國司たりし時建立の所、同九年(八四二)、篁陸奥守になりて下向の時、此所に學所を建てける由、其舊跡今に残りけるを、應仁元年(一四六七)、長尾景人が沙汰として、政所より今の所に移し建立しける。近代の開山は、快元と申す禪僧なり。今度安房守(上杉憲実)注、公方御名字がけの地なればとて、學領を寄進して、彌書籍を納め、學徒を憐愍す。されば此頃諸國大に亂れ、學道も絶えたりしかば、此所日本一所の學校となる。是れより猶以て、上杉安房守憲實を、諸國の人も譽めざるはなし。西國北國よりも、學徒悉く集る。」(鎌倉大草紙)下、日本歴史文庫8 集文館 明45・1)
- (8) 山井崑崙評伝の根本資料の一つが瀧水叢書中の『雜著』(房総文庫2 昭5)であるといひ、その一篇を『史記会注考証』の編者滝川君山が「如蘭社話」巻49(明45・7)に掲出した。『雜著』には校訂者の名を載せるほかに、徂徠が『弁道』『弁名』『論語徴』『大学解』『中庸解』の校正を崑崙に依頼していたことも見える。
- (9) 『護園録稿』(新日本古典文学大系64 岩波書店)には、享保三年以前に徂徠・安藤東野・秋元淡園と崑崙が西代侯本多猶蘭に招かれ詠詩のことがあり、また年次未詳の崑崙作の唯一の詩を載せているという(森銃三「山井鼎とその七経孟子考文」(『東洋文化』昭8・8・9、『森銃三著作集』第八巻「人物篇」8(中央公論社 昭46・7・25)所収)。なお、『考文』出版に関する費用等の記述をした『享保撰要類集』第11冊の記事も森の文で紹介された。
- (10) 山井鼎『尚書古文考』は胡秉虔『尚書序録』と合刻の影印刊行本が出ている。叢書集成初編中華書局 一九八五・月記載ナシ)。これは清・李調元撰『函海』所収本に拠る。藝文印書館刊行本(一九六八)もある。なお、『七経孟子考文補遺』は今日電子版四庫全書の一部として「ウェイキソース」(ウェイキメディア財団)また「搜狗」(詩詞門戸網站)詩のポータルサイト、archive.orgに公開するファイルを利用している。に公開されている(https://zh.wikisource.org/wiki/七経孟子考文補遺(四庫全書本) <http://gdsou-yun.com/ebookindex.aspx?id=639>)。
- (11) 大庭脩「日本伝存漢籍の中国還流の研究―七経孟子考文補遺と佚存叢書小考」(笠谷編『中国に伝存の日本関係典籍と文化財』国際日本文化研究センター「国際研究集会報告書」17 平成14・3) (<http://publications.nichibun.ac.jp/region/d/NSH/series/kosh/2002-03-29-2/s001/s009/pdf/article.pdf>)。また伊孚九の購得について狩野の推定は寛保二(三年(一七四一〜四三))。これを享保一九年としたのは、同論文による。なお、伊孚九は享保五年(一七二〇)に初めて蘇州から長崎に来日したことが「通航一覽」巻2277に見えている(注4)。
- (12) 箱書の話は日下部高秀『山吹日記』、近藤重蔵『正斎書籍考』、吉田篁墩『近聞偶筆』、松沢老泉『経籍答問』等に載る有名な話柄であつたらしい。広沢の盛名を飾る話だが、森銃三「広沢の書簡」(『森銃三著作集』人物編8 中央公論社 昭46・7・25)に晩年の細井広沢について語った文章がある。
- (13) 古琴を市井に見出だして將軍に献納した話が根岸鎮衛(字も『耳囊』に載る。本多忠統らと同じく吉宗周辺の文化人的政治家の一人)。
- (14) 文淵閣(北京紫禁城、天津閣(熱河離宮)、文源閣(北京郊外円明園)、文瀾閣(盛京奉天(宮城)、文匯閣(揚州大觀堂、文宗閣(鎮江金山寺)、文淵閣(杭州聖因寺))。
- (15) 南川維遷『閑散余録』には『考文』以外の二書の収録について伝えている。
- (16) 狩野は「補遺」の入手から、年も経つてから鮑が慮に示したことに疑問を呈しているが、『補遺』が知不足齋叢書の中に収められていなかったこともその理由の一つであつたかもしれない。
- (17) 序文の引用は GoogleBooks に公開する阮元『定香亭筆談』巻4所収のものに拠った。この嘉慶二年阮元刊本がまもなく逆輸入され、松崎慊堂は入手した一本を自家の掛川文庫に収めた。それに狩谷敏斎が自説や篁墩の説などを書き入れた手沢本がいつか中国に渡り、『大漠和辞典』の編纂者諸橋轍次が中国留学の昔、これも杭州と上海を結ぶ滬杭(上海)線の小駅で汽車を待つ少時に買い求めた。(『館報ひびき』18)現在都立中央図書館所蔵である。都立中央図書館特別文庫係「諸橋文庫の漢籍」同館 二〇〇四・一二・11 http://www.library.metro.tokyo.jp/digital_library/collection/the16/abid/1905/Default.aspx 嶋らの史伝に説くところにも似た古書の不思議な遭遇である。なお、注疏の意味について注とは経を解釈したもので、伝とも箋ともいふ。また疏とは注をさらに敷衍解釈したもので、正義ともいふ。藤井明他『山井崑崙・山泉周南』p.94)という説明がある。
- (18) 「秋刻宋本十三経注疏成。」(清・張鑑等撰「雷塘庵主弟子記」卷五、<https://archive.org/details/02084752.cn>)の記事は嘉慶二十一年(一八六六)である。同書は、阮元の詳細な年譜資料である。その編んだ叢書には「皇清經解」があり、他に詩文集『望經室詩文集』同統集・外集がある。
- (19) 況や晩近の諸先生伊物二氏の著作など、頻りに懇願する由なり。其唐土の諸賢の述作、伊物の説を襲用するに似たるもの有るに至る。七経孟子考文などは必用の書となり、七経考文など断わり、山井某がなご堅く署せしも、近來は考文又は足利本と、直に引用するほどになりたり。文運の盛なる、前古有るべからず。唐山を除き、海内にかく文事の行はれ且つ秀才のある邦は有るべからず。(西島蘭溪「清暑閑談」弘化三(一八四六)、『日本儒林叢書』隨筆部一 所収、東北大学「日本儒林叢書全文データベース」(<http://www2.saitohoku.ac.jp/jurin/>)で検索)
- (20) 「遊湘紀事」(石川之清・山井重鼎・根本遜志・東野遺稿)巻中「国文学研究資料館の館蔵和古書画像のためのリストサービス」(http://www2.dhii.jp/njl_opendata/searchlist.php?nid=thumbs&id=200010105)、ノート・ハブス(HabHub)・デジタル・ハブス(<https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=keio.10811024083>)『湘中紀行』(『春臺先生紫雲園前稿』巻4 国文学研究資料館 新日本古典籍総合データベース http://base1.nijl.ac.jp/view/Framel.jsp?DB_ID=G0003917_KTM&CODE=0026-38203)は今日ネットで見ることができ、崑崙「鎌倉行記」は、(『著者併せて』新編相模國風土記稿』第一集 明治17・3・10 鳥跡蟹行社 <http://dml.ndg.jp/info.ndlp/pdf/763967>)に活字に翻刻して掲載する。ちなみに鳥跡文字は漢字・蟹行文字は横文字を指す。これらの文書も出版普及するといふ意か。

※享保13年、「江戸」若菜屋小兵衛 発兌本に拠る。

文則卷之下

己 凡七條

觀ルニ檀弓ノ之載ヲ一レ事ヲ言簡ニシテ而不疎ナラ、旨深シテ而不晦カラ。雖ニ左氏ノ之富艶ト、敢奮ヒ飛於前ニ乎。略舉テ二事ヲ一以見ス。

世子申生爲ニ驪姫一所譖。或ヒト辯セ之ヲ。左氏載ニ其事ヲ一則曰、「春秋左氏伝・僖公四年」或ハ謂フク太子ニ子辭セヨ。君必辯ゼン焉。太子曰、君非レバ姫氏ニ居不レ安ゼ、食テ不レ飽。我辭セバ、姫必有ラン罪。君老タリ矣。吾又不レ樂。檀弓（礼記・檀弓上）ニハ、則曰、子盍（なほ）レ言ニ子ガ之志ヲ於公ニ乎。世子ノ曰、不可。君安ズニ丁オ驪姫ヲ。是吾傷ルニ公ノ之心ヲ一也。考レ此ヲ則檀弓爲レ優ナリト。穀梁傳載ニ其事ヲ一曰、「春秋穀梁伝・僖公十年」世子ノ之傅里克謂テニ世子ニ曰、入レ自明。入レ自明、則可ニ以生。不レ入レ自明、則不レ可ニ以生。世子ノ曰、吾ガ君已老タリ矣。已昏矣。吾若シテ此而入レ自明、則驪姫必死セン。驪姫死セバ、則吾君不レ安ゼ。若ニ此ノ文ノ一非ニ惟不レニ及ニ檀弓ニ、亦不レ及ニ左氏一矣。

智悼子未レ葬。晉ノ平公飲ニ以スレ樂ヲ。杜蕢謂ラク、大臣ノ之喪重シニ於疾日ヨリ。不レ樂セ。左氏言ニ其事ヲ一則曰、「春秋左氏伝・昭公九年」辰在（あ）ニ子卯ニ、謂ニ之ヲ疾日ト。君徹シニ宴樂ヲ、學人（がくじん）舍ク（を）レ業ヲ。爲レ疾ガ故ナリ也。君ノ之卿佐、是ヲ謂ニ股肱ト。股肱或レ虧クル、何ノ痛カ如レ之。檀弓ニハ、則曰、「礼

※原文の白ヌキ点を句点と読点とに区分・補充した。
※原文ルビはカタカナ。平かなルビは翻刻者が施す。
送りがないの「コト」はそのままの表記とした。
※原文の振り仮名又は送り仮名に適宜濁点を施した。
※原文の要旨は引例と区別してゴシック体で表した。
※「内小書きは翻刻者注記」「は丁付を示す。

宋 天台 陳騷 著
日本南紀 山鼎句讀

記・檀弓下」子卯ニ不レ樂セ。知ニ丁オ悼子在レ堂ニ。斯レ其ノ爲ニ子卯一也大ナリ矣。考レ此ヲ則檀弓爲レ優ント。

○奮飛 詩経・国風・邶風「柏舟」。鳥のように飛ぶ意。○諱（ひそ）そしる、諱言する。○謂（い）之疾日「辰」は十二支の総称。注記に「疾、惡也。紂（ちゆう）ハ以テ「甲子」ヲ喪ビ、桀（ぎやく）ハ以テ「乙卯」ヲ亡フ。故ニ國君以テ爲ス「忌日」ト」とあり、「甲子」の「子」と「乙卯」の「卯」を惡日（忌日）として忌む。○股肱（ここ）「またと」ひじが体の支えの要となることから、頼みとするもの補佐の臣。心膂（しんる）（むねと）「せね」から。○爲子卯也「忌むべきである」と。

鳧脰雖レ短、續（つづ）マシレ之ヲ。則憂ヘ、鶴脰雖レ長ト、斷ツ（き）マシレ之ヲ。則悲ム。檀弓ノ文句、長短有レ法、不レ可ニ増損ス。其ノ類是ナル哉。

○鳧脰雖短「莊子」駢拇に「鳧脰雖モ短シト、續（つづ）ガバ之ヲ則チ憂ヘ、鶴脰雖モ長シト、斷（き）タバ之ヲ必ス悲シム。」とあり、鴨の脚は短いが、脚を継ぎ足したら困ることになり、鶴のすねは長いが、切つたら鶴は悲しむことになる。物の本性に人の手を加えるべきではない意。「鳧」は鴨。○増損（ぞうそん）加除、加減。

長句ノ法

〔礼記・檀弓下〕母（はは）乃（すなは）使（し）下（くだ）〔原文下レ二也〕人ヲ疑ハ夫ノ不シテ以レ情ヲ居（を）瘠（せき）ニ者ヲ上（あ）平（へい）哉。〔礼記・檀弓下〕孰（たれ）カ有（あ）下（くだ）執（しやく）テ二親ノ之喪ヲ一而沐浴シテ佩（ひ）レ玉ヲ者ヲ上（あ）乎。〔礼記・檀弓下〕黃（わう）尚（しやう）ハ不（な）如（ごと）ニ杞（き）梁（りやう）ガ之妻（つま）ノ之知（し）ニ禮（れい）ヲ也。〔礼記・檀弓下〕苟（い）モ無（な）シテ二禮義、忠信、誠（まこと）愨（けつ）ノ之心ヲ一以蒞（いた）ム（こと）。

○母乃：「（粗食をして瘠せることはできても、）よくある、誠意もなく毀瘠の様をなす者であると人に疑わせる結果にならないか。○誠愨（まことけつ）―誠実。

短句ノ法

〔礼記・檀弓上〕華（は）イテ而（を）睨（にら）タリ。〔礼記・檀弓上〕立（た）レ孫（そ）ヲ。〔礼記・檀弓上〕畏（おそ）レ厭（あ）ヌ。

○華而睨―華やかに紋様を描いて麗しい。大夫用の簀（竹製の筵）。「易簀」の故事。○立孫―嫡子が死んだときは、庶子ではなく孫を立てるのが礼だと孔子が教えた語。○畏・厭・溺―死んでも弔問に行かない三つの例。畏は脅迫されて懼れて自殺した者、厭は危殆の地に臨み、土石等の災害で圧死した者、溺は溺死者。「厭」は「エフ」とも読む。「壓（圧）」の本字。

鼓（こ）ヲレ瑟（せつ）不（な）難（がた）カ。難（がた）ズニ於（お）調（てう）ルヲ。作（つく）レ文（ぶん）ヲ不（な）難（がた）カラ。難（がた）ズニ於（お）鍊（れん）ヲ一レ句（く）。檀弓ノ之文、三丁オ練（れん）レ句（く）益（えき）工（こう）ナリ。參（さん）ベテニ之（これ）ノ家語（かご）ニ、其（その）妙（めう）観（くわん）ユ矣（や）。

〔礼記・檀弓下〕遇（あ）ニ負（お）テ杖（しやく）ヲ入（い）レ保（たも）テ者（もの）ノ息（いき）ニ。家語（かご）ニ曰（い）ハ、〔孔子家語・曲礼子貢問〕遇（あ）ニ人（ひと）ヲ入（い）レ

保^{ほう}負^ふ杖^{つゑ}者^{もの}息^い。皆^{みな}死^しス焉^ん。家語^{けご}二曰^い、〔孔子家語・曲礼子貢問〕命^{めい}テ〔命當^{めい}作^{さく}韓^{かん}一頭注^い〕敵^{てき}死^し焉^ん。〔礼記・檀弓上〕比^ひンデ御^{ぎよ}二而不^ず入^い。家語^{けご}二曰^い、〔孔子家語・曲礼子貢問〕可^べシテ御^{ぎよ}而^ん處^{ちよ}レ内^{うち}。〔礼記・檀弓上〕南宮縚^{なんぐうたう}ガ之^の妻^{つま}ノ之^の姑^こノ之^の喪^も。家語^{けご}二曰^い、〔孔子家語・曲礼子貢問〕南宮縚^{なんぐうたう}ガ之^の妻^{つま}ノ之^の兄^{あに}ノ女^{むすめ}ナリ。喪^{さう}二其^{その}姑^こヲ一。〔礼記・檀弓上〕予^{われ}惡^{にく}二夫^か涕^{なみだ}ノ之^の無^なヲ一。從^{しよ}也^{なり}。家語^{けご}二曰^い、〔孔子家語・子貢問〕吾^{われ}惡^{にく}二夫^か涕^{なみだ}シ而^な無^なヲ一以^{もつて}將^{まさ}フ一レ之^のヲ。〔礼記・檀弓上〕仲子亦^{ちよ}猶^{なほ}行^な二古^こノ之^の道^{みち}ヲ一也^{なり}。家語^{けご}二曰^い、〔孔子家語・公西赤問〕仲子亦^{ちよ}猶^{なほ}行^な二古^こノ之^の道^{みち}ヲ一也^{なり}。〔礼記・檀弓下〕夫子爲^ふシテ二弗^ふ聞^き也^{なり}者^{もの}一而^す過^すレ之^のヲ。家語^{けご}二曰^い、〔孔子家語・屈節解〕夫子爲^ふシテ二之^の隱^{かく}シ伴^{はつ}テ不^まマシテ聞^き以^{もつて}過^すレ之^のヲ。〔礼記・檀弓上〕遂^すニ命^{めい}ジテ覆^{かへ}サシムレ醢^{かい}ヲ。家語^{けご}二曰^い、〔孔子家語・子貢問〕遂^すニ令^{めい}二原文^{げんぶん}〔下三〕左^{ひだり}右^{みぎ}一皆^{みな}覆^{かへ}サシムレ醢^{かい}ヲ。〔礼記・檀弓上〕死^しシテハ不^ず如^く二速^{すみ}ニ朽^くルノ之^の愈^よルニ一也^{なり}。家語^{けご}二曰^い、〔孔子家語・曲礼子貢問〕死^しシテハ不^ず如^く二朽^くノ之^の速^{すみ}ナルガ愈^よルニ一也^{なり}。〔礼記・檀弓下〕若^いニ魂^{こん}氣^き一則^{すなはち}無^なレ不^ずレ之^の力^{ちから}也^{なり}。〔下三〕家語^{けご}二曰^い、〔孔子家語・曲礼子貢問〕若^いニ魂^{こん}氣^き一則^{すなはち}無^なレ所^{ところ}不^ずレ之^の也^{なり}。

○家語―孔子家語。○保―保壘。塞。○比御―御を比ならぶれどもと読み、孟献子が除服の際に侍御すべき婦人を付けたが寝所に入らないとする解もある。○從將―賻礼を行い、遺族に金品を贈ることを指す。○夫子爲…―孔子の旧友原壤の母の喪に際して、原壤が木に登つて歌つたのを孔子が聴かぬふりをしたて通り過ぎた故事。○覆醢―塩漬の肉を捨てさせた。子路が衛國で乱に死し、醢にされたことを使者から聞いた孔子の行動。○若魂氣則…―魂は已に従つて郷里に帰ることを望んでいるのだ、意、使者を葬る言葉。

考工記ノ文、權^{くわん}シテ權^{くわん}當^{たう}シテ作^{さく}推^{かへ}一頭注^い而^ん論^{ろん}ズレバ^{なり}之^の蓋^{けし}有^あ二三^{みつ}ノ美^み一。二曰^い雄健^{ゆうけん}シテ而^ん雅^が、二二曰^い宛曲^{わんきよく}シテ而^ん峻^{こん}、三三曰^い整齊^{せいせい}シテ而^ん醇^{じゆん}。略^{りやく}條^{じょう}ス二于^{こゝ}後^{のち}二。

○考工記―周礼冬官考工記。以下同書よりの引用。○權―商權、比較考量。

雄健^{ゆうけん}シテ而^ん雅^が

鄭^{てい}ノ之^の刀^{たう}、宋^{そう}ノ之^の斤^{きん}、魯^ろノ之^の削^{さう}、吳^ご魯^ろノ之^の劍^{けん}、遷^{うつ}シテ二乎^{その}其^{その}地^ちヲ一而^ん弗^ふレ能^{あた}レ爲^なレ良^{りやう}ヲ。

凡^{おほ}爲^{つく}レ弓^{きう}ヲ、方^{はう}シテ二其^{その}峻^{こん}ヲ一而^ん高^{たか}シ二其^{その}柎^ふヲ、長^{なが}シテ二其^{その}畏^{あは}レ畏^{あは}レ鳥^{けい}回^{くわい}反^{はん}一頭注^いヲ一而^ん薄^{はく}ス二其^{その}敵^{てき}一敵^{てき}必^{かならず}世^よ反^{はん}一頭注^いヲ。左氏傳^{さしでん}、春秋左氏伝、襄公 王六年 二曰^い、恤^{うれ}テ二其^{その}患^{けん}ヲ一而^ん據^{たか}二其^{その}闕^{けつ}ヲ、正^{ただ}シテ二其^{その}違^{ちが}ヲ一而^ん治^{をさ}ム二其^{その}煩^{はん}ヲ一。亦^{また}此^{この}法^{ほふ}也^{なり}。

○削―書刀。小刀。○粵―広東省辺の呼称。○拊―附。弓束ゆづか。弓を握る部分。○反―反切はんせつ法。○〇〇切」とも表記する。魏晉時代以降、漢字の発音を表記するために採用された方法、二字で表し、一字めの声(せい)と二字めの韻(いん)で表す。畏(は)「鳥」と「回」の反であるから、wu・huiで wuにに近い音であることになる。○據其闕―「新釈漢文大系」では「補其闕」とする。

宛曲^{わんきよく}シテ而^ん峻^{こん} 〔三丁オ〕

凡^{おほ}攫^{くわく}一攫^{くわく}俱^く博^{はく}反^{はん}頭注^い網^み〔網色界反頭注〕援^{えん}簪^{さん}〔簪意、簪頭注〕ノ之^の類^{るい}、必^{かならず}深^{ふか}シ二其^{その}爪^{つめ}ヲ一、出^いシ二其^{その}目^めヲ、作^{さく}ス二其^{その}鱗^{りん}之^の而^んヲ一、則^{すなはち}於^おレ瞋^{ちん}ニ必^{かならず}撥^{はく}爾^にトシテ而^ん怒^{いか}ル。苟^いモ撥^{はく}爾^にトシテ而^ん怒^{いか}ルマモ、則^{すなはち}於^おレ任^{にん}スルニ重^{おも}ヲ宜^{よろ}ク、且^{かつ}其^{その}匪^ひ色^{しき}必^{かならず}似^にタリ鳴^なニ矣^{なり}。爪^{つめ}不^ずレ深^{ふか}カラ、目^め不^ずレ出^い、鱗^{りん}之^の而^ん不^ずレ作^{さく}、則^{すなはち}必^{かならず}積^{せき}爾^にトシテ如^{ごと}ク委^あスルガ矣^{なり}。苟^いモ積^{せき}爾^にトシテ如^{ごと}ク委^あスルガ、則^{すなはち}加^{くわ}レ任^{にん}ヲ焉^{なり}、則^{すなはち}必^{かならず}如^{ごと}ク將^{まさ}レ廢^{はい}措^そセント。其^{その}匪^ひ色^{しき}必^{かならず}似^にタリ不^ずレ鳴^な矣^{なり}。此文説^{このぶんせつ}二荀^{じゆん}簪^{さん}ノ之^の獸^{じゆ}ヲ一也^{なり}。引^ひテ而^ん信^{しん}レ之^のヲ。欲^ほ二其^{その}直^{ちやく}カラシムヲ一也^{なり}。信^{しん}テ之^のヲ而^ん直^{ちやく}キ、則^{すなはち}取^とレ材^{さい}ヲ正^{ただ}シキ也^{なり}。信^{しん}テ之^のヲ而^ん枉^{かう}ル、則是^{すなはち}以^{もつて}一一方^{いっぺん}ハ緩^{ゆる}ク、一一方^{いっぺん}ハ急^{きふ}ナリ也^{なり}。若^いシ苟^いモ一一方^{いっぺん}ハ緩^{ゆる}ク一一方^{いっぺん}ハ急^{きふ}ナル、則^{すなはち}及^{およ}テ二其^{その}用^{もち}ニ一之^の也^{なり}、必^{かならず}自^{みづか}ニ其^{その}急^{きふ}ナル者^{もの}一先^{まづ}裂^はク。若^いシ苟^いモ自^{みづか}ニ急^{きふ}ナル者^{もの}一先^{まづ}裂^はク、則是^{すなはち}以^{もつて}レ博^{はく}ヲ爲^なレ帳^{ちやう}ト也^{なり}。此文説^{このぶんせつ}レ制^{せい}スルヲ二韋^{わい}革^{かく}〔韋、疑、革、誤一頭注〕ヲ。〔三丁ウ〕

○凡攫…―以下、「梓人」の条に見える。鐘・磬の架け台の作り方を述べる。「考工記」の注に「謂荀簪しゅんきん之獸也。深、猶藏也。作、猶起也。之、而、類、類、音、こつ、こん(頸骨)也」とある。荀は鐘や磬を架ける横木。簪(廣)はそれを支える柱。梓人(しじん)はこれを製作する周代の官。深は中に彫り込む、作は浮き彫りの意。○攫網援簪―爪にかけて獲物を捕らえて殺し、噛みつく類の獸。○鱗―注に「龍蛇之屬」とある。「贏(しよ)」「虎や豹など毛の短い猛獸」「羽(う)」「鳥類と共にモチーフとして筋儀に彫る。○瞋―視る。○撥爾―ぴんとはねる貌。○怒―奮い起つ。○措―注に「措猶頓也」とし、或いは「厝」とする。中途で止まる意。以上、音の響き方とモチーフの表情との関係を述べたもの。○引而信之…―「鮑人」の条に見える。「鮑」は「鞆」と同じで、皮革職人の意。○帳―注に「讀爲翳」とあり、「セン」と読む。「狭」あるいは「浅」の意とする。広く大きいものを浅く狭くする。○韋革―「考工記」注に「韋革」の語が見える。「韋、革」は不明。あるいは「韋(わい)」「文官用の前垂れ」、「鞆(ぼう)」「武官用の前垂れの違いをいうか。

整齊^{せいせい}シテ而^ん醇^{じゆん}

爍^{はく}シテ二金^{きん}ヲ以^{もつて}爲^なレ刃^{やば}ト、凝^かメテ二土^{つち}ヲ以^{もつて}爲^なレ器^きト。棧^{さん}車^{しや}ハ欲^ほシテ二弁^{へん}ナラシムヲ、飾^{しやく}車^{しや}ハ欲^ほシテ二其^{その}聲^{せい}疾^{しやく}クシテ而^ん短^{みじ}キ、則^{すなはち}其^{その}聲^{せい}疾^{しやく}クシテ而^ん短^{みじ}ク聞^{きこ}フマモ、鐘^{かね}小^{せう}ニシテ而^ん長^{なが}キ、則^{すなはち}其^{その}聲^{せい}舒^{しよ}ニシテ而^ん遠^{とほ}ク聞^{きこ}フ。已^ハタ上^{あが}レバ、則^{すなはち}摩^なシ二其^{その}旁^{ぼう}ヲ、已^ハタ下^{くだ}レバ

則摩ス其崙(崙音端頭注)ヲ一。

○凝注に「凝、堅也。」とある。○棧車―覆いや飾りの無い車。注記に「爲三革輓、不堅易圯壞也。土乘、棧車。」とある。○弁―覆う。○飾車―注に「飾車、謂革輓輿也。大夫以上革輓輿」とある。大夫以上の乗る革輓りの車。○鐘大而短…「覺氏(ふく)」「(鐘製作の職人の条。注に「淺則躁。躁易竭也。」「深則安。安難息。」とある。○已上…「覺氏」(警製作の職人の条。○已上あるいは「ハ」なは「タ」と訓ませたものか。注に「鄭司農云、警聲大上、則摩鐸其旁。玄謂大上聲清也。薄而廣則濁。」「大下聲濁也。矩而厚則清。」とある。

春秋ノ文句、長者躡三十餘言、短者止於一言。如下(春秋左氏伝・成公二年)季孫行父・臧孫許・叔孫僑如・公孫嬰齊帥師、會晉郤克・衛孫良父・曹公子首及齊侯二、戰于鞌二之類上、是長句也。如二(春秋左氏伝・桓公五年、他、鱘アリ之類一、是短句也。詩ノ之文句、長者不踰二八言、短者不減二二言一。八言者如下(詩經・小雅・節南山之什・十月之交)我レ不三敢テ效二我ガ友ノ自逸スル一之類上、是也。摯虞ガ云、(摯虞「文章流別論」)詩有二九言一、(詩經・大雅・生民之什「洞酌」)洞酌二彼行潦一挹レ彼注レ茲二是也。然レドモ此當「四丁才」爲二二句一。其ノ說非也。二言ハ者、若二(詩經・周頌・清廟之什「維清」)肇テ禋スル之類一。春秋主トシニ於褒貶一、詩本クニ於美刺一。立言之間、莫不レ有レ法。

○蠡蝗(いなご)。○行潦―にわたずみ。溜り水。○美刺―毀譽に同じ。褒貶は文章の含意として表れ、美刺は詠詩の動機・背景をなすという意。

詩人ノ之用ニ助辭ヲ一辭必多用レ韻ヲ有レ用ニ也。辭ヲ一若二(詩經・國風・邶風「旄丘」)何ソ其ノ處ル也。必有レ與スル一也。處與ヲ爲レ韻。有レ用ニ而ノ辭ヲ一若二(詩經・國風・齊風「著」)俟二我ヲ于著一乎而、充耳以ストイフガ上、素ヲ乎而。著素ヲ爲レ韻。有レ用ニ矣ノ辭ヲ一若二(詩經・國風・周南「卷耳」)陟レバ二彼砮三矣、我ガ馬瘡ストイフカ上矣。砮瘡爲レ韻。有レ用ニ忌ノ辭ヲ一若二(詩經・國風・鄭風「大叔于田」)抑聲控シ忌、抑縱送ストイフガ上。忌、控、送ヲ爲レ韻。有レ用ニ兮ノ辭ヲ一若二(詩經・國風・召南「標有梅」)其ノ實七兮、迨ベトイフガ上。中其吉ニ兮。七、吉爲レ韻。有レ用ニ之ノ辭ヲ一若二(詩經・國風・鄭風「女日鷦鳴」)知ラバ二子ガ之順一レ之ヲ、雜佩以問ランノ上レ之ニ。順、問爲レ韻。有レ用ニ止ノ辭ヲ一、如二(詩經・國風・齊風「南山」)既二日三庸フ止。曷ソ又從フガ上。止。庸、從爲レ韻。

止ハ即チ只ナリ。鄘・柏舟ノ詩、亦用テ只ヲ爲レ辭。離騷有「大招」、用二只、辭一、蓋法ル乎此。二「四丁」有レ用ニ且ノ辭一、若二(詩經・國風・唐風「椒聊」)椒聊且、遠條アリノ一。且、聊、條爲レ韻。如二四句六句一、者多矣、今不備載一。

○充耳―耳飾り。○素―白絹・白。○陟―登る。進ませる。○罽―石山。○警控―警は馬を走らせる、控は手綱を控える意。○縱送―矢を放つ意。○迨其吉―婚期を逃さぬうちにやつて来い、の意。○雜佩―佩玉の類。○問―贈る意。○庸―嫁嫁している。○從―追いつがる。○鄘の柏舟の詩、詩經・國風・鄘風「柏舟」。「母也天只、不諒人只」「母や天や、人を諒せず」「思ひ進ることかな」の例がある。○離騷―楚辭、離騷「大招」はその一篇。○椒聊―山椒、はじかみ。聊は意味のない助字。○遠條―繁茂する貌。子孫の多いことを喩える。

又禮記非ニ詩人ノ之文ニ助辭ノ之上、亦有二韻協一。如キレ曰ガ下、禮行レテ於郊二而百神受ケレ職ヲ焉、禮行レテ於社二而百貨可ク極ム焉、禮行レテ於祖廟二而孝慈服シ焉、禮行レテ於五祀二而正ス二法則一焉ト、此則用ニ焉辭一、而職極・服則爲レ協ト。孔穎達ガ曰、詩章ノ之法、不常セ二厥體一。或ハ重章共ニ述二一事一。〔詩經・國風・召南「采芣」〕采芣之類、或ハ一事疊テ爲二數章一。〔詩經・國風・召南「甘棠」〕甘棠之類、或ハ初同シテ而末異ナリ、〔詩經・小雅・鹿鳴之什「出車」〕出車之類、或ハ首異シテ而末同ジ。〔詩經・國風・周南「漢廣」〕漢廣之類、或ハ事訖テ而更ニ申ベ之類。或ハ首異シテ而末同ジ。〔詩經・國風・周南「漢廣」〕漢廣之類、或ハ事訖テ而更ニ申ベ之類。或ハ隨テ時ニ而改メ色ヲ、〔詩經・小雅・魚藻之什「何草不黃」〕何草不黃也。或ハ因テ事ニ而變シテ文ヲ、〔詩經・大雅・文王之什「文王有聲」〕文王有聲也。或ハ一章ニシテ而「五丁才」再ビ言、或ハ三章ニシテ而一ビ發。〔詩經・國風・周南「采芣」〕采二采芣一、〔詩經・小雅・甫田之什「實之初筵」〕實之初筵ツツナリ。篇有二數章一、章句ノ衆寡不レ等カラ、章有二數句一、句ノ字ノ多少不レ同カラ、包二括スル二詩ノ體一、孰カ踰シ二此說一。故ニ特ニ取ル焉。

○孔穎達が曰、…「毛詩正義」の説(「十三經注疏」収録)。

庚 凡二條

文有三數句用ニ一類ノ字ヲ一。所下以壯ニシニ文勢ヲ一、廣ムル中義ヲ上レ也。然レドモ皆

○勞・来ともにねぎらう意。○艮・兌・乾・坤一八卦（乾兌離震巽坎艮坤）。○可規……車輪の製作法を述べた文という。計測して歪みを正し、水に漬けて偏りを見、両輪の軽重を比較して正確を期す意。権は秤。

○可貴^ム―君に対して臣下である自身をの意以下、臣下の身として生殺与奪の權を君主に委ねなければならぬが、「亂を爲さしむべからず。」とあり、賢不肖を倒置させてはならないの意。

○興一詩は勸懲の意を寓するので善を勧め悪を惡む心を興させる、という含みで諸書「おこす」と訓ずるが、こでは單純に「興す」と読む。○怨む一ものあわれを歌う。○月令一「ぐわつりやう」とも読む。○高明一樓閣。○台榭一高殿。○仲夏登高の風があつたものか。

○大赤 赤は陽の色。以下、乾の象を比喩で説明したもの。
○木果 丸く、上にあることを木の実の如しとしたという。
○同調する。○蹶 躓く。○和す 相手に逆らわない。
○駁馬 虎豹にも噛みつく馬。
○就く 相手に従う。○入る
○出づ 越え出る。○声 評

○轂・車軸を被い、輻を集める部分。○篆・車の被い。幬の略字。ただし、対偶からは車輪・車軸の一部の名称か。○稊・藟粟（もろちん）。○藁・麴。○時な・一時節を違えずに行う。「なふ」は「行」の接尾語で、「誘ふ」「荷ふ」「呪ふ」等のように用いる。○湛・浸す（音セン）。○熾・炊ぐ。強火で煮る。○火斉・火力を一定に保つこと。

○不以国……命名の規則について述べたくだり。 ○隱疾——痛患。 ○畜牲——六畜。 ○器幣——玉器・玉帛。

而不^{じふ}ノ法^{ほふ}。左氏傳^{さしでん}二曰^{いはく}、〔春秋左氏伝 襄公廿九年〕直^{ちよく}而不^ず倨^{おこら}、曲^{きよく}而不^ず屈^{くつ}セ。邇^{ちか}フシテ「八

○頌の歌を評した語。○曲 綾があり、変化がある。○攜 離れる、分かれる。○淫す 度が過ぎる。○厭はず 嫌みがない。○宣べず 明らさまに表現する。○底る 底止する。停滯する。

シテ以散ジ、其ノ怒心感ズル者、其ノ聲粗シテ以厲、其ノ敬心感ズル者、其ノ聲直ニシテ以廉、其ノ愛心感ズル者、其ノ聲和シテ以柔、此雖三毎二句用ト、其ノ字一、而二句以見スレ意。又一法也。

焉えん。法ほふ。祭統さいとう二曰い、「礼記・祭統」見みハシ。下事げさ。鬼神きしん二之道みちヲ。見み二君臣くんしん之義ぎヲ。見み二父子ふし之倫りんヲ。見み二貴賤きせん之等とうヲ。見み二「八丁」親疎しんそノ之殺ころヲ。見み二爵賞しやくかうノ之施しヲ。見み二夫婦ふうふ之別べつヲ。見み二政事せいじ之均きんヲ。見み二長幼ちやうよう之序じよヲ。見み二上下じやうか之際さいヲ。〔礼記・學記〕學記がくき二曰い、藏焉かく修焉しゆ。息焉そく游焉ゆう。三年間さんねんかん二曰い、「礼記・三年間」翔回しやうかい焉えん。鳴號めいごう焉えん。踴躍ようよく焉えん。又また一法也。

○見事鬼神之道焉、……祭の十倫（十義）を列挙したもの。「見す」は「あらはす・しめす」意。○親疎之殺―血縁関係の親疎によつて親しみが増減する（遠いものに対して親しみを減殺すること）。○藏焉……君子の学問の様子を述べる。藏焉を「焉（を）を蔵す」というように、焉を指示語として訓むことも行われている。文則にいう助辞と解すれば、君子の学問は身のために行うもので、内に蔵し、絶えず修め、ひと息入れて咀嚼を促し、ためにすることなく自適閑適の中に、つまり自発的になすものという意味になる。○翔回焉……大きな鳥獣は故郷を過ぎるとき、離れ得ぬ情をしくぐで示すという文、三年の喪の根柢を述べた文。○踴躍―行きつ戻りつする。たちもとおる。

于時うし。法ほふ。詩し二曰い、「詩経・大雅・生民之什・公劉」于にレ時處きキ。處きキマ。于にレ時廬いシ。旅りょマ。于にレ時言いレ言いキマ。于にレ時語かたル。語かたルキマ。鄭康成ていかうせいガ云い、時じ是也。

○公劉―后稷の曾孫で農耕を始め、周を興したとされる伝説の先王。これは都の地を奠めたことを称えた句。于時は「今こに、そこで」等の意。○旅―同朋・仲間。の意。

實じつ。法ほふ。詩し二曰い、「詩経・大雅・生民之什・生民」實じつ二方はちケタ。實じつ二苞みケリ。實じつ二種たね。實じつ二稷な。實じつ二發はつ。實じつ二秀ひ。實じつ二堅かたク。實じつ二好よク。實じつ二穎けいシ。實じつ二粟も。リ。

○実―確かに、というほどの意。同じ詩には「誕（おほむに）〔維（これ）等を句を反復する際の助字として謡う。これも意味を強める働きをなすものか。○方―放に通じて訓んだものか。あるいは並べ整える意とも。○苞―群生する意。○種―播種・植付け。○稷―音シウ。生長する。○発―勢いが盛んになる。花が開く意ともいう。○秀―穀物の花穂が出る。○穎―稲・麦の穂が伸びる。○粟―穀物がよく実る。〔対〕秕（ひひな）

曾是そうし。法ほふ。詩し二曰い、「詩経・大雅・蕩之什・蕩」曾そうハチ是こ。是こハチ強禦きやうご。曾そう是こレ拊克ふこく。曾そう是こレ在あレ位くらニ。曾そう是こレ在あレ服ふく。

○周の文王が殷商を責めた語。曾は乃と同じく、口調を整えるために冠する助字。○強禦―暴戾・権勢・威力に乗つて善を禦ぎ止めること。強禦・強固。○拊克―収斂。租税を厳しく取り立て、収奪を行うこと。○在服―職務、務める、事柄。

侯こう。法ほふ。詩し二曰い、「詩経・周頌・閔予小子之什〔載安〕」侯こう一はレ伯はく。侯こう一はレ亞あ侯こう。侯こう一はレ疆きやう侯こう。侯こう一はレ法ほふ。

○一族総出で荒蕪地を開墾する貌を謡う。○侯―これに。発語の辞。文の初めに加えて注目させる働きをする。夫・抑・凡の類。○主―主人。○伯―長男。○垂―次男三男。○垂は次ぐ意。○旅―其他諸人。○彊―努め励む。○以―率い用いる。

有若うじや。法ほふ。書しよ二曰い、「書経・周書・泰誓」有あり二若かく。號叔かくしゆく。有あり二若かく。閔天かんのてん。有あり二若かく。散宜生さんぎせい。有あり二若かく。泰顛たいてん。有あり二若かく。南宮括なんぐうくわく。

○有若―このようなくがいの意。周文王の建国を補佐した人名を列挙する。○號叔―文王の弟。○閔天・散宜生・泰顛・南宮括―文王の臣の名。

未嘗みじやう。法ほふ。家語けいご二曰い、「孔子家語・五儀解」未み二嘗かてしち知ちレ憂う。未み二嘗かてしち知ちレ勞らう。未み二嘗かてしち知ちレ懼くわう。未み二嘗かてしち知ちレ危い。

斯す。法ほふ。〔礼記・檀弓下〕檀弓だんぐう二曰い、人喜にんきベレ則すなはち斯す陶たう。陶たうレバ斯す二咏えい。咏えいレバ斯す二猶う。猶うレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバ斯す二戚せき。戚せきレバ斯す二嘆たん。嘆たんレバ斯す二辟へき。辟へきレバ斯す二踊よう。踊ようレバ斯す二舞ぶ。舞ぶレバ斯す二慍いん。慍いんレバス

○斯に―則ちに同じ。○陶・慍（とう・いん）と同じ。喜び躁ぐ。○猶―飮悠（いんゆう）揺れ動く。○舞斯慍―舞斯慍の三字は衍字（えんじ）余計な文字かという。喜びの表現は舞までで終わり、慍りの表現が踊るに及ぶ。○辟―擗。胸を打つて嘆き悲しむ。

於是乎おしこ。法ほふ。國語こくご二曰い、「国語・周語上」上帝かみ之采盛さいせい於こ。是こ乎こ出い民たみ之蕃庶ばんしよ於こ。是こ乎こ生せい事こと之供給ききやう於こ。是こ乎こ在あ。和協輯睦わけふあひまふくわい於こ。是こ乎こ興おこ。財用蕃殖さいようばんしよく於こ。是こ乎こ始は。敦龐とんぱん純固じゆんこ於こ。是こ乎こ成なり。

○於是乎―ここに。これによつて等の意。本文の「是」は農を指し、農の六徳を述べたもの。○采盛―祭の供え物。采（さい）を器に盛つて神前に供える。○蕃庶―増大。蕃殖。○輯睦―和らぎ睦まじくすること。○敦龐―手厚く、豊かなこと。篤実なこと。敦彪・敦彪。

有う。法ほふ。禮器らいき二曰い、「礼記・礼器」有あり二直ちよくニテ而行おこな。一也。有あり二曲まニテ而殺ころ。一也。有あり二經つねニテ而等ひしう。一也。有あり二順じゆんニテ而討たう。一也。有あり二漸かニテ而播はく。一也。有あり二推おニテ而進しん。一也。有あり二放なうニテ而文ぶん。一也。有あり二放なうニテ而不ざる。一也。有あり二致いたニテ而有あり二順じゆんニテ而撫ひろ。一也。樂師がくし二曰い、「周礼・春官宗伯・樂師」有あり二帔ひふ舞ぶ。有あり二羽う舞ぶ。有あり二皇きやう

同じの字に作るという。同じく鄭註に胃を被り、衣を翡翠の羽で飾り、四方（四神の意か）で舞うとする。○旄―旗竿の先に釐牛（りぎゅう）唐牛の尾を付けたもの。辟廱（へきよう）―周の高等教育機関で舞うという。○干舞―兵事の際の舞という。○人舞―何も持たず手袖で威儀を作つて舞うものという。星辰を祭る際の舞という。○父子有親―以下、五倫の道といわれるもの。舜の代に司徒の契（せ）が教えを弘めたという。

兮（ひ）法。荀子（じゆんし）曰（い）、「荀子・儒教」井井（せいせい）トテ今其有（いまあり）二條理（じようり）一也、嚴嚴（げんげん）トシテ今其レ能ク敬（けい）スレ己（おのれ）也、分分（ぶんぶん）トシテ今其有（いまあり）二終始（しゆうし）一也、默默（もくもく）トシテ今其能（いまのち）長久（ちやうきう）ナリ也、樂樂（らくらく）トシテ今其執（いまのち）レ道（みち）不（ふ）殆（あやふ）カ也、炤炤（しやうしやう）トテ今其（いまのち）用（もち）レ之（これ）ヲ明（あきら）ナリ也、修修（しうしう）トシテ今其（いまのち）用（もち）レ統類（とうるい）之行（おこな）ハ也、綏綏（すいすい）トシテ今其有（いまあり）二文章（ぶんしやう）一也、熙熙（せいせい）トシテ今其樂（いまのち）二入（ひと）ノ之（これ）臧（たく）フ一也、隱隱（いんいん）トシテ今其恐（いまのち）二入（ひと）ノ不（ふ）レ當（あた）リ也。

○聖人の条件を列挙する。今は韻文の句末や句中に置き、音調を整える助字。○井井―区画が正しく整っている貌。井然。○敬―慎む、慎重に振る舞う。○有終始―始めと終わりをきちんと区切る。○默默―十分に満ち足りる貌。○炤炤―明かな貌。○修修―治め整える貌。○統類―法制の大綱と運用。○綏綏―安らかな貌。○文章―礼案、制度など。○熙熙―和らぎ樂しむ貌。○臧―善。臧否で善悪の意。○隱隱―憂い悼む貌。○不當―してはならないことを行ふこと。

則（すく）法。中庸（ちゆうちゆう）二曰（い）、「中庸（ちゆうちゆう）23」誠（まこと）ナル則（すく）形（かたち）形（かたち）則（すく）著（しやく）著（しやく）則（すく）明（あきら）明（あきら）則（すく）動（うご）ク動（うご）クバ（バ）則（すく）變（かは）ス變（かは）スレバ（レバ）則（すく）化（くわ）ク。

○至誠の道に委曲を尽くせば、事物を変化させることができるという道理を順を逐つて説く。

然（ぜん）法。荀子（じゆんし）二曰（い）、「荀子・非（ひ）士（し）子（し）」儼（げん）然（ぜん）壯（さう）然（ぜん）俱（き）然（ぜん）肆（し）然（ぜん）恢（くわい）然（ぜん）廣（くわう）然（ぜん）昭（しやう）然（ぜん）蕩（たう）然（ぜん）。

○儼然：―君子の容貌の叙述。○俱然―祺然、安らかでどしりとした貌。○肆然―ゆつたりとした貌。○恢恢然―こせつかず、太らかで懐が深い貌。○広広然―弘量で悠然と構える貌。○昭昭然―屈託がなく明哲な貌。○蕩蕩然―胎蕩として、物事にくよくよせず、器が大きい。

奚（けい）法。莊子（しやうし）二曰（い）、「莊子・外（がい）篇（へん）・至（し）楽（らく）」奚（な）ヲカ（ナ）シ奚（な）ヲカ（ナ）シ據（よ）リ、奚（な）ヲカ（ナ）シ避（さ）ケ、奚（な）ヲカ（ナ）シ處（を）リ、二丁（てい）子（し）奚（な）ヲカ（ナ）シ就（しゆ）キ奚（な）ヲカ（ナ）シ去（さ）リ、奚（な）ヲカ（ナ）シ樂（たの）ミ、奚（な）ヲカ（ナ）シ惡（い）ハセ。

○至楽の道を行つて身を活かすための方法を列挙する。○惡―憎み嫌う意と思われるが、送り仮名が「せん」なので鄙しむと読む。

而（し）法。莊子（しやうし）二曰（い）、「莊子・外（がい）篇（へん）・天（てん）道（だう）」而（な）ガ口（くち）闕（けつ）然（ぜん）而（な）ガ狀（じやう）義（ぎ）然（ぜん）考（かう）工（こう）記（き）二曰（い）、「周（しう）礼（れい）・冬（とう）官（くわん）・考（かう）工（こう）記（き）・饗（きやう）氏（し）」清（せい）シテ二其（その）灰（かい）一、而（な）シ二盪（たう）然（ぜん）與（よ）瀉（しゃ）同（どう）一頭（とう）注（しゆ）二レ之（これ）ヲ而（な）シ揮（か）ヒレ之（これ）ヲ而（な）シ沃（わく）テレ之（これ）ヲ而（な）シ盪（たう）レ之（これ）ヲ而（な）シ塗（ぬ）レ之（これ）ヲ而（な）シ宿（しゆく）スレ之（これ）ヲ。

○而容崖然：―老子が自分を訪ねてきた土成綺の容貌を評した語。○崖然―人と和合

しない貌。○衝然―衝衝。せわしなく、落ち着きのない貌。○類―類。○類然―類が広い貌。○闕然―虎が吠えるような貌。常に物を言おうと欲する様子をいう。○狀―風采。○義然―威儀を正す貌。納まり返る様子をいう。これらの状貌から、隙を見て人を凌ぎ、奪い取つて、独り傲り高ぶろうとする不信実の有様をいう。○幌氏（こうし）―絹糸を染める職人。○清―澄ます。○盪（たう）くく―瀉す。○宿―寝させる。

方（ほう）且（し）法。莊子（しやうし）二曰（い）、「莊子・外（がい）篇（へん）・天（てん）地（ち）」方（ま）且（ま）本（もと）トシテ身（み）ヲ而（な）シ異（こと）シレ形（かたち）ヲ方（ま）且（ま）尊（たう）テ知（ち）ヲ而（な）シ火（ひ）ノトク（とく）馳（は）シ方（ま）且（ま）爲（な）シ二緒（き）使（つか）ハ方（ま）且（ま）爲（な）シ二物（もの）絳（けい）ヘ方（ま）且（ま）四（し）顧（く）シテ而（な）シ物（もの）應（おう）ジ方（ま）且（ま）應（おう）ジ衆（しゆ）宜（ぎ）二方（ま）且（ま）二與（よ）レ物（もの）化（くわ）ス。

○方且―「まさにまさに（せんとす）」という読み方もあるが、こはまとめて読む。「いかにも」するであろう」の意。堯が師の許由に対して、許由の師の齧（くは）缺（けつ）けつに禪讓（ぜんじやう）するのはどうかと諮問したのに対し、許由が齧缺は知に働く男なので、これに天下を任せると必ず乱れるだろうと対えた話。その場合の予想を列挙する。○異形―一体化するのでなく相対化する。○絳（けい）―束ねる、括る、結ぶ、物に束縛される意。○物応、応衆宜（おうしゆぎ）与物化―己の知を立てて外物を応じさせようとし、物の都合に合わせ、物と一体化して、結果として物に役使されることになる。

似（し）法。莊子（しやうし）二曰（い）、「莊子・内（ない）篇（へん）・齊（せい）物（ぶつ）論（ろん）」似（し）鼻（び）二似（し）口（くち）二似（し）耳（みみ）二似（し）枿（ふた）二似（し）圈（くわん）二似（し）白（はく）二似（し）淫（いん）（淫當作注―頭注）者（もの）二、似（し）二于（よ）タル（于當作汚―頭注）者（もの）二。此（この）言（い）下（した）風（ふう）吹（ふ）二竅（けつ）穴（けつ）一動作（どうさく）スル（する）之（この）貌（よう）上（う）。

○大木の竅穴の形が様々であることを表す。それに応じて風（地籟）の音が変わる。気流として捉えるのでなく、各々の差違に応じて竅穴が怒号すると捉える。その根本を成すものが天籟である。○枿―干がた、肘木。斗拱（とこう）（とぎよう）の類。断面は四角形。○圈―栝椳（くわすい）はいけん。曲げわつば。○注―汚―淫んだもの。○汚―音「フ」。曲がり淫んだもの。

乎（こ）法。莊子（しやうし）二曰（い）、「莊子・内（ない）篇（へん）・大（だい）宗（そう）師（し）」與（よ）乎（こ）トシテ其（その）觚（こ）アリテ而（な）シ不（ふ）レ堅（かた）カ也、張（ちやう）乎（こ）トシテ其（その）虚（きょ）ニシテ而（な）シ不（ふ）レ華（は）カ也。邴邴（へい）乎（こ）トシテ其（その）似（し）タル喜（き）乎（こ）乎（こ）崔（さい）乎（こ）トシテ其（その）不（ふ）レ得（え）レ已（や）乎（こ）乎（こ）濔（し）乎（こ）トシテ其（その）進（しん）メ二我（われ）ガ色（いろ）一也、與（よ）乎（こ）トシテ止（とど）二我（われ）德（とく）一也。厲（れい）乎（こ）トシテ其（その）似（し）タル世（よ）二丁（てい）子（し）乎（こ）乎（こ）警（かう）乎（こ）トシテ其（その）未（ま）レ可（か）レ制（せい）ス也、連（れん）乎（こ）トシテ其（その）似（し）タル好（こう）二閉（へい）一也。悅（えつ）（悦當作悦音免―頭注）乎（こ）トシテ忘（わす）二其（その）言（い）一也。推（す）理（り）二推（す）理（り）恐（おそ）戴（たい）禮（れ）誤（ご）二頭（とう）注（しゆ）二曰（い）、「礼（れい）記（き）・礼（れい）器（き）」洞（とう）洞（とう）乎（こ）トシテ其（その）敬（けい）シ也、屬（ぞく）乎（こ）トシテ其（その）忠（しゆ）アリ也、勿（ぶ）勿（ぶ）乎（こ）トシテ其（その）欲（ほつ）ス二其（その）饗（きやう）一也。莊（しやう）子（し）蓋（がい）廣（くわう）メテ二此（この）法（ほう）一而（な）シ用（もち）レ之（これ）ヲ。

○古の真人のあり方を叙述したもの。義を立てて独立し、朋党を組まず、自然に自足し、促され覺められて初めて動くという。○与乎―和らぐ貌。○觚―方正。○張乎―大らかに伸び広がる貌。○華―浮華。○邴邴乎―喜ぶ貌。自適する様子を述べる。○崔乎―高大な貌。○不得已―他から迫られ覺められて腰を上げる。○濔乎―集まる貌。むとして怒る貌。○進我色―憤りを露わにして、卑陋を斥ける。○止我德―自足してのさばり出ない。○厲乎―激しく厳しい貌。○警乎―高く抜け出る貌。○連乎―蹇連（けんれん）の意で、行き

乃ノ法。詩曰、たいほくしといふ「詩經大雅・文王之什「すなはちハス乃慰シ、すなはちとま乃止、すなはちのち乃左、すなはちみぎ乃右、すなはちひだり乃彊シ、すなはちり乃理。

○乃―迺と同じ。古公亶父が周の地を奠めたことを謡う。○慰―安んじる。○左右―人民を次々に住まわせる。○彊―疆か。境を限る。○理―条里に分ける。○宜―専か。溝を導く。○畝―畝の旧字。畦道を作る。

いし^いの^の法^{ぽう}。仲^{なかつ}尼^に燕^{えん}居^き日^{にち}、(礼記・仲尼燕居)以^{もつ}ヒテ^{これ}之^の居^き處^{ところ}ニ^に有^あレ^る禮^{れい}。故^{ゆゑ}長^{なが}幼^お辨^わス^る也^{なり}。以^{もつ}テ^{これ}之^の閨^{けい}門^{もん}之^の内^{うち}ニ^に有^あレ^る禮^{れい}。故^{ゆゑ}三^{さん}族^{しゆ}和^わス^る也^{なり}。以^{もつ}テ^{これ}之^の朝^{てう}廷^{てい}ニ^に有^あレ^る禮^{れい}。故^{ゆゑ}二^に官^{くわん}爵^{くわく}序^{しよ}ツ^る也^{なり}。以^{もつ}テ^{これ}之^の田^{でん}獵^{りやく}ニ^に有^あレ^る禮^{れい}。故^{ゆゑ}戎^{じゆう}事^じ閑^{かん}イ^ふ也^{なり}。以^{もつ}テ^{これ}之^の軍^{ぐん}旅^{りよ}ニ^に有^あレ^る禮^{れい}。故^{ゆゑ}武^ぶ功^{こう}成^{せい}ル^{なり}也^{なり}。

○礼を用いることの利益をいう。「以之」の「之」は礼を指すが、後で「無礼」の場合にも対比的な打消の礼を対応させている（之を居處に以て、長幼其の別を失ふ、他）「これらから考えるに、「これ」は一応前句を指示しながらも、もつぱら適用の事例を列挙することに焦点があたり、「これ」は（之）に当てはめれば、（之）の場合においては（もしであれば）「これ」というほどの意になるかと思はれる。○三族（父・子・孫）。○戎事閑ふ（軍事に習熟する。「閑ふ」は慣れる意。○軍旅戦争。軍も旅ももど部隊の規模を表す語。

足^{そく}以^{もつ}ノ法^{ほふ}。易^{えき}三^{さん}曰^{いふ}、(周易・文言伝) 體^{たい}スレ^レ仁^{じん}ヲ足^{たる}ニ以^{もつ}長^{ちやう}タルニ^レ人^{ひと}。嘉會^{かゐ}足^{もつ}ニ以^{もつ}合^あスルニ^レ禮^{れい}。

利^りレ物^{ぶつ}ヲ足^{もつ}ニ以^{もつ}和^わスルニ^レ義^ぎ。貞固^{ていこ}足^{もつ}ニ以^{もつ}幹^{かん}スルニ^レ事^{こと}。中庸^{ちゆうちゆう}二^に曰^{いふ}、(中庸 31) 聰^{そう}明^{めい}睿^{ゑい}智^ちシテ

足^{もつ}ニ以^{もつ}有^あレ臨^{りん}ニ^レ也^{なり}。寬裕^{くわんよく}溫柔^{わんじゆう}シテ足^{もつ}ニ以^{もつ}有^あレ容^{よう}ニ^レ也^{なり}。發^{はつ}「十二^{じふに}丁^{てい}」オ強^{きやう}剛^{かう}毅^ぎシテ足^{もつ}ニ以^{もつ}有^あレ執^{しつ}ニ^レ也^{なり}。齊莊^{せいさう}中^{ちゆう}正^{せい}シテ足^{もつ}ニ以^{もつ}有^あレ敬^{けい}スルニ^レ也^{なり}。文理^{ぶんり}密^{みつ}察^{さつ}シテ足^{もつ}ニ以^{もつ}有^あレ別^{べつ}ク^レ也^{なり}。

此^{こゝ}一^{いつ}法^{ほふ}也^{なり}。

○体仁：以下、君子の四徳を説く。○利物、物の分限を知つて、それを満足させるように働きかける。○和義、物の宜しきを得ること。○聰明、睿智、天下の至聖の特質を述べた。○臨、下に臨んで政を為す。○容、一衆人を受容する弘量を備える。○執、一信念に従つて指導力を發揮する。○斉莊、斉嚴、容儀厳かに身を慎む。○敬する、身を慎んで公正な態度をとる。○別く、是非得失を弁別する。

也^ヤ。法^{ホフ}。中庸^{チュウユウ}三曰^{ミツ}（中庸^{チュウユウ}二十^{ニジュウ}）脩^{シユウ}身^{シン}也^ヤ。尊^{ソウ}且^ツ賢^{ケン}也^ヤ。親^{シン}且^ツ親^{シン}也^ヤ。敬^{ケイ}且^ツ敬^{ケン}也^ヤ。大臣^{ダイシン}一也^{イチ}。體^{タイ}トシ^{トシ}羣^{グン}臣^{シン}一也^{イチ}。子^コトシ^{トシ}庶^{シヨ}民^{ミン}一也^{イチ}。來^{ライ}シ^シ百^{ヒャク}士^シ一也^{イチ}。柔^{ユウ}シ^シ二^ニ遠^{エン}人^{ニン}一也^{イチ}。懷^ヱツク^{ツク}二^ニ諸^{シヨ}侯^{コウ}一也^{イチ}。若^{ニハ}一也^{イチ}。周^{シュウ}易^イ雜^{ザツ}卦^{クハ}一^{イチ}篇^{ペン}全^{セン}用^{ユウ}二^ニ也^ヤ。字^ジヲ^ヲ。又^{マタ}不^フレ^レ可^カ盡^{ケン}ク^ク法^{ホフ}ル^ル。

○脩身……以下、天下国家を為さるる「九經」の教えを説く。○体す―親しく交わる敬愛して受け容れる。○子とす―慈しむ。○百十―百工とするテキストもあり、後の「財用足る」と符節が合うが、下文とのつながりではどうか。○柔す―懐柔し、従える。○周易の雜卦―周易・雜卦伝。「震起也、艮止也……」の形で文が続く。

得^{とく}其^{その}法^{ほう}ヲ、仲尼燕居^{ちゅうにえんきょ}曰^い、允^{いん}記^き仲尼燕居^{ちゅうにえんきょ}宮室得^{きうしつとく}其^{その}度^どヲ、量^{りやう}鼎^{てい}得^{とく}其^{その}象^{しやう}ヲ、味^{あじ}得^{とく}其^{その}時^{とき}ヲ、樂^{がく}得^{とく}其^{その}節^{せつ}ヲ、車^{くるま}得^{とく}其^{その}式^{しき}ヲ、鬼^き神^{しん}得^{とく}其^{その}饗^{かう}ヲ、喪^{さう}起^き得^{とく}其^{その}哀^{あい}ヲ、辯^{べん}說^{せつ}得^{とく}其^{その}黨^{たう}ヲ、官^{くわん}得^{とく}其^{その}體^{たい}ヲ、政^{せい}事^じ得^{とく}其^{その}施^しヲ。

○燕居 自宅でくつろぐこと。○宮室得其度……礼にかなった場合、これらの諸条件が満たされ、最終的に「衆の動その宜しきを得ることになるという。○象 形象。○時 四時（季節）に適すること。○式 乗り方の作法。○饗 供え物。また神が祭りを受納して幸福をもたらすこと。○喪起 喪礼を行うこと。○党 仲間。○体 実質。○施 実効。

以^い法^{ほふ}。大司樂^{だうしりやく}二^に圜^{ゐん}礼^{れい}春官^{しゅんくわん}冢^{しやう}司^し樂^{りやく}以致^{もつて}致^し鬼^き神^{しん}一^一、以^{もつて}和^わ三^{さん}邦^{ぱう}國^{こく}一^一、以^{もつて}諧^{わい}六^{りく}萬^{まん}民^{みん}一^一、以^{もつて}

安^{やす}ジ^{じん}賓^{ひん}客^{かく}一^一、以^{もつて}說^{しやく}八^{ぱつ}シメ^{しめ}遠^{ゑん}人^{じん}一^一、以^{もつて}作^{さく}ス^す二^に動^{どう}物^{ぶつ}一^一。周禮^{しうれい}此^こ法^{ほふ}極^{きは}テ^て多^{おほ}。今^{いま}不^ふ備^び載^{さい}セ^せ。

○音樂の効用を説く。 ○説遠人―夷狄を悦服させる。 ○作動物―百物を生成變化させる。

日^ひノ法^{ほふ}。洪範^{こうはん}二曰^{いはく}、(尚書・周書・洪範) 一曰水、二曰火、三「十二」丁^{てい}曰木、四曰金、五曰土。周禮凡次^{しよ}序^{この}スル其事^{こと}一皆類^{いひなめ}此^{こゝ}。一法也。周禮小胥^{せうしよ}二周礼・春官宗伯・大師^{だいし}曰賦^ふ、曰比^ひ、曰興^{きよ}、曰雅^や、曰頌^{そう}。洪範^{こうはん}三(尚書・周書・洪範) 曰雨^{いう}、曰霽^{せい}、曰蒙^{もう}、曰繹^{えき}、曰克^く、曰貞^{てい}、曰悔^{かい}。凡此^{なんの}類^{いひ}不^い言^は、數^{かず}。又一法也。大宗伯^{たいそう}三曰^{いはく}、(周礼・春官宗伯・大宗伯) 春見^{はるにみ}フ曰朝^{あした}、夏見^{なつにみ}フ曰宗^{あき}、秋見^{あき}フ曰覲^{しん}、冬見^{ふゆにみ}フ曰遇^{ぐう}、時^{とき}見^みフ曰會^{かい}、殷^{いん}見^みフ曰同^{どう}。易係辭^{えいけいじ}二曰^{いはく}、(周易・繫辭下) 天地^{てんち}之大德^{だいだい}曰^{いひ}生^{せい}、聖人^{せいじん}之大寶^{だいほう}曰^{いひ}位^ゐ。何^{なん}以^{もつて}守^{あつ}位^ゐ。曰仁^{いにし}。何以聚^{もつてあつ}人^{ひと}。曰財^{はい}。理財^{らいざい}正^{ただ}辭^じ禁^{きん}ル^ル二民^{たみ}爲^な非^ひ。曰^{いひ}義^ぎ。凡此類^{なんの}又一法也。

○水火木金土一五行の相生順は木火土金水（もくかどこんすい）と言われるが、尚書の本文では順位が異なっている。また漢音では木はボク、金はキンであり、読み方と順位が管見では未詳である。○次序・順に並べる。○小胥・引用文は「教六詩」として小胥の次の大師に載せる。風雅頌：は詩の六義といわれるもの。○雨霽：……ト筮の見方を説く。龜卜において黒く雨沁みのようになるのは水の徴、灼き痕が開明で霽（はれ）に似たものは火の徴、蒙昧ではつきりしないものは木の徴、絡繹連続したものは金の徴、相克するところは土の徴とする。貞は正しいと固くして移らざる意、悔は變動して一ならざる意。占卦の二つの形という。○曰仁・曰人とするテキストもある。○正辭・詭譎を以て民を惑わさず。言動を正して非違を禁ずることを為政者の義とする。○春見・諸侯が王に朝貢する礼を六分したものの。朝覲の語はこれに由来する。

○猗皇氏—文字以前の太古の帝王の名。○磐く提挈ていけつ。手に捧げて持つ。引き連ねる。整え治める。○伏羲—上古の伝説の帝王。庖犧・太昊(たいこう)とも。○襲—取つてわがものとする。○気母—万物の根源。○維斗—北斗七星。こは北辰—北極星か。○忸—音トク。違ふ・変わる。不忸は、衆星の綱維として千古その座を移すことがない意。○崑崙山—山の神の名。○崑崙—チベットの高岳地帯。黄河の源で玉を産出し、西王母が棲むときかれた。現在の崑崙山脈はタクラマカン砂漠南縁の高山帯。○馮夷—河伯。水の神。○大川—黄河。○肩吾—伝説の神仙。泰山の神となる。○黃帝—伝説の帝王。軒轅氏。鼎を荊山に鑄る。鼎が成るとき、龍が下つて迎えた。黃帝はこれに乗つて天に昇つたと伝えられる。○顓頊—黃帝の孫。高陽氏。玄帝ともいふ。北方の天帝となる。

之以^レノ法^{ハフ}。禮記^レ曰^{ハク}、(礼記 文王世子)
 慮^ルニ^レ之^ノ以^テシ^テ大^ニ愛^スルニ^レ之^ノ以^テシ^テ敬^ム行^{ハス}ニ^レ之^ノ
 以^テ禮^ヲ修^ムニ^レ之^ノ以^テ孝^ヲ養^フ一、紀スルニ^レ之^ノ以^テ義^ヲ終^ムニ^レ之^ノ以^テス仁^ヲ。

○聖人が前代の事を記するしかたを述べる。○大―孝弟(悌)の大道。○仁―終わりを慎むこと初めのこととする。

所以^{しよ}に^い法^{ぽう}。禮^{れい}運^{うん}二^に日^{にち}、^{いはく}
 以^{もつ}列^{れつ}スル^す地^ち利^り。一^{いち} 祖^そ廟^ぼノ^の所^{しよ}ニ^に以^{もつ}本^{ほん}ク^く
 一^{いち} 仁^{にん}三^{さん}也^や。山^{さん}川^{せん}ノ^の所^{しよ}三^{さん}以^{もつ}儼^{えん}スル^す
 一^{いち} 鬼^き神^{しん}ヲ^を一^{いち}也^や。五^ご祀^しノ^の所^{しよ}ニ^に以^{もつ}
 本^{ほん}ク^くレ^れ事^じニ^に也^や。

○所以―いれ、理由・手段・方法・道具・場所等の意。 ○郊・社―郊は夏冬に天地を祭ると、社は春秋に土地の神を祭ること。 ○定天位―天下が君を尊むとは礼を致すことと知るのとて、社位を定めることになる。 ○列地利―地より得た食貨の利を並べるとで、本に報いる礼の致すことを知る。 ○本仁―人君が子の礼を以て戸に事えることで、民に親に事える仁を理へることを知る。 ○儻―敬いもてなす。 ○五祀―春に戸の神を祀り、夏に竈の神を祀り、夏の終わりに中霤（ちゅうりゆう）室中（家の神を祀り、秋に門を祀り、冬に行（みち）または井の神を祀る。 ○本事―一年中祭祀を絶やさないとを民に教える。

存乎ぞんこ法ほう易えき係けい辭じ日にち、(周易・繫辭上)
 平へい卦くわい、辨べんズル二吉きつ凶きゆう一一者存ものぞん平へい辭じ、憂うれニ二悔くわい吝しん一一者存ものぞん平へい介かい、震しんキテ二無な咎とが者存ものぞん平へい
 悔くわいニ。

○位一六爻の爻位の高下。○齊一正しく整える。○小大―陰卦と陽卦。○辞―卦文の繫辭。○悔吝―災禍。○介―事の兆候を細かに弁別すること。○震―驚懼。○悔―悔悟。

莫^も大^{だい}乎^{やう}。易^{えき}係^{けい}辭^じ曰^{いふ}、
 平^{へい}四^し時^じ一^{いつ}、縣^{けん}象^{さう}著^{ちやく}明^{めい}ナル莫^も大^{だい}ナル。平^{へい}日^{じつ}月^{げつ}一^{いつ}、崇^{すう}高^{かう}莫^も大^{だい}ナル。平^{へい}富^ふ貴^き一^{いつ}、備^び物^{ぶつ}十^{じふ}三^{さん}。
 丁^{てい}之^し致^ち用^{よう}立^{たつ}二^に成^{せい}シテ器^き一^{いつ}、以^{もつ}爲^{ため}二^に天^{てん}下^か利^り一^{いつ}、莫^も大^{だい}ナル。平^{へい}聖^{せい}人^{じん}一^{いつ}。云^{いふ}云^{いふ}。

○法象——天地間のすべての現象（に従うこと）。
○變通——一切の生成變化。
○器——形而

矣^い。法^{ほふ}。六月^{ろくぐわつ}。詩序^{しじよ}二曰^{ひく}、〔詩經^{しきやう}・小雅^{せうが}・南有嘉魚^{なんゆうけあぎよ}之什^し〕六月^{ろくぐわつ}。詩序^{しじよ}。鹿鳴^{ろくめい}廢^{はい}。則^{すなはち}和樂^{わらく}缺^{けつ}矣^い。四牡^{しほの}廢^{はい}。則^{すなはち}君臣^{きんしん}缺^{けつ}矣^い。皇皇^{かうかう}者^{しや}華廢^{はい}。則^{すなはち}信缺^{しんけつ}矣^い。棠棣^{たうてい}廢^{はい}。則^{すなはち}兄弟^{けいてい}缺^{けつ}矣^い。下^{しも}皆類^{けい}之^し。此^{これ}。不^ず能^{あたは}二^に悉^{しつ}く載^{さい}ス^一。一^{ひと}。板^{いは}。詩^し曰^{ひく}、〔詩經^{しきやう}・大雅^{たいが}・生民^{せいじん}之什^し〕板^{いは}。辭^{さい}之^し輯^{しふ}矣^い。民^{みん}之^し治^ちフ^一矣^い。辭^{さい}之^し憚^{はん}ル^一矣^い。民^{みん}之^し莫^{さだ}ル^一矣^い。此^{これ}雖^{いへども}三^{さん}每^{まい}二^に句^く用^{よう}二^に矣^い。字^じヲ^一、而^{しかん}上^{じやう}下^げ之^し意^い相^{あひ}關^{かん}カ^ル。

○鹿鳴・四牡・皇皇者花・棠棣・それぞれ詩経・小雅・鹿鳴之什の歌。○和楽・賓客と和楽する情。鹿鳴館は鹿鳴の詩に由来する。○四牡・駟馬・王事に奔走しながら家を想う情を諷う。○皇皇者華・美しい花がどこでも美しいように、変わらぬ忠誠の思いを諷う。○棠棣・常棣（じょうてい）とも。庭梅・花枝・朱華（はなう）はすの類。輝くように色盛んで美しい花を兄弟の仲睦まじいことに譬える。棣鄂（ていお）の情。○板・板。上帝が正道に背くことを詠む。○辭・上帝の政令。○輯・輯睦。親しく穏やかである。○治・和らぎ楽しむ。○憚・喜ばしい。○莫・定まる。○相関・互いに関係する。意味がつながる。

抵經傳之文、有相類スル者。非三固出ニ於踰襲ニ、實理ノ之所レ在、不
 約セ而同キ也。略條スニ於後ニ。則可推ス矣。「十三丁才」

○不約而同―自ら契合するものがある

三曰禮義不バレ愆マ、何恤ンニ於人ノ言ヲ。此レ逸詩。荀子ニ引テ今之云、「荀子・正
禮義之不バレ愆兮（兮、恐之字）頭注、何ソ恤ン、二人之言ヲ。今、左氏傳ニ載ス、
「春秋左氏伝・哀公元年」土爲（爲當作藋、重注）稱シテ諺ヲ曰、心苟モ無バレ瑕、何ソ恤ンニ乎無ウ。
一レ

詩ニ曰、「（詩經・王風・「大車」）謂ンヤニ予ヲ不トレ信アラ。有レ如ナルコニ皦日」。

左氏傳ニ

公子長耳ガ曰、「春秋左氏伝・僖公廿四年」所レ下與ニ舅氏一同セ上レ心者有レ如ナ

白水」。

凡指物ヲ爲レ誓カ語多類スル一如レ此。詩ニ曰、「（詩經・大雅・生民之什・民勞、詩

下怨ヒテ遺シ二老ヲ一俾上レ守ニ我王ヲ。左氏傳ニ「春秋左氏伝・哀

公十六年 魯ノ哀公誅シテ 孔丘ニ曰、不_レ下_レ遺_{シテ} 一老_一、俾_レ中_レ屏_レヲ 予_一一人_一ヲ以_レ在_レ位_ニ。此不_レシテ 約_セ而_レ同_キ、一也。左氏傳_ニ曰、〔春秋左氏伝、昭公二年〕晉_ニ韓起聘_ス魯_ニ。觀_ニ書_ヲ於_ニ太史氏_ニ、見_テ三易_ノ象_ヲ與_ニ魯_ノ春秋_ニ、曰、周_ノ禮_{盡ク}在_レ魯_ニ矣。吾乃_今知_ル四_レ周公_ノ之_レ徳_ト與_ニ三_ノ周_ノ之_レ所_ニ以_レ王_{タル}也。家語_ニ曰、孔子適_ル周_ニ、〔孔子家語、觀周〕歷_ニ郊社_ノ之_レ所_ヲ、考_ヘ二_レ明堂_ノ〔十三丁ウ之則一〕、察_ニ二_レ廟朝_ノ之_レ度_ヲ。於_レ是_ニ喟然_トシテ曰、吾乃_今知_ル四_レ周公_ノ之_レ聖_ト與_ニ三_ノ周_ノ之_レ所_ニ以_レ王_{タル}也。此不_レシテ 約_セ而_レ同_キ、二也。左氏傳_ニ曰、〔春秋左氏伝、成公十年〕晉_ニ侯_疾病_{ナリ}。求_ニ二_レ醫_ヲ于_ニ秦_ニ。秦_ニ伯使_ニ〔原文下ニ〕醫_緩ヲ〔原文上レ之ヲ〕。醫_至ル。曰、疾_不レ可_レ爲_也。在_ニ膏_ノ之上_ニ膏_ノ之下_ニ。戰_國策_ニ曰、扁鵲_見二_レ秦_ノ武王_ニ。武王_示二_レ之_ニ病_ヲ。扁鵲_請テ除_ク二_レ左_ノ右_ヲ。曰、君_ノ之_レ病_在二_レ耳_ノ之前_ニ目_ノ之下_ニ。此不_レシテ 約_セ而_レ同_キ、三也。左氏傳_ニ載_ク、〔春秋左氏伝、成公十八年〕周_子ガ曰、二_三子_用モ我_レ今日_、否_{ザル}亦_今日_{。國語載_ク、〔國語、吳王曰、孤ガ之事_ル、君_在二_レ今日_ニ。不_レ得_レ事_ヲ、君_亦在_二今日_ニ。此不_レシテ 約_セ而_レ同_キ、四也。國語載_ク、〔國語、楚語下〕觀_射父_ガ曰、先王_ノ之_レ祀_也、以_ニ一_ノ純_、二_ノ精_、三_ノ牲_、四_ノ時_、五_ノ色_、六_ノ律_、七_ノ事_、八_ノ種_、九_ノ祭_、十_ノ日_{十二_ノ辰_ヲ、一_ノ以_ニ十四_ノ丁_ノ致_スレ_之ヲ。左氏傳_ニ載_ク、〔春秋左氏伝、昭公廿年〕晏_子ガ曰、先王_ノ之_レ濟_ニ五_ノ味_ヲ、一_ノ和_スル_ニ五_ノ聲_ヲ、一_ノ以_ニ平_ニシ_二其_ノ心_ヲ、一_ノ成_ニ其_ノ政_ヲ也。聲_亦如_シ味_ノ。一_ノ氣_、二_ノ體_、三_ノ類_、四_ノ物_、五_ノ聲_、六_ノ律_、七_ノ音_、八_ノ風_、九_ノ歌_以相_成ス也。此文既_於レ物_協レ_數、又_於レ數_協レ_序、亦_文之_工ナル者_{。此不_レシテ 約_セ而_レ同_キ、五也。考_工記_ニ曰、〔周礼・冬官・考工記・弓人〕柶_ヲ爲_レ上_ト櫨_次ギ_レ之_ニ、槩_桑次_ギレ_之ニ、橘_次ギ_レ之_ニ、木瓜_次ギ_レ之_ニ、荊_次ギ_レ之_ニ。〔礼記・礼器〕禮_器曰、禮_時ヲ爲_レ大_ナリト。順_次ギ_レ之_ニ、體_次ギ_レ之_ニ、宜_次ギ_レ之_ニ、稱_次ギ_レ之_ニ。此不_レシテ 約_セ而_レ同_キ、六也。}}}

○徹_日—白_日。 ○白水—清水。 ○誄—しのび文。死者の德行功績をほめたたえること。
○一純—純潔。 ○二精—玉帛。 ○三牲—牛・羊・豚。 ○四時—四季の穀物。 ○五色—青・黄・赤・白・黒。 ○六律—音階の名。黄鐘くわしうしう。大族たいしう。姑洗くせし。蕤賓いひん。夷則いそく。無射ふえき。これに夾鐘けふしう。林鐘ふしん。大呂たいりふ。仲呂ちゅうりふを加えて十二律という〔楽書要録〕。律は陽声（シャープ）。 ○七音—五声に变宮・变徵を加えたもの。 ○七事—天地民と四時の事務という。 ○八種—八音（鐘）・石（磬）・糸（琴瑟）・竹

（簫笛）・匏（ほう）（竽）（笙）（簞）（瓢）（ふく）を用いた楽器）・土（壺けんじ土笛）・革（鼓）・木（柷しゆく）
敵きよ木製の打楽器。奏樂の初め・終りに使う。でつた各種の楽器。 ○九祭—九州（全國）の祭の奉納。 ○十日十二辰—十干十二支で吉日を選ぶこと。 ○五味—辛・酸・鹹・苦・甘の味。 ○一氣—万物の根本の力、天地の元氣。 ○二體—文・武という。 ○三類—詩經の三体である風・雅・頌を指すという。 ○四物—天地が万物を育てる四つの道である易の元・亨・利・貞を指すか。あるいは礼・義・廉・恥の四維か。 ○五声—宮・商・角・徵・羽の五つの調子。 ○八風—淮南子「天文訓」に条風・明庶風・清明風・景風・涼風・閭闔風・不周風の八つの季節風を説き、それぞれ立春・春分・立夏・夏至・立秋・秋分・立冬・冬至に当たる日に吹くとする。それに合わせて宮廷の歳事を定める。 ○九歌—六府を指すというが、未詳。楚辭に九歌と呼ぶ祭祀歌がある。 ○於物協數—数字が数量であるとともに序数としての役割も果たすこと。 ○柶—つみ・山桑。他に「つげ・あかね」等の和名も見える。 ○櫨—桑の類。 ○槩桑—山桑。 ○橘—九年母、また橘。 ○木瓜—ボケ。 ○荊—いばら・人参木。

辛 凡八條

春秋ノ之時、王道雖_レ微_{ナリト}、文_風未_レ殄_ヘ。森_羅辭_翰、備_ニ括_ス規_摹ヲ。考_ヘ二_レ諸_ヲ左_氏ニ、摘_テ其_英華_ヲ、一_ノ別_ニ爲_ニ二_レ八_ノ體_ト、一_ノ各_繫二_レ本_ノ文_ヲ。一_ノ曰、命_、婉_ニシテ_{十四_ノ丁_ニ而_當。二_ノ曰、誓_、謹_、而_嚴。三_ノ曰、盟_、約_、シテ_而信_{。四_ノ曰、禱_、切_、而_慤。五_ノ曰、諫_、和_、シテ_而直_{。六_ノ曰、讓_、辯_、シテ_而正_{。七_ノ曰、書_、達_、シテ_而法_{。八_ノ曰、對_、美_、シテ_而敏_{。作者觀_レ之_ヲ、庶_ハ知_ル二_レ古_ノ人_ノ之_レ大_ニ全_ヲ也。}}}}}}

○微—衰微。衰える。 ○文風—文体、スタイル。 ○殄—滅ぼす。 ○森羅—無数に並び連なる。 ○辭翰—文章、著述。 ○備括規摹—手本（範型）がすべて備わっている。 ○婉—婉曲、遠回しに言う。 ○慤—慎み深く、誠意があること。 ○讓—控え目に表現する文。 ○對—方策を述べる文。 ○大全—十全。完備していること。

命 周靈王命_ズ二_レ齊侯_ニ。

〔春秋左氏伝・襄公二十四年〕王_使三_レ〔原文下ニ〕劉_定公_ヲ〔原文二〕賜_ニ二_レ齊_侯命_ヲ。〔原文上、曰、昔_伯舅_太公_{、右_ケ二_レ我_ガ先_王ヲ、一_ノ股_ニ肱_トシテ_周室_ニ、一_ノ師_ニ保_{タリ}萬_民ニ。世_祚ヒテ_太師_ニ、一_ノ以_表ス_二東_海ニ。王_室ノ_之不_レ壞_レ、緊_伯舅_是頼_ル。今_余命_ズ二_レ女_子環_ニ、茲_ニ率_ガヒ_二舅_氏ノ_之典_ニ、一_ノ纂_テ二_レ乃_チ祖_考ニ、一_ノ無_レ忝_ルム_ルニ。乃_乃舊_ヲ敬_メ之_ヲ哉。無_レ廢_スル_ニ朕_ガ命_ヲ。一。}

○周の靈王が齊から王后を迎えるために、劉夏（後の定公）を齊の靈公の許に遣わして命を伝えさせたもの。王后を迎えるに卿を遣わすならわしだったのに、大夫以下の劉夏を遣わしたので非礼とされた。 ○劉定公—周の家臣劉夏。定公は諡号。 ○伯舅—天子が異姓の諸侯に対して、また諸王が大夫の尊称として用いる語。同姓の諸侯に対する尊称は「伯父」。もと

「伯舅」は母の兄、「伯父」は父の兄を指す。○太公―太公望呂尚。斉に封じられた。○師保―師傳に同じ。天子や皇太子の顧問・教育係。三公（太師・太傅・太保）三孤（少師・少傅・少保）の係。○祚―福祿を給う意。昨だと与える意。○表―儀表とする。○繫―首「エ」の発語の助字。これ「伊・是」ただ維「唯」。「ああ」噫と読む場合もある。○環―齊靈公の諱。○典―定めた掟。○纂―継ぐ・継承する。○祖考―父祖。祖先。○旧―旧業。祖先の遺功。

誓 晉ノ趙簡子誓ノ伐レ鄭ヲ。

〔春秋左氏伝・哀公二年〕 日、范・中行氏反ニ易シ天明ニ、斬ニ艾・百姓ヲ、欲下ニシテ晉ノ國ヲ一而滅サント。中其「十五丁」君ヲ。寡君恃テ鄭ヲ而保ツ焉。今鄭爲シ不道ヲ、棄レ君ヲ助レ臣ヲ。二三子順ヒ天明ニ、從ヒ君命ニ、經リ德義ヲ、除ク詬耻ヲ、在リ此ノ行ニ也。克敵者、上大夫ハ受ケレ縣ヲ、下大夫ハ受ケレ郡ヲ、士ハ田十萬、庶人・工商ハ遂ケ、人臣・隸圉ハ免レシ。志父無クハ罪、君實ニ圖レ之ヲ。若其有ラバ罪、絞縊以戮セラレ、桐棺三寸、不レ設ケ屬辭（辭當作辟―頭注）一。素車樸馬、無ケン入コ于兆ニ。

下卿ノ之罰也。

○趙簡子（趙鞅）が鄭を討つ前に晉軍に誓いを立てたもの。○反易天明―天の明らかな道に背き侍る。○斬艾―殺戮。○寡君―他国の人民に対して、臣下が自国の主君を指している語。わが君。○臣―范氏・中行氏を指す。○二三子―複数の目下の者に呼びかける語。おまたち。○詬耻―恥辱。○十萬―十萬畝。百歩を一畝とする。ニアル弱。○遂―朝廷に勤めて仕官させる意という。また、周代には都から百里以上、二百里以内の行政区画を遂といた。あるいはこの郊外の地を割り当てて住まわせる意か。○人臣・隸圉―人の家来・仲間、隸圉は下男と馬丁。○免―放免される。○志父―趙鞅の自称。あるいは師保と通じるか。○無罪―罪が無く、天運を得て敵に勝つことを指す。○有罪―罪があつて敵に勝たない場合。○属辟―属婢（しよくへい）。内棺。○素車―飾りを付けない車。○樸馬―野馬。鬣も切らない馬。○兆―墓地。先祖代々の墓。

盟 亳ノ城北ノ之盟

〔春秋左氏伝・襄公二年〕 載書ニ曰、凡我同盟、母レ瀘ムコ年ヲ、母レ壅グコ利ヲ、母レ保レ姦ヲ、母レ留レ愿ヲ。救ヒ災患ヲ、恤ヒ禍亂ヲ、同シ好惡ヲ、一獎ケヨ王室ヲ。或バ間スルコ茲命ヲ、司慎・司盟、名山・名川、羣神・羣祀、先王・先公、七姓十二國ノ之祖、明神殛シテ之ヲ、俾ン下失ニ其民ヲ、隊シ命ヲ亡シレ氏ヲ、踏サ中其國家ヲ。〔十五丁〕

○齊魯と鄭が亳の地で和睦したときの同盟の文。晋の范宣子が作った。○載書―盟を載せた文書。○瀘年―年穀を隠匿して他国の凶作に際して救済しないこと。瀘は積む・蓄える・貯める意。○壅利―国内の物産を占有・壅塞して他国と交易しないこと。○保姦―一國の罪人を庇護すること。○留愿―邪心・二心を抱くこと。○恤禍亂―騒乱や戦乱などの人災を憐み救う、賑恤すること。○獎―助ける、助成する。○或―有に同じ。○間―阻む、乱す、妨害する。○司慎・司盟。人の誠心を照覧して禍福を司る天神。○同盟―盟誓を照覧して禍福を司る天神。○先公―晋の祖公たち。○七姓十二國―姫姓の魯・衛・鄭・曹・滕、曹姓の邾・小邾、子姓の宋、姜姓の齊、己姓の莒、姒姓の杞、任姓の薛。○殛―罪を責めて殺す。○踏―首「ホク」。打ち倒す。

禱 衛ノ蒯聵ノ戰ノ禱

〔春秋左氏伝・哀公二年〕 日、曾孫蒯聵、敢昭告ニ皇祖文王、列（列當作烈―頭注）祖康叔、文祖襄公ニ。鄭勝亂ニ從ヒ、晉午在レ難ニ、不レ能レ治レ亂ヲ。使（原文ニレ）鞅（マ）討ゼレ之ヲ。蒯聵不レ敢自佚ゼ、備ハレ持レ矛ヲ焉。敢告ク無レ絶レ筋ヲ、無レ折レ骨ヲ、無ニ面傷クマノコ、以集シテ二大事ヲ、無シテ作スコ二三祖ノ差一。大命不レ敢請一、佩玉不レ敢愛一。

○鄭を討つ前に衛の太子蒯聵が祖靈に戦勝を祈願した文。○曾孫―子孫が先祖に対して用いる自称。○皇祖文王―衛の始祖康叔は周文王の子。○烈祖―功績の高い先祖。○文祖―文徳の高い祖先。襄公は蒯聵の祖父。○鄭勝―鄭の声公。名勝。○乱從―叛臣に与する。○晉午―晋の定公。名午。○鞅―前出の趙鞅。○自佚―自ら安んじ、自分だけ逃れて遊び呆ける。○備はる―数に入る、一員となる。備員。○集す―安んじ和らげる。○大命―寿命。○佩玉不敢愛―身に佩びた玉を祖靈に捧げる意。

諫 臧哀伯諫ニ桓公ノ納レ鼎ヲ。

〔春秋左氏伝・桓公二年〕 日、君タル人ニ者、將ニ昭ニシテ德ヲ塞テ違ハ、以臨中照セント百官ニ、猶懼レ或シコ失スルコレ之ヲ。故ニ昭ニシテ二令德ヲ一、以示スニ子孫ニ。是（是下當有以字―頭注）清廟茅屋、大路越席、大羹不レ致サ、粢食不ハレ饗ケ、昭ニスルニ其儉ヲ也。衮冕黻珽、帶裳幅舄、衡紱紼紼ハ、昭ニスルニ其度ヲ也。藻率（單―當作鞞―頭注）鞞、鞞厲游纓、昭ニスルニ其數ヲ也。火龍黼黻ハ、〔十六丁乙〕昭ニスルニ其文ヲ也。五色比象ハ、昭ニスルニ其物ヲ也。錫鸞和鈴ハ、昭ニスルニ其聲ヲ也。三辰旂旗ハ、昭ニスルニ其明ヲ也。夫德儉シテ而有レ度、登降有レ數、文物以紀シ之ヲ、聲明以發シ之ヲ、以昭二臨ス百官ニ。百官於レ是乎、戎

之ヲ以レ行ヲ教ニ之ヲ以レ務ヲ使フニ以レ和ヲ臨ニ之ニ以レ敬ヲ蒞ニ之ニ以レ疆ヲ斷ズルニ之ヲ以スレ剛ヲ猶求ニ聖哲ノ之上、明察ノ之官、忠信ノ之長、慈惠ノ之師ヲ。民於レ是乎可ニ任使ス一也、而不レ生ゼ禍亂ヲ。民知レ有「ヲ」辟、則不レ忌レ於上ヲ、並ニ有テ二爭心、以徴シテ於書ニ、而徴幸シテ以成スレ之ヲ、弗可レ爲ム矣。夏有テ二亂政、而作りニ禹刑、一商有テ二亂政、而作りニ湯刑、一、周有テ二亂政、而作りニ九刑。一三辟ノ之興、皆叔世也。今吾子相トシテ鄭ノ「十七」國ニ、作「封」洫ヲ、立「謗」政ヲ、制「參」辟ヲ、鑄「刑」書ヲ。將ニ以靖メシト民ヲ、不亦難カラ一乎。詩曰、「詩經・周頌」我將「儀」式「刑」文王ノ德ニ、日ニ靖ム四方ヲ。又曰、「詩經・大雅・文王」儀「刑」文王、一萬邦作スレ孚。如レ是何ノ辟之レ有ラン。民知ルニ爭ノ端ヲ一矣。將ニ棄テ禮ヲ而徴サントニ於書ニ、錐刀ノ之末、將ニ盡ク爭ハント一之ヲ。亂獄滋ク、豐ニ賄賂並行シ、終ヘムニ子ガ之世ヲ。鄭其敗レシ乎。胙聞レ之ヲ、國將「亡」レビント、必多スト制ヲ。其此ノ之謂乎。

○書―意見書 ○叔向―晋の公族で平公の傅、羊舌肸（よせぎつ）の字。賢人と言われる。楚の巫臣と鄭の夏姫の間にできた娘を妻とした。○子産―鄭の穆公の孫、姫傭の字。紀元前五三六年、「參辟」を鼎に刻んで人民に示し、世界で初めての成文法を作ったという。○詒―送る。伝える。遺す。○虞―安心する。○制―罪の輕重を調べて裁く。○刑辟―刑法。○閑ふ―熟達する。○奉―養う。○制爲―定める。○淫―道に外れる。みだりに行う。○尊す―恐れ憚る。○徴―よりどころとする。微ぬ。○微幸―罪から逃れてまぐれ当たりの幸いを願う。僥倖。○禹刑―禹の定めた刑書。贖刑―金品で罪をあがなうことなどがあつたという。○湯刑―殷の末期にできた刑書。湯王の名に借りた。刑という言葉は殷に始まるという（荀子）。○九刑―文公の時に定められた刑。墨・劓・剕（足切り）・宮・大辟（死罪）・流・殛・鞭。○三辟―三つの刑罰の掟。○叔世―末世。他に、季世・澆季・叔季など。○封洫―田の境と溝（用水路）。井田の法を定めたこと。○謗政―非難されるような政治。昭公四年に丘賦（軍事税）を定めたことを指す。○參辟―夏殷周三代の刑法。○儀式刑―手本として法る。儀刑も同じ。○孚―真実が明らかにすること。心をまことにする。○爭端―争いのいどぐち、きつかけ。○錐刀之末―錐や小刀の先端のように些細な事。○豊―多い。○敗る―乱れる、崩れる、滅びる。○肸―羊舌肸の名。

對 鄭ノ子産對三晉人問ニ陳罪ヲ一對ノ文多シ矣。取テ此ヲ爲レ體ト。

對 日、昔虞閼父爲ニ周陶正一、以服ニ事ス我先王三。我

先王賴テ其「利」器用ト也、與ニ其ノ神明ノ之後ナル上也、庸テ以ニ元女大姫ヲ配シテ胡公ニ、而封シ諸「陳」ニ、以備フニ三恪ニ。則我周ノ之自出、至テ于今ニ是レ賴ル「十八」公桓公ノ之亂、蔡人欲スレ立ント其出ヲ。我先君莊公奉シテ五父ヲ而立レ之ヲ。蔡人殺スレ之ヲ。我又與ニ蔡人一奉ニ戴厲公ヲ至テ於莊・宣ニ皆我ガ之自立。夏氏ノ之亂ニ、成公播蕩ス。又我ガ之自入、君ノ所レ知ル也。今陳忘テ周ノ之大德ヲ、蔑シ我大惠ヲ、棄ニ我姻親ヲ、介リニ恃テ楚ノ衆ニ、以馮ニ陵スルヲ我敝邑ヲ、不レ可ニ億逞ス。我是ヲ以有ニ往年ノ之告一、未レ獲ニ成命ヲ。則有ニ我東門ノ之役一。當ルニ陳ノ隧ニ者、井堙ギ木刊ル。敝邑大ニ懼、不シテ競而耻メンヲ。天誘テ二其衷ヲ一、啓キ二敝邑ノ心ヲ一、陳知テ二其罪ヲ一、授ニ手ヲ于我ニ、用敢テ獻スレ功ヲ。云云。

○晋の士莊伯（ししやうはく）が陳を攻めて捕虜を献上してきた鄭の子産を詰問したのに対し、子産が対えた文。○虞閼父―舜の子孫。○陶正―陶工の長。○先王―周武王。鄭も姫姓なのでこう呼ぶ。○神明―帝舜。○庸―以。他に乃ち・焉んぞの用法もある。○元女―長女。○胡公―閼父の子。○三恪―三つの慎み敬うべき国。先王の子孫を封じた国。二王三恪。二王は前二代の王朝の子孫を封じて公爵の待遇をしたもの。夏の後を杞に、殷の後を宋に封じた。三恪はそれに次ぎ、黃帝の後を鮑（はう）けいに、帝堯の後を陳に封じ、諸侯より尊いとした。○頼る―周をたよりにする。○桓公之乱―陳の桓公の後継者争いで、桓公の弟五父が桓公の子を殺して陳の支配者となつたが、蔡に殺された。蔡公が甥に当たる桓公の遺児を擁立して厲公としたとき、鄭莊公は厲公を奉戴し、さらに厲公で国外に亡命していた弟の莊公・宣公を順次擁立した。○夏氏之乱―夏徵舒が陳の靈公を弑逆し、一時陳の支配者となつた事件。○成公―靈公の子。夏徵舒の乱の時、晋に亡命した。後に楚莊王の率いる連合軍に擁立され、成公となつた。○播蕩―流浪。○介恃―頼みとすること。○馮陵―勢いを恃んで迫り侵す。○敝邑―我國。敝は謙称。○億逞―安んじる。○往年―前年。先年。○告―来たり懇請すること。○成命―裁断。○東門之役―陳楚の連合軍による鄭城の東門の攻撃。役は役に同じ。戦いの意。○隧―道。陳の進軍の経路。○刊木―木を切る。刊（せん）と混用する。○耻大姫―先祖の名を汚す意。○誘―引き起す、惹起する。○心―報復の至情。○知其罪―降参する意。○授手―引き揚げる意。○功―手柄。戦勝の報告。

〔春秋左氏伝・襄公二十五年〕

【付録】 鎌倉行遊の記録 ― 山井崑崙関係の記載を中心に

○享保二年九月二三日～二八日(六日間)

○資料―太宰春台『湘中紀行』、安藤東野『遊湘紀事』、山井崑崙『鎌倉行記』

出立前後

享保二年(一七二七)九月、帰省を機会に、根本伯修は牛門の諸子に鎌倉を案内しようと声を掛け「どうです、皆さん、たまにはちよつと出掛けてみませんか。鎌倉はいかがです。お出でになるなら、道案内はお任せ下さい。」(なお、山井崑崙の『鎌倉行記』以下「行記」と略記では、伯修の父がやつてきて勧めたのである。)

「諸君好ムレ遊乎。壺ルレ遊ハ」鎌倉ニ。遊ハハ。則チ吾且ニ爲ラト。二東道主一。」「太宰春台『湘中紀行』(以下「湘中」と略記)この話を聞くや太宰春台の思ひはすでに鎌倉に飛んでいた。同座の安藤東野・朝比奈文淵(字 瀟園・号 玄洲)(21)と崑崙が賛成し、秋元澹園(以正 字子帥・平野金華 玄 中 字子和)も興味を示した。九月二〇日(湘中では一九日、遊湘紀事 行記では二〇日とする。)出立と決めた。しかし前日から生憎の豪雨で、雨は当日も降り続いた。翌日、春台は牛門に皆が集まっているだろうから更めて出立日を相談しようと思つて塾を訪れると、誰もいず、晁生(文淵)は折しも足を病んで牀にあり、崑崙は読書に余念がない。(崑崙が「讀書目若」であるという春台の描写はその平生を描いて要を得ている。)他の連中はどうしたのかと尋ねると、昨日東野さんは来ましたがなにごんの雨で他の誰も来なかったので、東野さんと相談して今回の秋の旅行は中止にしましたという。

山生ハ讀書目若タリ。問ヘバ。之ニ。山生曰ク。前日藤生來レドモ。諸君不レ至。實雨故也。因リテ藤生ニ議シ止メタリ。二今秋之行一矣。湘中

春台は大いに不満だった。これくらいのことですつと行遊を止めてどうする。人生朝は夕べを謀らずだ。機会を逸してはならず、猶予すべきでない。第一、今度の一行で最年少の君にしてからが何をぐずぐずしているのか。一人でも一緒に行くという者がいれば、己は明日にも出かけるよ。「こう言つと崑崙は「分かりました。私も一緒に行きましよう。東野さんはどうしましよう。私が行つて頼んでみますから、あまり急ぐのはよくありません。」と言う。そこで崑崙を東野の許へ伝令に遣ると、やがて戻つて来て東野は承知したという。それから東野がやつて来た。

且子ハ於テ。吾ガ輩ニ。最少シ。何ソ用モ。二縮牖(ぐずぐずと躊躇すること)ヲ。爲サシ。如シ得バ。二一人偕ニ行クヲ。余則チ以テ。二明日ヲ。發セト。山生曰ク。善。吾ハ其レ偕ニ行カンニ。不レ有ラ。二藤生一者乎。吾請就レ。謀ニ頼んでましよう。子勿カレト。遽ツルコト。走シム。二之

ヲ。東壁氏ニ。一。既ニ反ル。曰ク。藤生許諾。尋イテ藤生至リ。(湘中)

東野も病中だったが、春台の意気丈んなのに驚き、一日おいて二三日出発となった。(この辺りのいきさつは東野の『遊湘紀事』といくぶん食い違いがある。次の段落を参照。)金華と須溪(秋子帥)は約に背いてやつて来ず、一行は三人と決まった。

東野は病を押して出掛けるはめになったことでもあり、伝令にされてやつて来た崑崙の様子を細かく描いている。豪雨の余韻を残すぬかるみの道を崑崙が尋ねてきた。「太宰さんは出掛ける気満々です。太宰さんだけ旅立たせるのも最年少の後輩としてどうなのかというところもあり、私も明日早朝、雨具を持つて一緒に行くことにしました。というわけで、ちよつとご挨拶に。」崑崙はそう言いながら、金華・澹園の二人が実には煮え切らないとききりに話す。それはつまり、言外に自分にも同道してほしいと誘っているのだと東野は気づいたが、わざと気づかないふりをして受け答えをした。崑崙が帰つた後、雨脚はおさまリ、東天に虹も出た。家人はもうこれからは晴れるだろうという。仕方なく、自分は崑崙を追つて出たが、もう言つてしまつた跡で、必死に追い掛けたが姿も見えない。牛込の塾を訪ねるとちよつと春台もいて、崑崙と二人で氣勢を上げ、こちらの誠意も知らず、自分たちを盛んにこきおろしているところだった。(崑崙は「東野は恐らく来るだろう。」「くらいのことは春台に伝えたのだろう。文飾の多いのは詩文を得意とした東野の行文の特徴らしく見える。)

廿一日薄暮、山生衝イテ泥ヲ過リテ。余ニ曰ク。『太宰遊趣勃勃(トシ)(意気丈んで、不レ可カラ。以テ已ム。不佞也。年又最モ少シ。不レ忍レ使ムルニ。太宰ヲシテ獨リ賈ハ。レ勇(勇者を売り物にする)、約ス。二明日ハ質明、黎明、夜明け方、襪襪(雨合羽)シテ而レ偕ニスル。一。故來リテ辭スト』云。且説三切ス金華・須溪、怯ナルヲ。二於遊ニ。意毎ニ在レ余ニ也。余陽ツテ為ス。下不レ達セ。其意ニ者ト。已ニシテ生去ル矣。時雨少シク歇ム。東隅隙スレ虹ヲ。問ニ諸人ニ。皆曰ク。且レ霽ント矣。余乃チ投シテ。二扶(思い切つて立ち上がる)追レ生。屐及ビ。二于商丘ニ。笠、竹笠ハ。バ。バドモ。二于黃花陂ニ。(句意未詳。ずいぶん急いだが、の意か。)而不レ能ハ。及フ也。至レバ。則チ太宰方ニ在レ堂ニ。與レ生。睥睨彈指シ(目を怒らせて爪弾きする。)、罵ニ余輩一不レ已マ。(安藤東野『遊湘紀事』(以下「遊湘」と略記))

こうして九月二三日黎明、三子は牛込に集合した。但徠が見送つてくれ、先によつて来た東野は崑崙と出掛けた。二人が塾の西にある橋の上で待つっていると、春台が遅れて姿を現した。東野が「人と約束をしておきながら、遅れるとは何事か。」春台は答えた。「何と小僧どもめ、己に会つのはまだ早い。」張良と黄石公の故事を引き合いに出して互いに笑い合い、一行は出立した。誰もが笠笠(竹笠。竹で編んだ円錐型の笠)に草鞋履きだったが、春台は襪襪(襪か。または桐油合羽、引回しの類か)、

東野は皮裘（ひきう）羅紗（らさ）の合羽道中羽織の類（か）を身にまとい、崑崙（こんろん）は雨着（あまぎ）を入れた行李（りょうぎ）を別に背負（かか）っていた。「山生（さんせい）別（わか）れ、二（に）行（い）き李（り）一（いつ）肩（かた）レ之（これ）。亦（また）雨（あめ）備（そな）へ也（なり）。余（われ）二（に）人（ひと）嘆（なげ）ス、其（その）少（せう）壯（さう）一（いつ）。」（遊湘）大荷物（おほにもの）を背負（かか）つて、若者（わかしよ）は元気なものだという心である。

弘明寺まで

朝日に輝く芝浦（しばう）の海（うみ）を過ぎ、級河（きゅうが）（品川（しんがわ））の宿（しゆく）も過ぎた。大森（おほもり）の薄汚（うすけ）い居酒屋（いざや）で酒（さけ）を飲む春台（しんたい）と東野（とうの）の脇（わき）で、崑崙（こんろん）は懐（ふところ）から岡仲錫（おかちゆうしやく）（岡井（おかい）嶺洲（りやうしゅう）、別号（りやうしゅう）浪（なみ））の送別（さうべつ）の詩（うた）を取り出して二人（ふたり）に示（し）した。ところが崑崙（こんろん）自身（みづかみ）は何（なん）度も勧め（すす）められる酒（さけ）を断（ことわ）り、糍粑（ししぱ）餅（もち）（糍（しし）中（ちゆう））と柿（かき）酒（しゆ）を食（た）べながら盛（も）んに饒舌（じやうぜつ）るばかりだつた。（岡井（おかい）は元禄（げんろく）一（いつ）年（ねん）二（に）七（しち）〇（〇）生（な）れなのでこの年（ねん）まだ一（いち）六（ろく）歳（さい）、崑崙（こんろん）は通説（つうせつ）では元禄（げんろく）三（さん）年（ねん）二（に）六（ろく）〇（〇）生（な）れなので二（に）八（はち）歳（さい）、天和（てんわ）三（さん）年（ねん）二（に）六（ろく）八（はち）三（さん）生（な）れ、東野（とうの）は三五（さんご）歳（さい）、延宝（えんぽう）八（はち）年（ねん）二（に）六（ろく）八（はち）〇（〇）生（な）れの春台（しんたい）は三八（さんぱ）歳（さい）となる。）崑崙（こんろん）は酒（さけ）を飲（の）まなかつた。そして盛（も）んに食（た）べ、その分（ぶん）よく饒舌（じやうぜつ）つた。

山生（さんせい）探（たん）リ二（に）其（その）懐（ふところ）一（いつ）、出（い）ダシ下（かみ）岡仲錫（おかちゆうしやく）送（おく）ル「吾曹（わがさう）我（われ）々（々）一（いつ）詩（し）上（うへ）以（もつ）テ下（した）ス、酒（さけ）ヲ（を）断（ことわ）る。」
而（しか）シテ己（おれ）ハ則（すなは）チ略（りやく）フ糍粑（ししぱ）ヲ一（いつ）勸（すす）ムレドモ二（に）之（これ）三（さん）飲（の）マシコトヲ、弗（ず）レ聴（き）カ（言（こと）をきかない）。實（じつ）不（ふ）ル能（あた）ハ飲（の）ム也（なり）。余（われ）醉（すゐ）神（しん）旺（わう）盛（さか）ンリ。同（どう）二（に）藤（ふじ）生（せい）一（いつ）和（わ）ス二（に）岡（おか）詩（し）二（に）。（湘中（しやうちゆう））
山生（さんせい）探（たん）ツテ二（に）懐（ふところ）中（ちゆう）一（いつ）、出（い）ダス二（に）岡生（おかせい）饒（じやう）詩（し）一（いつ）。與（よ）二（に）余（われ）二（に）人（ひと）一（いつ）下（した）ス酒（しゆ）。己（おれ）ハ自（みづかみ）自（みづかみ）啖（たん）フ柿（かき）ヲ。談（だん）笑（ぎやう）若（じやく）シ無（な）キガレ人（ひと）。蓋（が）シ生（せい）無（な）キノ二（に）酒（しゆ）腸（ちゆう）一（いつ）（酒（さけ）を飲（の）まない）故（ゆゑ）也（なり）。（遊湘（しゆうしやう））

春台（しんたい）・東野（とうの）の紀行（きぎやう）の中には、時々（ときどき）まるで申し合わせたように崑崙（こんろん）の言動（ごんどう）の細密（さいみつ）な描写（びやうぎ）が見（み）える。このとき崑崙（こんろん）は和詩（わし）を行（な）わなかつたらしい。但徕（たんらい）に扈從（こじゆう）して護社（ごしゃ）のバトロ（バ）ンである猗蘭侯（いらんこう）の前（まえ）で詠（よ）んだ半（はん）ば公（こう）的な詩（し）作（さ）が一首（いっしゆ）残（のこ）るだけだつた崑崙（こんろん）は、恐（おそ）らく詩（し）を進（すす）んで作（さ）るタイプではなかつたのだらう。この旅（たび）では和詩（わし）を作（さ）つたらしいところもあるが、現（げん）存（ぞん）していない。その代（か）わり親（おや）しい仲（な）では遠慮（えんりょ）会（かい）積（せき）なしに饒舌（じやうぜつ）するところがあつた。そして同行（どうぎやう）の二人（ふたり）に和詩（わし）を勧め（すす）めたので、春台（しんたい）は東野（とうの）にも遠慮（えんりょ）せず醉（すゐ）吟（ぎん）を始（は）めたのだつたらう。伯修（はくしゆう）のような武弁（ぶべん）のタイプと馬（うま）が合（あ）つたのも話題（わだい）に事（こと）欠（か）かないところがあつたからに違（ちが）いない。

東野（とうの）は談笑（だんぎやう）の中（ちゆう）、崑崙（こんろん）にも酒（さけ）を注（つ）いで旅（たび）中（ちゆう）の方針（ほうしん）を提案（ていあん）した。先の引用（しやうぎやう）に続（つ）けて云（い）ふ。「今（こん）度の旅（たび）は郊外（きやうがい）の野遊（のぎゆう）びに出掛（い）ける程度（ていど）のものに過ぎ（よ）ぎない。とはいへ、他日（たにち）の遠遊（えんぎゆう）に備（そな）へて足馴（あしな）らしのためでもある。いかにも漫遊（まんぎゆう）の体（てい）たらくでのほほんと過（すご）しては、諸家（しよか）の嘲（あざわら）ひの種（くさね）となるばかり。そこで貴公（きこう）等（ら）とここに旅（たび）の盟約（めいぎやく）を定（さだ）めようと思（おも）う。法（はふ）は三（さん）章（しやう）のみ。（劉邦（りうぱう）の故（こ）事（じ）に倣（なら）ふ。）すなわち一日（いちにち）たりとも無駄（むだ）に過（すご）さない。疲（つか）れたといつて訪（たづ）ねるべき名勝（めいせう）を省（はぶ）かない。馬（うま）を備（そな）われない。よろしいか。」あたかも桃園（たうえん）の約（やく）のごとく、銘々（めいめい）誓（ちか）いの酒（さけ）を酌（しやく）み交（ま）わした。崑崙（こんろん）も我慢（がまん）して一杯（いっぱい）を飲（の）み干（かわ）し、茶店（ちやてん）を出（で）た。（恐

らく崑崙（こんろん）の顔（かほ）を窺（うかが）いながら、東野（とうの）は酒（さけ）を無理（むり）強（か）いしたことだらう。）

余（われ）把（は）テ酒（しゆ）杯（ぱい）ヲ一（いつ）属（しよ）シテ酒（さけ）を注（つ）いで二（に）生（せい）一（いち）曰（い）ク此（こ）行（ぎやう）也（なり）、實（じつ）適（たふ）フ二（に）莽蒼（まうさう）近（きん）郊（きやう）の野原（の）原（げん）ニ類（る）耳（みみ）。而（しか）シテ而（しか）シテ此（こ）者（しや）者（しや）非（あら）ズ、非（あら）ズレ試（し）ム二（に）他（た）日（にち）濟（けい）渉（しやう）ミ、具（ぐ）具（ぐ）勝（しやう）の具（ぐ）健（けん）一（いつ）耶（や）。乃（すなは）チ施（し）施（し）下（した）シテ（の）んびり歩（ある）く貌（がう）為（な）サバ二（に）壯（さう）遊（ぎゆう）ノ顔（かほ）一（いつ）、殆（たいてい）ソド笑（わら）ハシ二（に）于（お）大方（たいほう）ノ家（け）ニ。請（こ）フ與（よ）二（に）二（に）君（きん）一（いつ）約（やく）セ二（に）法（はふ）三（さん）章（しやう）一（いつ）曰（い）ク無（な）シ二（に）曠（くわう）日（にち）一（いち）也（なり）。無（な）シ二（に）以（もつ）テレ、飢（うへ）ノ極（ごく）度（ど）の疲（つか）勞（らう）不（な）レレ探（たん）フ也（なり）。無（な）シ二（に）以（もつ）テ馬（ば）ヲ為（な）サレ一（いち）脚（けつ）也（なり）。乃（すなは）チ各（おの）各（おの）歎（なげ）二（に）二（に）爵（しやく）一（いつ）。山生（さんせい）強（きやう）ヒテ一（いち）爵（しやく）而（しか）シテ出（い）ッ、（遊湘（しゆうしやう））

一行（いっぎやう）はさらに進（すす）み、右（みぎ）に野原（の）原（げん）、左（ひだり）に海（うみ）を望（のぞ）みながら東海道（とうかいだう）の松並木（まつなみき）を西（にし）へ向（む）かつた。どちら（どちら）も広々（ひろひろ）と見晴（みは）らしが開（ひら）け、心地（こころ）よく足（あし）を運（は）りこめる。池上（いけがみ）本門寺（ほんもんじ）を過ぎ、六（む）合（が）川（がわ）を渡（わた）つて右（みぎ）は山（やま）がちになり、河崎（かわさき）（川崎（かわさき））・金河（かながわ）（神奈川（かながわ））・程谷（ほどがや）（保土ケ谷（ほとけがや））を過ぎたところで左（ひだり）の弘明寺（こうめいじ）路（じ）に入（い）つた。すでに東都（とうと）を去（さ）ること七十（しちじゅう）余（あまり）里（り）（中国（ちゆうごく）里（り）程（ほど））、崑崙（こんろん）は既（すで）にもう疲（つか）勞（らう）の様子（ようす）である。春台（しんたい）も酒（さけ）の勢（せい）が切（き）れてきた。といつて、田舎道（いなかみち）に清酒（せいしゆ）を扱（は）く店（みせ）などあるはずもない。「山生（さんせい）疲（つか）レタリ矣（なり）。余（われ）雖（いえ）も猶（なほ）健（けん）ナリト、酒（しゆ）力（りき）已（すで）に盡（つ）ク。因（よ）リテ思（おも）フレモ飲（の）ム、而（しか）シテ酒（しゆ）不（な）レ可（べ）カラ飲（の）ム也（なり）。」（湘中（しやうちゆう））そこで糍粑（ししぱ）餅（もち）（糍（しし）中（ちゆう））と点心（てんしん）（饅頭（まんどう））を賣（う）る店（みせ）で休憩（きゆうけい）し、腹（はら）を満（み）たして再び元氣（げんき）を取り戻（もど）すと、松杉柏栢（しょうしんはくはく）（柏（はく）栢（はく））のために見通（みとお）しの利（き）かない山道（やまみち）を歩（あ）み続（つ）けた。途中（ちゆうちゆう）、出（い）合（あ）つた農夫（のうふ）に路（じ）を問（と）うと根本翁（こんぽんおう）のとうろへ行く人（ひと）たちとかえつて問（と）い返（かへ）された。弘明寺（こうめいじ）村（むら）は最（さい）爾（に）たる小村（せうむら）なので、土人（どじん）は根本翁（こんぽんおう）あるのみという。山腹（やまはら）で再び小休（せうきゆう）止（と）した後（のち）、木（き）の根（ね）を攀（よ）じながら谷間（やまがみ）の急坂（きふ）を下（くだ）ると道（みち）が開（ひら）け、人里（にんり）が近（き）づいた。ここで東野（とうの）と春台（しんたい）が後（あと）をみると崑崙（こんろん）がいな。道（みち）に迷（まよ）つたなと思（おも）つて喚（わ）んでみると、しばらくして遠（とほ）くから声（こゑ）がする。木（き）の根方（ねがた）にうづくまつて待（まち）っていると崑崙（こんろん）がやつて来（き）た。

廻（くわい）顧（こ）ルハ、則（すなは）チ不（な）レ見（み）二（に）山生（さんせい）一（いち）。以（もつ）テ為（な）スレ失（しつ）スト、路（みち）ヲ（を）略（りやく）フ、乃（すなは）チ見（み）ル下（かみ）山生（さんせい）解（げ）キテ劍（けん）肩（かた）ニシレ之（これ）ヲ掛（かけ）テ二（に）行（い）き李（り）一（いつ）劖（けん）劖（けん）（粗末（そまつ）な劖（けん））上（うへ）ニ、一（いつ）瞥（へつ）瞥（へつ）トシテ（びつ）を引（ひ）きながら降（くだ）ル上（うへ）レ厓（がけ）ヲ問（と）フ之（これ）ニ、病（びやう）メス邪（じや）。曰（い）ク、此（こ）レ劖（けん）ヲル也（なり）、非（あら）ズレ病（びやう）也（なり）。且（かつ）弘明（こうめい）已（すで）に遷（うつ）シ。日（にち）猶（なほ）ホ下（かみ）春（はる）日（にち）が昏（くろ）れかかる頃（ころ）。公等（こうらう）胡（こ）為（な）レソ忙（いそ）シキ乎（や）。且（かつ）何（なん）ゾ不（な）レ二（に）行（い）き李（り）一（いつ）劖（けん）バ一（いち）勝（しやう）ヲ耶（や）。（遊湘（しゆうしやう））

雨具（あまぎ）を入（い）れた行李（りょうぎ）を刀（た）に掛（か）け、担（か）い棒（ぼう）のよう（よう）にして刀（た）を肩（かた）に掛（か）けている。足（あし）を引（ひ）きずつていかにも大儀（たいぎ）そうなので、足（あし）を痛（いた）めたかと聞（き）くと、腹（はら）が減（へ）つたからで、足（あし）が痛（いた）いわけではないと答（こた）えた。付け加（く）えて崑崙（こんろん）はいう。「それに弘明寺（こうめいじ）はもうすぐそこでしょう。日もようやく傾（かた）き始（は）めたばかりだし、二人（ふたり）ともどうしてそんなに先（さき）を急（いそ）ぐのです。だいいち名所（めいしよ）を回（まわ）りながら行くはずではなかつたのですか。」川沿（がわぎわ）いに二里（にり）ほど行（い）くと、道端（みちばた）に榜（ぼう）（表示（ひょうし））があり、二位（にゐ）禪（ぜん）尼（に）（北条（きたう）政（せい）子（こ））の木像（もくざう）があると書（か）してあつた。春台（しんたい）は寄（よ）つて行（い）こうかと言（い）つたが、崑崙（こんろん）はまるで前後（ぜんご）矛盾（まひん）したことを言（い）う。「山生（さんせい）曰（い）ク、未（いま）ダレ晚（おそ）ク、也（なり）」

ト。「(遊湘)後でも見られますよ(近いんだし)」というわけで、一行はこの日の目的地である弘明寺の村落まで直行することにした。

根本家の歓待

村には立派な家が一軒あり、そこが根本伯修の家だった。一足先に帰省していた伯修が父親と一緒に一行を出迎えた。そして蕎麥を打ち、酒となる。春台と東野は東都(江戸)の芝居の話などで盛り上がったが、崑崙は疲労困憊、起きてもらえない様子で、重病人のように横になって眠っていた。皆が酒を勧める度に首を振って断わるので笑われた。それなのに、蕎麥を食う時は主人も盛んに勧めるが崑崙も遠慮せず人一倍食った。春台と東野は大笑いして言った。「よくそれだけ食えるものだ。おまえさんにはとてもかなわん。食いつぶりはまるで康將軍なみだが、腹を下したりしないだろうな。」

東野はとくに崑崙の滑稽さを押出し描いているが、こうして事ある毎に先輩たちにはひどく調戲されたのである。さすがに崑崙もこの蕎麥食い競争で面目を施したときの思い出を正直に詳しく書き残している。康將軍が云々というのは、魏に亡命した趙の廉頗將軍の帰参が老齢のためになわなかった話で、一斗の飯・三斤の肉を平らげ馬に跨がった往年の猛将ぶりを披露したにも拘わらず、会談中に三度も厠に立つたと使者が趙王に嘘の復命をしたという故事である。こうした悪戯を言われた側の崑崙でさえ書き遺しているのがつまりは護國の文化であり、その銜学趣味の表れでもあったのである。

爲^つ二蕎^{そば}麴^{もち}一、置^お酒^{さけ}。余^{われ}與^{とも}二藤^{ふじ}生^{せい}一劇^{げき}談^{だん}。(こは芝居の話か。)無^なシ倦^うムコト。山^{やま}生^{せい}ハ則^{すなは}チ疲^{つか}レ甚^しダシク、兩^{りやう}足^{あし}重^{おも}レ繭^{まゆ}ヲ(肉刺ができる)、不^ずレ能^{あた}ハ履^ふムコト。地^ちヲ委^{あつ}頓^{とん}、善^{ぜん}ク睡^{ねむ}ルコト如^{ごと}シ二重^{じゆう}病^{びやう}ノ。但^{たゞ}以^{もつ}テ二其^{その}食^くヲ一、麴^{もち}ヲ過^すグルヒト也^や爲^なス無^なシト。慮^りハ耳^{みみ}。豈^あ非^{あら}ズ二以^{もつ}テ不^ずルヲ飲^のム酒^{さけ}故^ゆニ乎^や。強^はフレバ之^{これ}ハ則^{すなは}チ掉^おル耳^{みみ}。滿^み坐^ざ笑^{わら}フレ之^{これ}ヲ。(湘中)
麴^{もち}酒^{さけ}ニ慰^{なぐさ}勞^{らう}ス。山^{やま}生^{せい}不^ずレ扶^{たす}ケラレ床^{とこ}ニ不^{あた}レ能^{あた}ハ起^たツ。而^{しか}レトモ豪^{ごう}啖^{たん}自^じ若^{じやく}。為^なス可^べシト笑^{わら}フ矣^や。(遊湘)

啖^{たん}二蕎^{そば}麴^{もち}ヲ一。予^{われ}與^{とも}二東^{とう}壁^{へき}(東野)・德^{とく}夫^ふ(春台)一爭^あフ強^はフルヲ。主^{しゅ}人^{じん}強^はシテ食^{くら}ハシム。二子^こ猶^{なほ}ホ謂^{いわ}ヒ避^ひクト。予^{われ}三^{さん}舍^{しゃ}ヲ一、大^{おほ}ヒ噓^うヒテ不^レ己^ま。是^この日^ひ予^{われ}甚^しダ痛^{いた}ム矣^や。不^レ能^{あた}ハ二起^き立^たスルコト一、猶^{なほ}扶^{たす}ケラレテ能^よク行^ゆク。二子^こ戲^{あそ}ハレテ曰^{いは}ク、「子^こハ是^こレ廉^{れん}將^{しょう}軍^{ぐん}之^の善^よク飯^{めし}ヲ耳^{みみ}。尚^{なほ}無^なカラシ二能^よク遺^あ矢^や(原文「矢」注)スルコト一乎^や哉^や。」ト。(行記)

崑崙には「三癖」があると東野はいうが、徂徠のいう「好古の癖」の他には、春台『湘中紀行』に「古墓癖」「坐癖」の語が見え、東野『遊湘紀事』に「古墓癖」の語が見える。「古墓癖」は東野の言葉の引用で「好古癖」と同じものであり、「坐癖」は春台が命名したも

のだ。しかし、「讀書自若」に「豪啖自若」を重ねれば、三つめは恐らく健啖家であることと指すに違いなく、すなわち「豪啖癖」といつことになる。つまり、好古癖に古墓癖は含まれ、坐癖は讀書癖だがこれは他の儒生も自家の面目としたところだから、特に畳に敷が生えるほど坐る特徴を表し、無酒腸の代わりに啖飲癖という三つ組みである。しかし、なお一つ誤解をおそれずに挙げれば、次のエピソードにも片鱗をのぞかせるように、人見知りをせずに率直で思い切った発言をする直言居士であつたらしいことが三者の日記の端々から窺えるのである。そのいささか極めて素直な言動は、先輩たちから温かくかつ遠慮ない筆で活写されている。

隠居の根本老人(伯修の祖父か。)が挨拶に現れたときのことである。春台たちは明日の旅程を相談していた。崑崙はぐつたりと横になり、聞いているようでもない。疲れて睡っているのだと思っていた。しばらくすると根本老人が挨拶に来られた。七十歳ほどと見受けられたがひげも髪も黒々として、しっかりした老人である。老人は自分たちに向かつて言った。「お前様方もせつかく当家に來られたからには、伯修と一日も酒を酌み交わさずにそそくさとお出かけになるようなことはないでしょうな。元氣のよい老人の言葉にたじろぎ、二人とも絶句してしまつたとき、崑崙がにわかに意気込んで挨拶した。「まことに老人のおつしやるとおり。(お言葉に甘えましょう。)'このとき初めて崑崙が睡つていなかったことに二人は気づいたのである。

燈^{とう}下^か議^ぎ。二明日^{あした}路^{みち}所^{ところ}ヲ一。二繇^よ。山^{やま}生^{せい}臥^ふシテ不^ずレ聽^きカ。余^{われ}二二人^{ふたり}以^{もつ}テ爲^なス二德^{とく}レ而^わ睡^{ねむ}レリト一也^や。須^{しよ}臾^ゐシテ根^{こん}太^た翁^{おう}出^でテ見^み。年^{とし}可^よリ二七^{しち}十^{じふ}一^{いち}。鬚^{ひげ}髮^{かみ}豐^{あふ}腴^う、豐^{あふ}饒^に者^{もの}也^{なり}。謂^{いわ}ヒテ二吾^{われ}輩^{はい}一曰^{いは}ク、諸^{しよ}公^{こう}不^ずレ來^{きた}ラ已^{すで}ム。已^{すで}來^{きた}ルヲ不^ずレシテ下^{くだ}飲^のム。二伯^{はく}修^{しゆ}酒^{さけ}ヲ一。一^{いち}日^{にち}上^う輒^{しか}チ去^さレ耶^やト。余^{われ}兩人^{ふたり}舌^{した}縮^{しゆく}ミテ不^レ能^{あた}ハ答^{こた}フル。山^{やま}生^{せい}忽^{たち}チ奮^{ふる}ヒテ曰^{いは}ク、翁^{おう}之^の言^{げん}是^ぜリ矣^やト。始^はシメテ知^しル。二山^{やま}生^{せい}未^{いま}ダ爾^{なり}ヲ一。睡^{ねむ}レ也^{なり}。(遊湘)

根翁は伯修に似て豪宕な気性の人だつたようだ。ただし、面白く脚色し過ぎている嫌もある。春台の記録は東野の文飾を欠く分、より細かな経緯を留めている。『行記』も「詰朝(翌朝)のこととしており、恐らくこちらが正しい。

廿^{にじふ}四^し日^{にち}。二舊^{きう}日^{にち}。故^{もと}リ當^{あた}ニ行^ゆカント。根^{こん}翁^{おう}留^{とど}メテレ之^{これ}ヲ曰^{いは}ク、諸^{しよ}君^{くん}胡^こゾ爲^なス二乎^や行^ゆ色^{しよく}ヲ。出^でかけの様子。一其^{その}レ懼^{おそ}レ。二雨^{あめ}歟^や。鄉^{きやう}也^{なり}霖^{りん}雨^う浹^{せつ}旬^{じゆん}。既^{すで}ニ有^あリ。二虹^{こう}ヲ截^{せつ}。雨^{あめ}ヲ法^{ほふ}當^{あた}得^えン。二十^と日^{にち}之^の晴^{はれ}ヲ。一第^だニ優^う遊^{ゆう}スルニ以^{もつ}テ。二永^{えい}日^{にち}ヲ一哉^や。則^{すなは}チ山^{さん}君^{くん}モ亦^{また}以^{もつ}テ息^{いき}シレ足^{たり}ヲ焉^や。余^{われ}與^{とも}二藤^{ふじ}生^{せい}一未^{いま}ダ有^あラ二以^{もつ}テ答^{こた}フルコト一。山^{さん}生^{せい}奮^{ふる}然^{ぜん}トシテ曰^{いは}ク、不^レ敢^{あへ}テ請^こハ一耳^{みみ}ト。於^{こゝ}レニ三平^{へい}留^{とど}マレ。(湘中)

昨晚の話の真相は恐らく次の通りである。翌朝、予定通り出掛けようとする、根本老人が引き

留めた。「皆さんはもうお出かけになるのか。雨が心配なのか。もう十日も長雨が降った後で虹も出ましたからには、十日は晴れることでしょう。もうひと晩逗留してこの辺を見物して行かれよ。そうすれば崑崙君も足を休ませることができましよう。」という挨拶に、春台・東野がしばらく返事をためらっている折、崑崙が元氣よく「こちらこそそう願いたいと思つていたところです。」と応じたので、もう一日滞留することになった。「主人懇々留、駕言出遊。」(行記 真偽はいずれの場合でも、崑崙が待つてましたとはかりに先輩を差し置いて応対しているところが面白い。年長の友人たちは呆氣にとられたことだろう。)

この日一日は周辺を探訪することに決まったので、まずは昨日通り過ぎた政子の像を拝し、弘明寺の観音・大悲閣に詣でたが、千社札のあまりの多さに辟易し、堂の後ろの松樹が影を落としている眺望のよいところに座を移すと、そこに敷物を藉き、春台と東野は笛で「折楊柳」などの唐楽を奏でて帰った。丘を降り、再び根本家の前を過ぎて半キロほど行くと井土谷村の垂蓮寺で平太夫人・崑崙は「平禪尼」という。池禪尼か。の石像を見た。春台は古物だと思つた。ここで崑崙は感を催したのか、やや細かい描写をしている。像は黒衣青帽、いかにも柔和な表情は禪尼の人物を偲ばせるに十分なものがあつた。

緇衣青帽 與々如(和らぐ貌)也。慨想其爲人下哉。(行記)

弘明寺村に戻る途中、牛門の千鞍生(未詳)と相識だと言つて昨夜話をした医師宜泉が、僕奴に瓦餅・土瓶・徳利かなどを入れた莞蒨・蘭で編んだむしろ。藁座か)を持たせて現れ、野外の酒宴になった。春台らは酒の勢いを得てまた笛に興じた。春台は「唐帝の羯鼓といえども乃公の笛には及ぶまいとますます意氣軒昂でいつかな止める氣配がない。宜泉はやがて袂から菊の花と意外な梅の花を出して皆の酒に浮かべた。菊は節物だが梅はどうしたのかと問うと大風の後などに季節外れの梅の咲くことがあるという。以前、韓使(朝鮮通信使)来朝の節、縣次公(山縣周南)が応対した際、韓人は杯に梅花を浮かべて飲んだ。そこで「梅・開・杯」の字を韻として分韻の詩を応酬したことがある。この話を東野が思い出して話題にした。東野は周南詠詩の韻を用いてさつそく得意の詩を作り、春台と崑崙も和詩を詠んだ(行記では春台が和したとあるのみ)。さて東野が崑崙のほうを見ると、いかにもつまらなそうな様子であつた。ところがふと下を見降ろすと詠詩の声はひときわ高くなつた。鼻のあたりをおごめかし何だか嬉しそうな顔つきなのを見て東野も見下ろすと、根本老人が下僕に弁当を持たせてやつて来るではないか。「亭午(正午)、主人齋(正午、主人齋)ニ搏黍(原文「搏黍」。黍団子)ヲ一來食(シム)探(ル)薪煎(ル)茶(ヲ)。則チ山野草莽之實際也。」(行記)

顧ルニ山生ヲ、有ニ無聊ノ之色。余哦スニ詩ヲ。兩生和之。而シテ山生益々有

リ快快之色。俄カニ山生下瞰。吟哦ノ之聲頗高シ。視ニ其ノ鼻間ニ栩栩然(タリ)嬉しそうな貌。乃チ見ルニ根翁ノ之奴。來タリテ將ニ行厨(弁當)ヲ也。尋ニ根翁モ亦至ル。奴去(リ)テ。二林中ニ、拾(ヒ)ヒ二壁葉ヲ、然レシテ之ヲ煖ム。酒。啖飲シテ歡甚シ。(遊湘)

春台が概してマイペースであるのと一対をなし、東野は後輩に対する嘲諷を飽くことなく繰り返しながらも、とにかくよく観察して記録をとつてくれたおかげで、三幅対の欠かせぬ一端としての崑崙のプロファイルが世に残つたわけである。

詩的潤色によつて薪は隠れて落葉となり、「林間ニ煖ム酒ヲ燒クニ紅葉ヲ。」(白居易「寄題送王十八歸山」)「山仙遊寺」という『和漢朗詠集』の風流となる次第だが、東野は年少の友の食いしん坊ぶりをユーモラスに描いている。

そつこうするうちに日脚も傾いてきたので伯修の家に戻ろうとすると、東南の山際にひときわ目立つ二本の松が見えた。宜泉に尋ねると、ここから一里(中国里程)ばかりのところにある老松で、一根三幹、蟠龍のごとき奇観を呈しているとのこと。村人はその名も伝えていなかつた。崑崙はぜひ見たいと言ひ出した。「山生前、曰ク請(ヒ)テ往(ル)ニ觀(ス)之ヲ。可ナル乎ト。」(湘中「太宰欲(ヒ)往(ル)カト。則チ顧(ル)ニ山生ヲ。生故態發。亦欲(ヒ)往(ル)カト。」(遊湘)この「故態發す。」とは持ち前を発揮したという意味か。崑崙自身のいうところは次のとおりである。

晡時、徹(ツ)テ席ヲ歸(ル)ト。直(ニ)其(ノ)前山有(リ)松樹。陰翳可シ。愛(ス)之。村人不(レ)記(ス)何(ノ)名ナルカ。一惟(ニ)想(シ)ム下其(ノ)瀟湘(ノ)酒(ノ)與(ニ)人境(ノ)相遠(シ)キヲ也。欲(シ)三逍(シ)遙(シ)乎此(ノ)二、與(ニ)二子暨(ニ)伯脩・宜泉(ノ)登(ル)リ焉。行(ク)コト且(ニ)三里、果(シ)テ一佳境也。予益(ニ)疲(レ)極(ニ)解(ル)劍ヲ轉(ル)久(シ)ス之(ノ)不(レ)知(ル)二日(ノ)入(ル)一始(ニ)歸(ル)家(ノ)。(行記)

宜泉を案内として、春台・東野・崑崙に伯修を加え、田畑を隔てて向かいの山坂を一行は登り始める。この辺りの雰囲気は東野の描写がよく伝えている。

山皆樸樸(自然のままの小木・灌木類)、榛莽(雑木や雑草の生い茂っている藪)鉤(カ)フ衣(ヲ)無(シ)復(タ)正路(一)。擇(ニ)樹間(ノ)可(ベ)キヲ一レ躡(ル)躡(ル)之ヲ。一ハ左ニ一ハ右ニ繞(ル)テ山腹(ノ)上(ニ)而(シ)上(ル)宜泉捷(シ)甚(ニ)とて足が速い、不(レ)可(レ)カラ接(セ)スレ踵(ヲ)。後(ニ)ついていくことができない。(三)三生ナル者分(ツ)テ為(ス)ニ三處ト。盖(シ)路窮(マ)ジテ而(シ)返(ル)者數(ニ)ナレバナリ。先(ニ)ナル者(ノ)在(リ)ニ頭上(ニ)、如(シ)ニ一跳(シ)テ可(ベ)キガ及(ブ)及(ブ)而(シ)レドモ。邪(ニ)追(ハ)レ之ヲ、則チ違(フ)ニ數十百歩ヲ一故也。余(ニ)三人後(ニ)先(ニ)至(ル)レ巔(ニ)、則チ宜泉踞(シ)テ樹(ニ)下窺(ル)者多(シ)ナリ矣。(遊湘)

苦勞して登った甲斐あつて、山頂から四望すれば、田畑の畝は井然と暮盤の目に並び、山々が畳な
わつて、近くは翠緑遠くは蒼茫、遙かに箱根の山並の向うに芙蓉（富士山）の冠雪を望む。折からの
夕陽を受けてその白さは一段と際立ち、輝くばかりだった。東北に目を遣れば、海波もまた光を受け
て限り無く広がり、黒い影を波間に現わしては没する帆影がなければ空と見まがうばかりである。
本目（本牧）の州の尽きる辺りには懸崖数十丈、半里ほどの幅に延びて、今削りなしたかのように白壁
も及ばない壁面を見せている。東野は感嘆の余り宜泉に感謝して、あなたが案内してくれなかったら、
ここにこんな名勝のあることを見逃していたことだろう。惜しむらくは、先ほど持参してくれたもの
（酒）が今ここに無いことだ、と言った。すると崑崙が笑つて答える。「初め衛夫人に学んだのが、無駄に
時を費した、つてやつですか。」東晋の書聖王羲之は子どもの頃、衛夫人に書を学んでそれを秘法とし
て珍重したが、後に古代の碑文を見、手本を誤ったことを後悔したという。東野はこの崑崙の機智を
自分の注力した叙景文の締め括りに使おうと考えた。

余揖^{あやう}シテ^二宜泉ヲ^一謝^{しや}。非^{あら}ズバ^{公ニ}幾^ほンド乎^失セシ^二此^コノ山ヲ^一也。惟^たタ^二恨^んム^二向^きノ所^レ携^たフル
不^ずル^レ於^レ此^也也。還^り亭^マ山生^は笑^ちテ曰^{はく}、其^そノ學^{まな}フ^二衛夫人^一、空^{から}ク^二費^ふス^二歳^{さい}月^{げつ}ヲ^一耳^{（遊湘）}

一行が帰宅すると、今度は根本老人が手づからの酒肴でもてなした。「烹魚煖酒、濁醪（どくろう）尤
可（よ）シ口（く）ニ。痛飲（つうく）竟（さ）タ。」（湘中）「晩中飲み明かして、春台は一絶を賦し、主人に寄謝した。東野と
崑崙も和詩を作った。極度に疲労して松の下に「轉輾（てんてん）（寝返りを打つ貌）していたはずの崑崙の足は、夜
になると持ち直したらしかった。」「是（こ）の日（ひ）山生（さんせい）足（あし）治（な）ん^{（これ）}と^{（之）}ヲ^{（之）}旋（くわ）ン^{（之）}歩（ふ）履（りやう）罔（な）レ^{（難）}。狂態（きやうたい）時（とき）發（は）ル^{（所）}ニ
以（も）相（あ）與（い）遊（ゆう）陟（しつ）盡（く）ク^{（ス）}也（や）。」（湘中）「狂態」とは何だろう。やはり足の痛みを訴えたのだ
たろうか。

鎌倉街道

明けて二五日、日の出とともに一行は朝霧の中を出発した。うまかつた濁酒を出がけにまた数杯
重ね、江戸に帰る伯修と別れて、両側に小山を抱えた田圃の中の小道を西南に進んで行く。山間の道
に入り、依然として霧の中を進んでいくうちに、昼近くになって漸く視界が開けてきた。すると、十歩
ほど先を歩いていた春台が草の上に座り、右手を振り返つて大きな声を出した。東野と崑崙が追いつ
いて同じ方を見ると眼下に海が広がり、再び箱根と富士が手に取るばかり間近に見える。この辺りが
擲筆松のはずだと春台は言った。少し上り下りして松樹が見えた。弘明寺から二五里の所にあるこ
の松は、相伝では平安の昔、画工巨勢金岡が当地の景勝を模写しようとして成らず、絵筆を投げ捨て
たことからこう呼ぶ。左手に数十段の石段を登ると、松の前に擲筆山と門に書き記した草堂があり、

能見堂という扁額（へんがく）を打つてあつた。どちらも明僧心越の篆字（てんじ）であり、書法は観るべきものがあるが、
「筆捨て」という俗語をそのまま文字にしたのが残念だと春台はいう。さらに、能見とは絶倒の意で、
画工が筆を投げてのけぞつたところから得た名であるというので、ますます雅でなくなつた。中には大
きな閻魔の像があるばかりで、他には十人と座る余地がない。「世之（よ）の細流（しやうりゅう）僧（そう）、卑陋（ひろう）シテ無（な）キ^{（二）雅致（やち）}
一（一）乃（のみ）爾（のみ）。」（湘中）「鮮（せ）を剥（は）がして井上翁（みづのう）未詳（みずしやう）の碑（ひ）を読んだ。細井広沢の書で、折目正しい楷書で書かれて
いる。」「堂左（だうさ）一（いち）屠蘇（とそ）鸞（らん）ニ心越（しんえつ）師（し）ハ景詩（けいし）ヲ。」（遊湘）山上からは金沢の諸名所が絵のごとく望見さ
れた。僧侶が出て来て金沢八景の有り場所を一々指さして案内してくれるのをへえへえと「磬折（けいせつ）し
て（腰）をかめて聞いた。金沢とは、元来（もとより）海曲（かいきよく）（入江）の名である。入江の東は海に開けて夏島・野島・帽
子島など大小の島が点在し、西に迫門神社（瀬戸神社）、北に称名寺、南に大寧寺（太寧寺）がある。迫
門には橋が架かり、前に突出した州の先端には州崎の天女祠（琵琶嶋神社）がある。住民は半農半漁、
また「鰹（かつお）戸（こ）」洞門（どうもん）があり、潮の干満によつて景色を異にする。海東には房総の山々が翠黛（すいだい）を連ね、
霧（きり）のかかつた波間には帆影（はんえい）が縹渺（ひょうみやう）と見え隠れて何とも美しい。いつの間にか腰を据えて見入つてし
まつたが、それでも当地の絶景の十が一をも尽くすことはできない。巨勢氏が筆を投げ捨てたのも宜
なるかな。東野は松樹に倚つて八景の詩を読んだが、僧のくどい解説のために詩興もだいぶ減殺され
てしまった。春台と東野は例のごとく笛を吹く。崑崙もさすがにこの景に見惚れたのか、例の調子で
はあるが珍らしく同座していた。

於（お）テ^{（二）}是（こ）ニ余（あ）と藤（ふ）生（せい）一（いち）踞（く）ツテ^{（二）}松（しょう）根（こん）ニ^{（一）}吹（ふ）ク^{（二）}笛（ふえ）ヲ^{（一）}。山（さん）生（せい）存（ぞん）ス^{（二）}焉（ここ）ニ^{（一）}。（湘中）

例によつて皆が大騒ぎしながら饒舌（じやうぜつ）していると、供人を大勢連れた貴婦人がやつて来た。笠（かさ）傘（さん）と
屨（く）（草履）履（は）きの三人ずれを見て珍しがり、付き人に茶菓（ちか）を持たせてふるまってくれた。崑崙は「投（な）ゲ
菓（くわ）ヲ^{（二）}歸（かへ）ル^{（一）}」黄（わう）（つばな）ヲ。」（行記と、「詩経」の句を使つて美人の贈り物に挨拶する意の記録を残した。春
台は記念に戯詩を詠み、東野が和した。東野の作には「二毛却（にまうけつ）ヲ^{（二）}笑（わら）フ^{（一）}。潘（はん）中（ちゆう）郎（らう）。」の句があつた。東晋の
潘岳はその美貌のために婦人たちが車に果物を投げ入れた『世説新語』。その潘岳がまだ中年にし
ておのれの頭に生えた白髪に驚いたという「潘鬢成霜（はんぶんせいそう）」の故事を逆手にとり、まだ若いのに老人扱いさ
れたという自虐の心である。三人はさらに大笑いして下山した。

一里ほどで称名寺に着いた。平実（へいじつ）時（北条実時）が下毛薬師寺の僧審海（しんかい）を招いて創建した寺で、子の
顕時（けんじ）の時に書を蔵し学徒（がく）を招いた。今では廃れて往時の倅（せ）はない。山門の金剛力士像と本殿の弥
勒菩薩像は運慶の作である。庭内には藤原為相（たけふら）（冷泉為相）が歌を詠んだという六浦（むつら）機樹（かき）の樹や、西
湖（さいこ）から舶載（はくさい）されたという黒梅の樹などがあつたが、いずれも元の木は枯れていた。庭のたたずまいには
さすがに古色がある。ちょうど本殿には数人の僧が列座し、寺の重器（じゆうき）を見ているようだった。主人が

自分たちに気づき、横で見られるようにはからつてくれた。大概は仏像・経巻・衣鉢の類である。その他には朝廷からの文書が多かった。中国の珠簾などもあった。どれも貴重なものには違いないが、自分たちからすれば所蔵されている古書が最も貴重である。後ろの山に文庫があり、廃れて久しいがまだ古書の若干は存している。現在は手前の土蔵を文庫と称しているという。しかし、古書は見せてもえなかつた。暗い部屋の奥で、虫鼠の餌食となるのがいかにも残念だ。

寺を出て南に行き、浜に出ると漁村があつた。浜は細かく屈曲して、外海への出口の狭い所に橋が架けてある。橋の西には迫門祠がある。華表の南の小島には天女祠があり、やはり橋を通っていくのである。どれもさしたる眺めではないが、上に生い茂る松柏の古びた有様は見応えがある。金沢の景勝とはこの辺りの眺めをいうのであろうと思ひ、春台はまた笛を吹いた。やはり酒がない。酒がないくらいなら旅をしないに越したことはないと思ひ、春台がぼやくと、崑崙が笑つていう。「何を見当違いな薄遊だからこそ我々にもできるので、壯遊だったら元来ができません。どんなものでも願つたりかなったりなんてものはないのが天の道というものです。まったく分かつていないんだから。こんなことを私がいうのも、だいたい春台さんたちは私が酒を飲めないうために再三私を着にするから、こつても言つて突っかかりたくなるんですよ。」春台は聞き捨てにして歩いていった。

歎^{たん}ジテ^い日^ひ、悲^{かな}シイ^哉、薄^{はく}遊^の之^の無^なキ^ニ以^{もつ}爲^なス^ニ、樂^{たの}シ^シヲ^や也^や。遊^{あそ}ニ^ニ勝^{しょう}地^ちニ^一而^{しか}モ^レ不^ずレ^バ飲^のマ^酒ホ
 キ^二之^こレ^不ル^ガ一^レ遊^{あそ}バ^{ナリ}ト^ト。山^{さん}生^{せい}笑^{せう}テ^テ日^ひク、子^しノ言^{げん}謬^{めう}レリ^哉。吾^{わが}輩^{はい}ハ^タタ^能ハ^薄遊^{はく}ス^ルノ^も故^{ゆゑ}ニ
 得^えレ^遊アラ^ハ。若^もシ^必ズ^壯遊^{さう}セ^ン邪^か。則^{すなは}チ^不ル^ベカ^フ得^えレ^耳。物^{もの}無^なキ^ハ兼^かヌ^ルヲ^レ美^びマ^天之^{てん}道^{どう}
 也^や。子^しノ言^{げん}謬^{めう}レリ^哉。之^こレ^子屢^{しばしば}以^{もつ}テ^不ル^ヲ飲^のマ^酒見^みレ^難ヲ^や。故^{ゆゑ}ニ^争口^{こう}酒^{しゅ}爾^に。湘^{しやう}中^{ちゆう}）

迫門の西南に引越という村があり、住民は製塩を生業としている。井桁の形の塩場を過ぎて、左に金龍院という禅寺がある。後ろの浜には奇石が樹木によりかかるようにしてあり、幅一丈約三メートルで頭が大きく、高さはさらにある。昔、大山積霊（大山祇神）が豆州三島から飛来してこの石の上に止まつたので、里人が祀つたのだという。迫門祠がそれである。道は平坦になり、西に折れて六浦里を通る。金沢から十里ほど行つた辺りの山裾に厳嶋地藏菩薩像がある。ここが武州・相州の境界で、界地藏という名がある。また鼻が欠けているので、鼻地藏（鼻欠地藏）ともいう。さきごろ山崎闇齋先生という人があり、その愛宕詩の中に、鼻・天狗・鼻・地藏という言葉があった。そうしてみるとこれも山崎門下のしわざであらうか。黥ですら酷いが、鼻とはなおすさまじいことだ。

さて相模国に入つた。二里ほどの所に山を削り洞門となした所があり、土地では朝比奈洞門（朝比奈切通しと呼ぶ）（遊洞）には朝夷鑿とあり。切り立った断崖が十仞（十尋ほど、道も険しい。仁治年間、將軍頼経が平泰時（北条泰時）に開かせたものと伝えている。和田義盛の子朝比奈義秀が一夜にして

掘鑿したというのはおかしい。道端に梶原景時が刀を洗つたという泉があるが、由来は未詳である。切通しの東数里のところに嘗鹽地藏を祀つてあるが、六浦の人が鎌倉に塩を売りに行くとき、この像に塩を供えたという。別説では、もとの像は光を放つていたが、ある塩の行商がこれを地に倒して塩を食わせたところ怪がおさまつたので名づけたのだとか。齊東野人（田舎者）の俗説で笑うべきものだ。さらに一里ばかり先に明王院がある。五大明王を祀るので、五大尊堂ともいう。寛永年間の火事で四大尊は焼け、不動明王だけが現存する。その東の草深い所は源基氏（足利基氏）の邸跡である。鎌倉の盛時に足利氏は累世ここに拠つていた。尊氏が天下を取ったときは、長子の義詮がここにおり、義詮が將軍になると次子の基氏を関東の鎮守（鎌倉公方）としてここに住まわせた。その後、持氏の代に至つて職を失ひ、駿州に出走する。少子成氏は土岐持益に養われて信州にあり、やがて越後の上杉房定の嘆願で鎌倉公方となつた成氏が旧宅を修理してここに住んだ。成氏が古河に移つた後、遂に廃墟となる。しかし、それ以後も鎌倉の住民はいつまた戻ってくるかもしれないというので遺跡をそのままに放置し、こうして荒れ野となつたのだ。

鎌倉府内

土地の故老の話ではこの原を過ぎると、右手に浄妙寺があるという。この寺は尊氏の父貞氏が創建し、関東五山の第二となつた。今は衰退しているが、実に瀟洒な禅刹である。寺の前を西に流れる川は青砥藤綱が銭を落として拾わせた滑川だ。やや進むとまた右手に杉本寺がある。地名から大倉観音堂と東鑑（吾妻鏡）に記す観音で、坂東三十三観音の初めに当たる。門入つて石の階段を数十段上ると中腹に観音堂がある。境内は掃除が行き届き、他の野寺のようではない。古木あり厳あり、これまた浄刹である。地藏菩薩の石像があつたが、脇の下から腰にかけて斜に深い刀創のようなものがある。春台は言つた。「これも山崎一門のしわざだろうか。さつきは鼻を恐るべきものと言つたが、腰斬とはそれどころではないな。まったく、当節はお地藏様も御難なことだ。」東野と崑崙は笑つていた。

さらに行くくと、これも右手に石段が百段ほども続き、荏葉祠（荏葉天神社。遊洞では荏葉天神祠）がある。頼朝の頃にはすでにあつたという古祠だ。こゝで護良親王の墓の在処を尋ねた。神社の東の方二里余りの田は頼朝の邸跡である。変わり果てた有様は黍離の歌を賦すのにふさわしい。北に頼朝が念佛・誦経していたという法華堂がある。初めは銀の二寸ばかりの観音像を安置したが、後に木像を造つた際、その頭の中に銀の像を納めたのが現在雪下の相承院にあるという。それは阿弥陀の像であらう。堂の後ろのうねうねとした石磴（石段）に沿つて下りていくと頼朝の墓があつた。古い石塔で一字の銘もなく、苔蘚むして囲いもなく、人主の墓らしくない。所伝が疑われるほどの有様だ。崑崙は感銘を受けて言つた。「生きている間、民に哀れみを施さなかつた者を、いったい民が哀れむものでしょうか。」

二子ともに領いた。

謂^い二^に頼^{たの}朝^{あさ}墓^ぼ一^一。於^おレ是^{こゝ}是^{こゝ}與^あ予^{われ}遠^{はな}カ^二有^あレ感^{かん}謂^い二^に子^し二^二日^に墳^{ふん}墓^ぼ之^の間^{かん}未^{いま}レ施^ほ二^二哀^{あへ}ヲ於^お民^{たみ}一^一。而^{しか}シテ民^{たみ}哀^{あへ}レム者^{もの}、否^{いな}乎^やト。(行記)

東野はまたこの時の崑崙の印象を次のようにまとめている。

而^{しか}シテ山^{さん}生^{せい}ハ則^{すなは}チ喜^きビ可^べ知^しル也^也。蓋^{おほ}シ生^{せい}居^き有^あ二^二癖^{へき}一^一。而^{しか}シテ古^こ墓^ぼ癖^{へき}最^もモ入^いル膏^{かう}肱^{ぶく}二^二。路^{みち}二^二遇^ぐヘハ二^二葛^{くわ}薨^{そう}一^一(草刈や樵夫・農圃(こゝは農夫の意)二^二、必^{かなら}ズ問^{もん}ヒテ下^か有^あルカ古^こ墓^ぼ一^一否^{いか}ラザルカト、而^{しか}シテ後^{のち}敢^あ行^{かう}行^{かう}る好^{この}ムレ古^こヲ之^の迂^いナル現^{げん}実^{じつ}離^りれしるありさま、雖^{いへど}モ二^二吾^わガ曹^{そう}モ二^二病^{びやう}ナリト、而^{しか}シテ余^あト與^と二^二太^{たい}宰^{ざい}一^一、將^{まさ}レ避^さケント二^二三^{さん}舎^{しゃ}一^一也^也。(遊湘)

すぐ西隣が鶴岡である。到着したときは日没時だった。鶴岡の下を雪ノ下の里という。八幡宮に詣で、その司祝(神職)の家が参拝者を泊めてくれるので、さつそく宿をとり横になった。

しばらく休んで、春台が柱に凭(よ)れて笛を吹いていると、主人が聞き咎めて挨拶にやつて来て言う。「皆様方はどういう方々で、どちらから来られたのですか。今吹いておいでの方の音など、こんな人里離れた片田舎では聞いたことがありません。当地にいらしたご縁で、もう一曲お聞かせ願えませんかでしょうか。」下手だからといって春台が遠慮すると、もう一人老人が現れて同様の挨拶する。「わたくしはこの社の楽人でございしますが、田畑に生い育ち、相伝の節回しをすべて心得、まだ都の正しい音階を耳にしたこともございせん。とはいえ代々この社の奏楽で家食してまいった者で、この得がたい機会にぜひご披露願いたく存じます。子弟の者ともただいま外に集まり、耳を澄ませております。そしてわたくしにぜひともお願いしてほしいと申します。われらごとき者のために、もう一度お願い申し上げます。」甚だ、恭しい挨拶である。春台は承知して、その十名ほどの子弟なる者たちに、もつと近くに集まるように言ったが、皆遠慮して進む者がいない。わずかに少年が二人、お辞儀をして末席にかしこまった。そこで春台は東野と一曲を吹いた。東野はまた筆簾も吹いた。崑崙は楽器を奏でることとはなかったが、本人いわく歌を歌ったという。聴く者たちは非常に喜び、口々にほめそやした。この有様に、春台は古都鎌倉の遺風を感じた。

そして老人は何をお弾きになるかと尋ねると筆簾を吹くという。今度はこちらから所望したが、固辞して譲らない。東野が少年たちと同様に尋ねると、一人は笛、一人は筆簾を習っているという。少年たちに何度か勧めて数曲を吹いてもらった。少々まちがった所を直してやると、とても感謝して、礼に社殿の楽器・重器を見せるから明日朝いっしょという。笛の少年は大石氏、筆簾の少年と老人は鴨氏である。宿の主人松尾氏ももと神職の親族である由、こうしているうちに夜もすっかり更けたの

で、皆横になった。崑崙はとくに華胥の国に遊ぶ夢を食っていた。

乃^{すな}チ山^{さん}生^{せい}ハ則^{すなは}チ爲^なシテ二^二華^{くわ}胥^{しよ}ノ之^の遊^{いう}ヲ一^一已^すビ久^{ひさ}シ矣^矣。(遊湘)

崑崙の記述では、「夜深ク太^は冷^{れい}クエタリ。主人^{しゅじん}綈^{けん}袍^{ぽう}戀^{れん}々^々、有^あ二^二故^こ人^{じん}之^の意^い一^一。即^{すな}チ寐^いタリ。」(行記とあり、細の綿入れを貸してもらい、暖かく睡ったようである。こうして鎌倉の第一夜は更けた。この句は「史記」范雎列伝からとっている。

鎌倉巡り 一 二日目

二日後の二七日の日には、牛門で雅楽を肄^{なら}う(稽古する)約束をしていた。但徠門下は唐楽の学習をしていたのである。一日も無駄にしないという約束を仲間と交わしたのもそのためだったのだが、結局間に合わない。三人で相談した。行きは東海道の南側を中心にしようと思画していた。護良親王の土牢や徠一覽亭の趾などもあるが、できるだけ早く出立して鶴岡と西の画島(江ノ島)を見、金河(神奈川)の宿に戻ればなんとか間に合うのではないかと。

一夜明けて二六日の早朝、まだ暗いうちに朝飯を済ませ、再び鶴岡八幡宮に詣でた。大猷院(徳川家光の時、一度大修理をしたが、それでももとの規模には及ばないと地元の人々は言った。鶴岡八幡宮はもと応神帝の廟である。治承年間に頼朝がここに八幡宮を祀つたのがはじまりである。華表は南に面し、中に放魚の池を掘つてある。池の中に小島が七つあり、その一つに小さな祠を建て、運慶の刻んだ天女像を安置していた。相伝では平重盛の家にあつたものという。天女の抱えている琵琶は重盛が弾いた物と伝えている。古物らしいものである。玦^{けつ}の字をなして左右から大池がめぐり、その合するところに赤橋という石橋が架けてあり、虹のような穹窿^{くわうろう}をなしている。昔は木を磨いて丹塗りにしたものであったのだらう。現在の石橋は特に赤い色でもない。石橋から一区画進んだところに、左右に木の柱を立て、横木を渡してある。人が通れるほどの高さである。これは馬を駐めるためのものだ。鎌倉の寺院や神社で、官寺・官社には決まってこの設備があるが、現時の下馬札に比べれば俗な感じはしない。真つ直ぐ北が山門で、阿吽^{あうん}の金剛力士二像を納める。扁額には「鶴岡山」とある。曼殊院法親王

良恕(正親町天皇孫、後陽成天皇弟)の書である。山門の東に多宝塔、さらに鐘楼がある。山門の中は舞殿となっていて、その東を少宮^{せうきやう}という。少宮というのは、仁德帝を祀つたところからの呼称である。(八幡が応神天皇を祀るので、仁德天皇がその若宮となる。)もともと源頼義が建てたものが由比の地にあつたのを頼朝の時、現在の場所に規模を拡張して移したものだ。応神帝の廟を建てたのも頼朝である。舞殿の北は石階で、西に十抱えもある銀杏の樹がある。丈は十仞に近い。言い伝えでは僧公曉が実朝をこの樹の下で弑したというが、真偽のほどは分からない。階上の平坦になったところに楼門があり、八幡

宮寺の額がかかる。これも良恕の書だ。左右は回廊が連なり、門内はすぐに八幡祠となる。祠堂の後ろの山を鎌倉山という。俗説によると、昔大臣藤原鎌子（鎌足）が所持していた鎌をここに埋めたという。そこで大臣山ともいうのだとか。この山の名から郡一体も鎌倉と呼ぶことになったらしい。祠の後ろは回廊がぐるりと巡っていて、その外はもう山裾である。西廊の外には頼朝の廟を建てて木像を安置してあり、白旗廟と号する。その西の石階の下には実朝の廟を建て、柳宮祠と呼ぶ。境内には他に仏殿・経蔵があり、小さな祠堂に至っては枚挙に遑がない。

この日、昨日金沢で会った貴婦人が鶴岡に詣で、老少の巫八人による巫舞（神楽）を奉獻した。年寄った者は緑衫朱袴、幼い者は白衫の姿である。手に金鈴を持ち、容儀正しく鼓の音に合わせて一前一却（進一退）するだけのものである。三人は舞殿の下に立つてこれを見た。これはわが東方の巫祝（神職）が鬼神（八百万の神々）を饗するものであり、もとより雅楽ではない。（この辺りは華夷思想を自らに反映して東夷と自称した徂徠に学んだ儒生の表現である。）しかし声容の美は都鄙尋常の巫祝の淫靡をなすものと同日のものではなく、古の遺風を認める。楼門に登つて下を見下ろすと、一路髪（はつ）の如く真つ直に由比濱（由比ヶ浜）まで延びている。海が遠くに耀いている。浙江の楼もこんな感じだろうか。しばらくして楽人の大石少年が現れ、我々のために宝庫から楽器を出して見せてくれた。中に仮面（仮楽面）が数枚あったが、どれも精緻な有様で、めつたに見られないものだ。その他はそれほどのものもなかった。やがて西の階段を降ると南向きの大門があり、門内は左右に十二の僧院があつた。ここに八幡宮の執事の僧がいる。雪ノ下里に行くとい自分の識つている隆真師の住する等覺院があつたのでこれを訪ね、少し話をしてから別れた。宿舎に戻つた時は日がもう高く上つていた（三竿を過ぎ）。すぐに朝食をとつて再び出かけた。

雪ノ下から西北に巨福路（小袋阪（行記））に行く。道の左に円応寺があり、運慶が地獄に落ちて閻羅王を見、蘇生して造つたという閻魔の木像を安置してある。世の愚人は見たとこもない閻魔を畏れ崇拜しているのだ。この像はふだん厨子に入れて鎖してあり拝むことができない。これは錢を取つて像を見せようというのだ。三人とも見たくもないから長揖して出た。坂を下つて建長寺を訪ねる。寺は道の右方にある。建長年間、平時頼（北条時頼）が宋僧蘭溪道隆のために建てたものだ。これも関東五山の一つである。外門が二つあり、東のものは南に向き、海東法窟の扁額を懸け、西のものは西に向いて天下禅林とある。どちらも朝鮮の人竹西の書である。東野は麗奴の署するもので、墨猪肉太（ぼくちく）の字にして観るべきものはない、と言った。東門を入つてしばらくすると西に大門を建て、巨福山と署してある。趙子昂（諡文敏公）の書というが遽かに信じ難い。元僧一山（一山一寧）の書とも、趙子昂の書とも伝える。大門の北に楼門があり、建長興国禅寺とあるが、これは宋僧子曇（西澗子曇）の書である。余りに大きな扁額なので楼の下に懸けてある。門は元来もつと大きなものだったのだろう。規模の

違ひは他のものも同様であろう。仏殿があり、丈六の地藏菩薩の立像がある。仏殿の西北は方丈で、時頼の木像がある。方丈の前の小さな池には石製の螭（うし）を置いてあり、その口から出る水を金龍水というそうだ。その東の西来庵は大覚禅師の祠堂である。寺は衰えたが、鬱蒼とした木々は懐古の念を起（おこ）させるたすまいだ。

法窟門を出ると杉谷天女祠（杉ヶ谷弁財天。現存せず。）がある。巖を削り、門を造つてある。祠の後ろに石洞があり、澄んだ水が溜（ため）っている中に石像が置いてある。洞窟を出て、新井閻羅（新居閻魔堂）を尋ね、西北に進むと、道の左に長寿寺がある。これは源基氏（足利基氏）が父尊氏の廟として建てたものだ。すでに衰微して見るべきものもない。春台と東野は寺を振り返つただけで歩み過ぎたが、崑崙（こんろん）だけは中に入つて調べていた。

余（われ）と藤生（とうせい）一顧（ひと）視（み）して而（しか）過（す）ぐ。山生（さんせい）獨（ひとり）探（たん）レ之（これ）。（湘中）

建長寺の西北に畑が数頃、数百畝。一畝は百歩四方、約一・八アールである。これは上杉憲頭（初代関東管領）の邸跡で、子孫が上毛の平井に移るまでここに住んでいた。その西北が明月院で上杉憲方の創建である。門を入つて左折すると禅興寺がある。もと最明寺といつた。これも時頼の創めたものだ。今は廃寺になつて仏殿だけが遺つている。ざつと調べてそのまま寺を後にした。今度は左手に浄智寺があり、明月院と正対している。この寺は平時時（北条師時）が建てた禅刹で、やはり五山の一つである。今はすっかり衰えた。浄智寺の西北を松岡と呼び、東慶尼寺がある。平時宗（北条時宗）の妻で貞時の母となつた藤氏が尼となり覺山と号した。それがここに寺を造つて住したが、後（のち）で貴家の女が多く得度した。そうして尼僧の叢林となつたのだ。重門を建て、出入に誰何（たれいか）する。第二の門に札を立て「禁男子入寺」とある。男子禁制が寺法である。世間の女子で尼を志願しながら父兄に許されない者が、一たびこの寺に入れば、父兄といえども離縁せざるを得なかった。地元（おとこ）の人の話では、良人を悪（にく）みながら去ることのできない婦人や、浮気をしてその発覚を懼（おそ）れたり、もたら再嫁（さいか）を欲する者たちが断髪してこの寺に入つた。別居して二年を過ぎ、再び髪を蓄えて世間に戻り、改めて他処に再嫁するのだという。お上にも明文化された法規はなく、前夫もこれをどうすることもできない。淫婦の叢林とも言われるゆえんである。

ここを出るともう円覚寺が右手にあり、東慶寺と向かい合つている。これは弘安年間に時宗が宋僧子元（無学祖元）のために創建したものだ。こゝまた五山の「刹（しやく）である。外門は廃れている。大門には瑞鹿山とあり、「天皇彌仁」（後光厳天皇）の書である。大門の東の小門を外門にしている。山門も廃れている。春台はまず帰源庵のありかを寺僧に尋ねた。小門を入つてしばらく進んだ東方、もと識つていた岱西堂師の許に立ち寄り、本寺の故事を尋ねた。師は茶菓で一行を供応してくれ、難僧（なんそう）の良蔵主

という人に案内させてくれた。帰源庵の北の山上に鐘楼があり、大きな鐘を懸けてある。鎌倉の諸名刹の中でも、この鐘ほど大きなものはない。厚さ一尺ほどもあり、子曇の銘の後ろに正安年間に鑄造したものであることを記してある。鐘を敲くと、非常に清澄な音が響き渡った。僧の話では鐘を掛けた鉄製の環は刀鍛冶正宗が鑄たものであるという。

鐘楼の西北に方丈があつたが、ひどく荒廃していた。さらに西北に一里ばかり進むと山裾に正統院があり、これは本寺の開山である仏光禪師（子元）の祠堂である。禪師は宋の人で、平時宗がこれ招いて寺を建立した。祠堂には禪師の木像を安置する。厨子を開いて拝むと、儼然として華僧の容儀をしている。極めて精巧な像で、顔は恰も生きているかのようなうだ。金字の札を立て、慈照とあるのは時宗が手書したものだ。（無学祖元の諡号を円満常照国師というのと関係があるか。）所蔵の円硯は斑模様様の石製で、さしたしが一尺以上もある。これは禪師来日の行李にあつたものである。方丈の西南には仏殿があり、大光明宝殿とあり、後光厳天皇の宸筆である。釈迦の木像その他を置いてある。仏殿の横に僧堂がある他は一体に荒廃している。この辺の山は低くて建長寺に及ばない。荒廃の度もさらに進んでいるが、遺跡を回ると往時の宏麗さが偲ばれる。関東の仏寺の中で、建長寺に比肩するものはこの寺だけだと謂つてもよからう。だからここを訪れる者は必ず奥まで参り、そしてこの道に戻るのだ。

長寿寺の横を南に折れ、亀谷坡（亀ヶ谷切通し）を渡り、扇谷を下ったところで道を歩く一老僧に出会つた。崑崙はこの僧にこの辺りの名所で見るときがあるかと尋ねた。僧はこの辺りで名所でないところはないと答えた。崑崙はなんだという顔して、そのうち華語で僧の悪口を言つた。僧は何を言われているのか分からなかつた。三人は手を叩いて笑つた。

山生問、此ノ地、亦、有、二名區、可、探、者、一否、僧曰、四境之内、無、三處、トシテ、不、二名區、ナラ、一。生、無、然、タリ。少、焉、ク、シ、爲、シ、テ、二華語、一、以、罵、レ、之。僧聞、ケ、ド、モ、不、レ、諭。我、三、人、抵、掌、而、笑、フ。（湘中）

西に進むと妝坡（化粧坂）の坂下に出る。景清が囚われたという地牢（土牢）が左下の山裾にあつた。堀（土橋）が崩れ落ちて、確かにこれだとも見分けられない。切通しの北を梅谷という。ここから戻つて泉谷に行き、花光寺（華光院。廃寺）を過ぎ、浄光明寺を左手に見る。これは建長年間、平長時北条長時の創建だが、もう荒廃していて仏殿だけが存している。仏殿には弥陀の木像を据えてある。裏山の上に為相の墓があるという。崑崙はこれを探ねようとした。東野は疲れて登る氣力がなかつた。春台は時間がかかつてこのままでは進まないぞと言つた。そこで尋ねるのは止めた。

山生欲、探、之。余恐、移、晷、尼、之。乃、止。（湘中）

戻つて亀谷に行き、英勝尼寺（英勝寺）を通る。これは大田持資（太田道灌）の邸の跡だ。持資の玄孫が尼となつて名を清春といい、水戸の威公（徳川頼房）の女を得度させ、五峯と名づけたこの尼に寺を与えたので尼寺となつた。広々としていることは東慶寺の比ではないが、やはり男子の入門を禁じているので立ち寄ることはできなかった。この辺りに「扇の井」があり、扇谷の名の由来となつているが、井戸の口が扇の形になっているというだけのものだ。尼寺の西を源氏山というが、昔は武庫山とか亀谷山といい、亀谷の中央にある。言い伝えでは、源義家が奥州征伐の時にこの山に登つて東国の兵を集め、白旗を揚げたので源氏山または旗揚山（遊湘では「建旗山」という）とある。扇谷・梅谷・泉谷はどれも亀谷の別名である。

英勝寺の北隣が寿福寺だ。もと源義朝の邸だつた。源頼義は奥州征伐の時、子の義朝を家に留めた。義朝はここに住んだ。頼朝の時、岡崎義実が義朝のためにここに寺を創り、その後池禪尼が寺を修復した。僧栄西の像を置いてある。それから五山の最古のものとなつた。殿堂は皆廃れ、仏殿ばかりを残している。竹籠釈迦像（釈迦の乾漆像）を安置する。仏殿の西、南山の腰に千光国師（栄西）の祠堂がある。その後ろの巖穴に石塔があり、実朝の墓と言ひ伝えられているが、恐らく誤りであらう。およそ鎌倉のいわゆる五山は長い間衰替のままに置かれていた。当時の規模を観るべきものは、建長寺・円覚寺を数えるばかりで、寿福寺・浄妙寺・浄智寺に至つては見るかげもない。寺の序列では建長・円覚・寿福・浄智寺・浄妙の順となる。これは義満の命じたものだ。

さて寿福寺を出て南に行く。道の左に畑があり、これは上杉定政の邸跡だ。藤ヶ谷を過ぎ雪ノ下に来て、鉄井（鉄の井）の鉄観音を観た。ここを過ぎて東に折れ、また北に曲がり、雪ノ下の宿に戻つて昼食をとり、主人に酒を頼んだ。村の酒は醴（甘酒）のようだ。数杯重ねたが酔いに至らない。新酒でまだ熟成が足りないせいだ。すでに晨（昼過ぎ）になり、再び道を鶴岡の東にとつた。在柄天神を過ぎて東北に向かい、田の間を通つて山村に入る。雪ノ下から三里余り行くと覺園寺（覺苑寺（行記））に至る。これは永仁二年、平貞時が創めた所だ。薬師仏の木像を安置し、他には地藏殿がある。そこから南に一里ほど戻ると、山の下にある田んぼは東光寺跡である。その東の山裾にまた土牢があり、源直義（足利直義）が兵部王護良親王を尋殺したのはここだ。荊棘を分けて中を見ると、深さ一丈半、広さもそれくらいの巖穴である。入り口はすばまり、中は広く、二十人くらい座れそうだった。ただし穴の口が崩落しているので、少し中をうかがうとすぐに出た。その東南に理智光寺があり、山の上に親王の墓があるというが、そこへは行かず、ここから東に向かった。二里ほど進み、嶺を渡つて瑞泉寺に出た。

瑞泉寺は大きな山寺である。山に入つて半里ほど行つて、始めて寺門があつた。寺そのものはそれほど結構の大きなものではない。貞治年間、基氏が造営したもので、夢窓国師の兎裘（隠棲地）である。殿宇は荒廃し、昔の佛をほとんど残していない。東北の山頂が徧界一覽亭の趾である。石段はうね

うねと折れ曲がり、坂は険しい。九十九折を登り切ると、数十人が座れるほどの平坦な場所に至る。今では亭の礎石が残るばかりだ。岡が重畳し、下は深い谷に臨む。西南を望見すると、蒼海が天に連なり、遠く富士箱根、近くは湘中（相模国中の山々が一望のもとにあり、応接に暇がない。実に都の勝景であるが、例のごとく酒がない。未練を残しながら坂を下りると、寺僧に遇った。僧は席を設け、茶を命じ、三人をあたたかも故旧のごとくねざらつてくれた。春台が亭のいわれを尋ねると僧は話した。国師が京都の乱を避け、関東にやつて来たので、基氏はこの寺を国師のために建立し、錦屏山と号した。楓の樹が多かったからである。国師はここに老年まで住した。そして亭を造つたのである。その後、亭は何度か修復され、近年では水戸の義公（徳川光圀・梅里君（行記））が再修し、賜宴があつた。ところがまた大風のために壊れてしまい、もう三年になる。まだ再造の話がないのが痛ましいことだ、云々。三人とも響みに做わらない者はなかった。僧はまた国師の祠堂に案内してくれたので、国師および基氏氏満の木像を拝むことができた。さて出ようとすると、僧がもつとゆつくりしていらつしやいとなお引き留める。聞くと、自分は岱西堂と親しい者で、さつきあなた方を帰源庵で見かけた。これも何かのご縁であらうかという。僧の名を尋ねると節首座と答えた。深く感謝して別れた。

またもとの道に戻り、頼朝の政庁趾を過ぎて滑川の橋を渡り、宝戒寺に到着した。ここは北条氏の館趾である。北条氏が亡んだ後、尊氏が寺を建て、僧円観を据え、北条氏の霊を祭らせたのである。寺はもと葛西谷にあり東勝寺と号した。そこは北条氏の墓のある所で、高時が家臣と自決した場所である。尊氏は寺を現在の地に移し、現在の名称に改めたのだ。地藏尊その他の諸像がある。また徳宗廟というのは高時を祭つた祠である。東南の田んぼが葛西谷だ。今は宝戒寺の寺域となっている。そこから出て南に向かった。道は平坦になり、小街（小町）という。鎌倉の市街である。宝戒寺の南を俗に塔衛（塔辻）と呼ぶのは、道路脇に小さな石塔が点々とあるところからいう。一体、鎌倉府の街衛には往々古石塔が見える。所伝では藤原鎌子の玄孫太郎大夫時忠（染屋時忠）という者に三歳の子供があつた。ある日、鷺鳥（鷺や鷺鷹の類）が襲つて連れ去つた。捜していると道に遺骨があつたので収めてこれを葬つた。そして石塔を建てたという。これも真偽は不明である。小街を過ぎて東に折れ、蛭子橋を渡り、南に折れると道の左が比企谷といい、比企能員の宅趾である。能員の姑は將軍頼家の妾となり、後に將軍頼經の夫人となつた娘を産んだ。そして能員とここに住んだ。能員は北条氏を謀つてかえつて殺され、比企氏は遂に亡んだ。その子の三郎は逃げて僧となり、順徳帝に仕えて寵せられ、帝に従つて佐渡島に渡つた。頼經が將軍となつた時、三郎は鎌倉に帰り、故宅を寺となして妙本寺と号した。そして僧日蓮を置いた。この日蓮がその法を弘めたのは、この寺に始まるのである。（春台の「湘中紀行」には、三郎と頼經を罵倒する文が続くが、それは儒家の立場からのものとして省略する。）

妙本寺の南を大衛（おおまへ）という。そこから古康莊、花谷、石井松葉谷を経て、そこを東に折れると田代観

音がある。これは田代信綱の遺跡である。今は寺となり、普門寺という。やがて道は海浜に近づき、名越の漁村を通ると切り通しがあり、大小嵯峨という。伊豆との国境である。道の左に補陀洛寺がある。これは僧文覚の遺跡である。この時、日はもう暮れ方になつてた。足も痛くなつてきたので、門まで来て引き返した。小壺の漁村を南に抜け、浜辺沿いに東行して二百歩と行かないうちに光明寺があつた。これは平経時が僧良忠のために建てた寺だ。初めは佐介谷にあつたが、後にここに遷つた。外門は西に向き、中に山門がある。額には天照山とあり、天皇彦仁（後花園天皇）の筆である。寺は結構がほぼ備わり、正殿を良忠祠堂といい、記主禪師と題額する。春台が尋ねた瑞三師には遇わなかつた。碩上人が遺つてくれた師の書を寺僧に渡して、寺中の名物を見せてもらった。案内の僧は殿堂を巡り、記主禪師の木像その他の像を拝観させてくれた。最後に寺の後ろの山に登つた頃にはもう黄昏になつてた。海天蒼茫、上下の境も見えず、山を指してもその形すら判然としない。漁火と星明かりが相映じて、真つ暗な中に耀いて見える。もし白昼に登つたなら、この趣は知らなかつたことだろう。図らずも名勝を一つ加えた形になつた。すつかり暗くなつて下山すると、僧が茶を淹れてくれ、もうすつかり暮れてしまつたので、ここに泊まるか、または明日またいらつしやい。そうしたら、本寺の重器もお見せしましようという。それは辞退して僧の名を尋ねると鑑全だと答えた。親切の礼を言つてもとの道に戻り、大衛・小街を過ぎて雪ノ下に戻つた。

今日の崑崙の健脚ぶりは、春台・東野以上だつた。至る所を訪れ、とくに古墓を尋ねた。東野は崑崙には「古墓の癖」があるのだ、という。さて宿に戻つてから一気に疲れが出、足がまた腫れそうになり、急いで薬治（灸治）を頼む騒ぎとなつた。春台と東野の足は平気なものでつた。春台は崑崙には「坐癖」の病があり、二六時中座しているからなのだと思つた。主人は懇々と鎌倉時代の話をしてくれた。現在の物寂しく荒廃した様子を見ると、別世界のことを聞いているようだった。

是日山生之健、過_二於我二人_一。凡_ソ所_レ經ル名區、莫_シ不_ズ推_レ尋・搜索_一。最_モ尋_ニ古墓_一。藤生以_テ爲_ス古墓_ノ癖ト。及_ビ反_ニ旅次_一也、疲_レタリ矣。其_ノ足_ヲ將_ニ復_ニ腫_レ起_セト、遽_ニ求_ニ藥治_一。我二人則_チ自如_ニタリ。山生蓋_{シテ}坐癖_ノ疾_ヲ爾（湘中）

長谷、腰越から江ノ島へ

二七日、明るくなるともう出立した。主人は妻と共に現れ、境内の尽きるころまで見送ってくれた。その温かい心づかいは終始変わらない。初めただの旅宿と思つていた自分たちがこれほど真心を尽くしたもてなしを受けたのは、誠にありがたいことだった。下男下女、奴僕の種類まで主人の言いつけに

謹んで従う有様は、この地方のならわしであろうか、それとも主人の手柄のせいだろうか。雅楽に感銘したのでもあつたらうか。

鶴岡をまっすぐ南に下つておよそ五里の道のりを一気に海辺に出た。両側はこんもりと茂った松並木である。途中、華表が二箇所あるがどれも堂々たる大きなものだ。もともとは三つあり、三つめは今でも海中に立っていて、潮が引くとその天辺が見えることもあるという。馬道を西に折れ、畑道を行き、蜷桑祠(甘縄神明社)に立ち寄り、稲湍河(稲瀬川)を渡つてさらに西に進み、光則寺に至る。宿屋光則の邸趾である。言い伝えでは、日蓮の弟子日朗が囚われて宿屋氏の土牢に押し籠められ、また日蓮も斬られようとした場所であるという。日蓮が斬罪を免れたとき、日朗も赦免された。それ以後寺として、日朗を住まわせたのだ。当時の土牢が現存しているので見ると、土窟(土倉)である。いったい府中の山にはこの穴がたくさんあり、どれも岩肌を鑿つて造つたものだ。四角いものやそうでないものもある。恐らく物を納めたり人を閉じ込めたりしたものだろう。その他はたいがい昔墓地として使われていたものがほとんどである。俗に櫓と呼んでいるが、何の意味であるかはわからない。大きなものは番兵を置き、外敵を窺(うかが)へたものか。土牢があるのも怪しむに足りない。ただし、護良親王を閉じ込めた土牢は、見る者の心肝を寒からしめる。尊氏兄弟が敢えて親王を亡き者にしようとしたほど畏れていたことがわかる。

光則寺の前を北に折れ、大仏に詣でた。建長の頃に鑄造した盧遮那仏の銅像だ。趺坐した高さが四丈もあるのがひときわ目立つ。南都(奈良)や平安(京都)のものに比べれば大きさは半分ほど、しかも東都のものは殿堂がなく、露天仏となっている。どれくらい経つたものか分からない。仰ぎ視てから、もとの道に戻つて長谷寺を訪ね、観音の木像に参拝した。この木像もまた丈が三丈もあり、異彩を放つて東面して立っている。大和の長谷に倣つて造られたもので、土地にも像の名をつけ長谷と呼んでいるのだ。山を下りて西南に向かい、景政祠(御霊神社、鎌倉権五郎神社)に寄り、星月里(星月井)を経て極楽寺に着いた。これは平重時が創めたもので、やはり今では衰えている。

門を出て南行する。山を鑿つて道を作つてある。極楽寺洞門(極楽寺穿道(行記))と呼ばれるのがここだ。雪の下から六里の所である。ここを過ぎてやがて海に出る。稲叢(稲村)という。源義貞(新田義貞)が鎌倉を攻めた時、海神に祈願したところ、潮が五六里も引いたという。ここは鎌倉の廓門(外側の入口)でもある。さらに西に進み、腰越に至るまで七里浦(七里ヶ浜)という。沙が深く膝を没するほどで、磯貝(二枚貝)が沙にまじり、爛(爛)といろいろな色が混ざつてまるで落花を藉き詰めたようだ。女の子たちが喜んで拾い集めている。他にまた一種細かい粒子の沙があり、真っ黒で炭の粉のようだ。手に取ると鉄粉ほど重く、光を帯びている。これを鉄沙(砂鉄)といい、鉄器を磨くのに適しているので旅人はこちらを集めている。われわれ三人も鉄沙を集め、磯貝を拾つて行李に一杯入れ、時の経つのも

忘れて夢中になったが、互いに戒めて道に戻り、行逢川を渉つて腰越に行った。これまで崑崙は途中へとへとなつて何度か行李を放り出そうとしたくらいだが、こへ来て甚く元氣になり、貝だの沙鉄だので行李を一杯にした上、なお拾いながら歩いた。しかし、行逢川に来て、草履のみならず脚絆まで泥沙に没するに及び、ほとんど足枷をはめられたような有様になった。珍しいものを見てすっかり満足したせいで疲れを忘れてしまったのだ。

先是(さき)是(こゝ)山生(さんせい)慊(げん)欲(ほ)スル棄(す)テ二行李(かうり)一者(ひと)數次(かずじ)ナリシニ、縁(よ)リテ三疇昔(ちゆうせき)覽古(らんこ)投(な)ズルニ、其(そ)所(ところ)ニ一好(この)也(なり)。此(こ)ノ日豪(ひかう)ナルコト甚(は)ダシ。併(て)ニ撥(は)キ、磯貝(いそがひ)鉄沙(てつさ)ヲ、半(な)ハリス。二其(そ)行李(かうり)ニ。一且(かつ)ツ撥(は)シ且(かつ)ツ歩(ある)ス。涉(わ)ルニ行逢川(かうりがわ)ヲ。水没(みづぼ)スニ其(そ)屬(ぞく)(麻靴(まか)・藥靴(りやくか))ヲ。一及(およ)ビ二平(へい)行(かう)膝(ひざ)ニ、脚絆(けうはん)ニ、而(しか)沙(さ)益(ますます)深(ふか)ク。水沙(みづさ)相(あ)粘(ねん)シ。脚重(けうじゆう)キコト如(ごと)シ。帶(お)フルガレ、欽(あ)ク(足枷(あしか))ヲ。以(も)テ三目(め)飲(の)クヲ。二非常(ひじょう)ノ之(これ)観(かん)ニ、忘(わす)ル、二其(そ)勞(ろう)一耳(みみ)。(遊湘)

左側の崖の海に突き出たところが小余綾(こゆるあや)小動である。右に回つて腰越の漁村に入る。磯臭いので鼻を蔽つて通り過ぎる。腰越は鎌倉の都門(内側の入口)だ。満福寺を訪ねた。寺僧の話に、所伝では源義経が平氏を滅ぼし、宗盛をとらえて帰り、こまで来た時、頼朝が通行を許さず、鎌倉に入る。ことができなかった。そこで大江広元に書を送り、自らの冤(えん)を訴え、弁慶に書かせたという。ここがその場所である。昔の宿駅の建物は寺の後ろにあつたのだらう。弁慶の書いた手紙が今も本寺にあると云々。春台は聞きながら、むろん手紙など贋物だと分かつたので、見たいとも所望しなかつた。庭には石泉があり、弁慶が硯の水を取つたところであるという。さて満福寺の西が龍口寺である。ここは日蓮が囚えられて処刑されようとした場所を後に寺としたもので、ここにも土牢があるという。われわれはもう土牢を見るのが嫌でもあり、先を急いだ。足が重い。東野が崑崙を振り返ると、先ほど抱つた貝や石をとうに棄ててしまつていた。腰越の西にまた漁村があり、偏湍(へんた)片瀬(かたせ)という。その西は平沙が広大に広がっている。そのまた西を砥上(とみかみ)といい、どれも名勝であるが一目に見渡される。腰越の人家は水涯(みづぎ)から百歩と離れていない場所であり、南に画島(え)江島(江島)江島(江島)二行記(二行記)が望見できる。

顧(かへ)レバ二山生(さんせい)一、則(すなは)チ棄(す)テ二其(そ)所(ところ)一ニ撥(は)キ久(ひさ)シ矣。(遊湘)

画島(え)はここから三里と離れていない。潮が満ちれば舟で渡り、潮が引けば歩いて行くことができる。水が深ければ着物をからげ、浅ければ裾をたくしあげて、状況に応じて徒渉(とせう)するのだ。(原文「属掲随宜」。詩経の深厲浅揭を踏まえる。)また、駄壮夫(だそうぶ)人足(ひとあし)がいて、肩に人を担いで渉り、駄賃(だちん)をかせいでいる。素裸で渡し場に群集し、わいわいがやがやと客引きに余念がない。春台たちが渡し場に来たとき、ちょうど潮は引いていた。だが水に不馴れなうえ、肌脱ぎになるのも嫌だったので、皆肩に担いでもち

で涉った。そんなわけで水が深そうに見えたところも楽に進むことができたが、無事渡りきるや、さらに上乘せの駄賃を要求してきたので、聞かぬふりをして過ぎた。まことに鄙しい者たちの貪欲さは限りがなく、憎むべきものである。渡し口を出ると、左右どれも漁師の家ばかり。すぐに山に登った。店が隙間なく並んでいる。中腹に天女祠（弁才天）があった。これを下祠（下社）と呼んでいる。これは応永年間、慈悲上人と号した僧良真が実朝の命で建てたもので、弘法大師の刻んだという天女像を安置する。左折してさらに石段があり、大きな青石がある。福石という。さらに道らしきところを通る。左は岸壁が数十丈も切り立っている。鎌倉が見えた。右手は樹木がまばらに生えていて、所々に鱸（小魚）の休憩所、権店（行記）があり、旅人がひと休みできるようにしてある。二里ばかり行くと山頂に楼門があり、竇（潜門）のようにして入るのがちよつと雅趣を感じさせる。入ると大きな天女祠があり、これを上祠（上社）という。仁寿年間、慈覚大師（円仁）の建てたものという。大師が刻んだと伝える天女像がある。

華表があり、金亀山とある。これは養和年間に頼朝がこの島に建てたものである。ここを過ぎて道は下りになり、右手にさらに天女祠があるが、これは近ごろ建てたもので、結構は上社・下社に及ばない。恐らくこの島では元来龍穴を神の住処と考えていた。そして、上弦の後、下弦の前、大潮になると、人はそこへ行くことができなかった。そこで神をここに祀つたのだ。したがって、龍穴が正しく本来の天女祠なのである。だから、龍穴と上下の弁才天とはそれぞれ別物なのだ。さらに左に旋り、山を回って西南に行く道幅が狭くなり、左は岩肌が切り立ち、岩の途切れたところに紺碧の水がのぞいている。何とも恐ろしい。ここを過ぎて左に曲がり、石段を下りると、険しい断崖が深淵に臨み、瓦礫の道になる。足を疎めることもしばしばである。瀧のようになつたところの右に小さな石段があつて、これをよじのぼって又降りると二十歩ほどの大きな石床になつて、そこに横木が渡してある。左の巖の中ほどに龍穴がある。穴の正面は二丈ばかりで南に向き、広さは一丈ほどあり、高さも同じくらいある。水が集まるところは、石を踏みながら入ることができる。穴の中は鵲（土鳩）がたぐさんいて、人に糞を墜すので避けなければならない。十余歩ほど入ると、ようやく狭くなるところに壇を築いて、上に小さな祠を建ててある。ここが天女の棲むところである。一人の僧侶がいて香を手向けている。この先、穴はますます窄まり、また暗くなるので、燭を持たなければ入ることができない。下僕が一人いて、炬火（たもつ）を持って客を案内する。三人は金を払って案内を頼んだ。岩角が突き出て、雪が滴り、歩きづらく、身を屈めて入っていくが、ますます狭くなる。両側には石仏が累々と数知らず置いてある。下僕は一々燭を掲げてそれを見せては来歴を物語るが、どれも厭うべきものばかりだ。四十歩ほど入つたところでは道は二つに分かれた。右が胎蔵界、左が金剛界である。それぞれ二十歩余り行くと、どちらも大日如来の像を安置してあつた。それから先はいよいよ狭くなり、匍匐してやっと入れるほどである。

だから入つた者もなく、どこまで続いているのかも分からないという。三人ともここで戻ることにした。そもそもこの龍穴は、伝説では昔龍が出た。そして島は天女の棲む島だった。弘法大師がここに天女を祀つてから、人はここを天女の棲処とした。鎌倉の盛時には雪雨乞いをここで行つた記録が東鑑に見えると聞いたことがある。海に面した諸州では山の根方に穴の開いていることがよくある。どれも大昔、人が開けたもので、これもその類であろう。これを神と見なせば神、妖異と見なせば妖異となる。神異ならばそれでよし、石仏を売り物にする店を構えるとは何事か。

巖穴を出てひと休みしていると、子どもが一人座つて釣をしている。よく饒舌の子で、洞窟についてあれこれ自分たちに説明してくれた。我々が戻るとき、子どもも釣をやめて帰り支度をした。道々話しながらもこの道に戻り、休憩所まで来ると子どもが言うに、自分は休憩所の番をして茶や貝細工・海藻類を売っている。しばらく休んでいらつしやいと。勧められるままに茶を飲み、貝細工を買つて出た。そうか、それで釣をやめたのか。大の大人が揃いも揃つて子どもの術中にはまって気づかなかつた。この子はずいぶん大漁だったなあ。他に碑などはないかと尋ねると、そんなものはないと答える。まあ、見るべきものはこのくらいのものでしよう。上社・下社を通つて戻つた。途中、話の分かりそうな僧がいたので、この辺りに碑などはあるでしようかと尋ねると、そんなものはありませんという。そこで、墓表のようなもので壊れたようなものがありませんかと聞き直すと、僧はなあんたという顔をして大笑いしながら、それならありますよ。あなたたちが蛮夷の語（異国の言葉）を使うから分からなかつたのだ、と言ってその傍の古碑のありかを教えてくれた。碑は良真が渡来し、慶仁禅師に会つて将来したものである。高さ六尺強、幅三尺あまり、厚さ五寸で、額には大日本国江島靈迹建寺之記の篆書があり、すべて剥落もせずに残っている。書き振りはすばらしいが、文字が読みづらい。縁取りの雲龍とても精巧だ。碑面は楷書だが、すでに剥落し尽くし、所々数字を読みうるに過ぎない。下の小楷も上下が剥離し、胴も横に罅が入っている有様である。希代の珍物であるのに、損壊のためその全きを見られないのが残念だ。近ごろ有識者がこれを継ぎ接ぎして建て直したという話を聞いたので、そのことを尋ねてみた。しかし、年寄でこれを知っている者はいず、多少文字が読めてもこれの何物たるかを知らる者もない。いろいろ尋ね回つたが、ついに分からなかつた。島人は神の恵みに馴れきつて、不文の者ばかりだ。春台は憤慨していた。古雅な文字に感心した崑崙が碑文を写そうとすると、東野がそれは鎌倉志に図が出ていると言つたので、止めた。客舎（休憩所、飯屋）で午食をとる。鮮魚は酒の肴によい。しかし宿は汚らしく、蠅が多い。そそくさと食つた。酒をとち思つたが、すっかり興醒めして止めにした。食い終わるや旅装を整えて出た。画島はとうてい行楽の場所ではない。初めの予想では、島の周囲は十里もなく、高さもほどほどだが、ごろごろとした石の山が海中に屹立してそれが趣味のあるところだ。一日訪れたくらいで見尽くせるだろうか、と思つた。さて実際に山を巡つてみると、確かにそうだった。

た。ただ残念なことにその神は福を司る神であり、そのために山はその名勝を擅にすることができないのだ。ああ、神は福を得れば墮落し、人は福を得れば鄙しくなる。山だけががんばっていても難しかろう。我々の興が醒めたのは、何も蠅のせいだけではない。帰る頃に潮が満ちてきたので、帰りは舟で渡った。

片瀬から北に田野を十里ほど行くと藤沢の宿だ。崑崙は江戸に上京の折、この宿を通ったことがある。東野と崑崙は清浄光寺に寄り、小栗判官の墓を探訪したが、春台は以前来たことがあるので同行を断わり、直行して茶店に待っていた。しばらくすると二人がやって来た。ここで崑崙は馬に乗ることにし、他の二人は徒歩で先に行った。徒歩の二人は十塚戸塚の宿に着いたが、崑崙の馬がなかなか来ないので茶店に待った。ずいぶん経ってから馬がやって来た。春台が「遅いぞ。」と言うと、崑崙は下馬して言う。「馬が遅いのでなく、お二人が早過ぎるのです。もう晡時(午後四時過ぎ)を回っていたので、春台は言った。「己達もすっかり疲れたが、まだ歩ける。この宿は江戸から一日の行程だ。ここで馬を捨てて泊まったら、明日はもつと疲れてしまう。このまま進んで程谷保土ヶ谷まで行つて下りたらどうか。」二人とも同意し、一行はそのまま進んだ。崑崙はまた馬に乗った。この道は昇り降りが多いが、東野はすくすく元気で春台でも追いつけない。崑崙はしきり追いつかなかった。今年の大風(台風)で、道のあちこちに倒木が散らばっていた。東野と春台が程谷の新街(新町)に着いた頃にはもう星が見えた。新街駅の右手には一本の老松が吹き倒されていたが、中はすっかり焼け焦げているのに、外の枝と樹皮はそのままだった。雷撃のために焼けたものと思われた。ところが地元で聞くと、風で折れた後にこうなったのだという。こんなことは古い本にはない。旅でぞ見聞できることだ、と東野は感心した。宿に旅装を解き、足を洗って帯を緩めて横になった頃、崑崙がやって来た。春台は画島ですっかり興醒めしたうえ、日暮れ時の道を歩いて疲れてしまった。そのみか、宿は退屈で殺風景極まりない。この旅行ももう早く帰りたいとなった。濁り酒でわずかに疲れを癒やすことにした。崑崙はというと懐手をしてほけつとしている。東野は春台と杯を差しつけて言った。「君は約束に背いて馬を使つたのだから、罰として一杯飲め。」崑崙は笑って答えた。「もちろんです。けれどもあなた方も雅楽の稽古に間に合わなかったではありませんか。一日も無駄にしないという約束はどうなつたんですか。」三人とも大笑いして互いに罰し合った。画島も坂東三十六所に下るとはいえないが、だいたい俗子されて碑一つ知る者もない。天下は利欲に趨る者ばかりで、鎌倉の古墓も半ばは贗物だが、まあしかたがない。皆で雪の下の主人の温情あるもてなしのことを盛んに話し合った。

余興ニ藤生一先行、抵二十塚山ニ。山生ノ馬遅。二人俟ツ。諸茶肆ニ。久シクテレ之ヲ至。余曰ク、遅矣哉ト。山生下リテ、馬ヨリ曰ク、非ズ馬ノ不レ進也。二子健ナル也ト。時ニ已過ク。晡余曰ク、吾儕實ニ疲レタレドモ、而猶可レ行。此驛去ルコト、東都一

一日程。舎テバ、馬ヲ則、舎テオ。奈、明日之勞ヲ一何セン。不ト、若シカ、三進ミテ、舎ツルニ程谷ニ。二子皆曰ク、善シト。遂ニ行ク。山生又乗レ馬。是道也。高下崎嶇タリ。藤生甚ダ健ナリ。余、且ツ弗レ如カ。山生終ニ及バ、二人抵レバ、程谷ニ。則ニ見タリ。星ヲ矣。就キレ舎ニ釋。二行装ヲ、洗ヒ、足ヲ緩。緩、レテ、帯ビテ、而臥ス。然、後山生至ル。(湘中)

山生袖ニシテ、手ヲ仰グ。屋ヲ。余ト與ニ、太宰、一、引キテ、一、爵ヲ。属シテ、酒を注グ。レ、生、曰ク、公既ニ背ク。レ、約ニ。請フ。罰ヲ。二、爵ヲ。蓋シ、山生此ノ日、跨ガレ、馬ニ也。生笑ツテ、曰ク、固モ也。然、レドモ、公等能ク及、二、肆楽ノ之期ニ乎。其、レ如、二、不、レ、曠、シ、ウ、レ、日、之、約、一、何、セン。乃チ大笑シテ、相罰ス。(遊湘)

二八日、朝早く程谷を出発した。皆旅の興も醒めて、そそくさと帰る。品川まで来た頃は、昨日没時(だつた)。飯屋で食ひ、飲み屋で飲み、元氣が出て来たので春台は言った。「今度の旅で良かったものが三つ、つまらなかったものが三つある。」二人は何のことかと尋ねる。「景勝地に行つて古迹を観たことが良かったものの一つだ。雨が止み天氣が穏やかで雨に降られなかった。これが二つめ。三人ともいろいろ歩き回つたが無事に帰れたこと、これが三つめだ。良くなかつたほうは、日程が限られていて、のんびり回れなかつたことが一つ、秋元と平野がうそを吐いたのと朝比奈が足を患つたことが二つめ、酒を携えなかつたことが三つめの欠点だ。」東野は言った。「それはそのとおり。でも画島から始めたならどうだつたかな。」春台は答えた。「その方が順当だつただろう。けれども、良い事があれば悪い事もある。これが物事の常だ。けつきよくは天運の然らしむところ。崑崙の言うとおり、天は二物を与えずというやつさ。」春台はそう言つて、崑崙と詩を賦して、以下酒になった。三人ともすっかり酔ひ払つて、それからさらに歩いた。そうして薄暮になつて春台は城北の家に帰つた。その晩、雨が降り出したので、もう一つ儲けた気分になった。この旅で春台が賦した詩は一九首、別記として載せた。(以下、「鎌倉賦」として詠史詩を連ね、「乱」を付す。)

(21)『湘中紀行』原文は「晁蔚宗『晁生』である。『遊湘紀事』にも『晁生』とあり、「鎌倉行記」には記載がない。但徠門で晁姓を名乗るのは朝比奈文淵と朝比奈朝夷(奈南山)があるが、南山は崑崙より年齒が若い。宇佐美瀧水『護國録稿』に徠門が安藤東野、服部南郭、晁蔚宗、太宰春台と共に瀧水を訪ねて詩を賦したとあり、「遊湘紀事」には鎌倉行を果たさなかつたのは足を病んでためたためと断つてある。崑崙に比べ、東野と春台が親しく「晁生」について書いていること、また『湘中紀行』に春台が崑崙を一行の最年少として、これに親炙している記事などがあればさらに明確になるだろう。長澤孝三編『漢文学者総覧』(汲古書院一九九二・三第四刷)にも「晁蔚宗」の記載はない。

(3・5)